
ノーベルにこんにちは

羽村奈留

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ノーベルにこんにちは

【NZコード】

N2127E

【作者名】

羽村奈留

【あらすじ】

『時の王子様編』2027年にノーベル物理学賞を受賞した加藤知子10歳の時の物語です。美形あり、初恋あり、ハプニングあり、そして物語は思いもよらぬ方向へ進行します。一人っ子の加藤知子は何を考え、その幼い瞳には何が映るのでしょうか。こちらは「ムーンチャイルド企画」書き下ろし作品です。

1：『嘘の王子様』の設定資料（前書き）

ネタバレはなーこので、お軽いお読み下せよ。せ。

1：時の王子様編の設定資料

主な登場人物

「加藤知子」

10歳。ショートボブ。一人っ子。独占欲が強い。
平屋の借家育ち。衣類・持ち物などの多くは従姉妹のお下がり。
大人になつたある日ノーベル物理学賞を受賞するらしい。

「知子の父」

30歳代。酒が大好き。某有名会社の経理事務をしている。
影の薄い存在だが、いざとなると頼りになる。しかし、それが裏
目に出る時もある。

「知子の母」

30歳代。美形大好き。北陸に実姉がいる。
挨拶ができる善い子になるように知子を躊躇っているようだ。

「山田美里」

10歳。ロングヘア。姉がいる。フリルのついた服を好んで着
る。

知子とクラスが違う。

「安田佳枝」

10歳。左右のお下げ。母親の勧めで花柄の服を着る事が多い。
知子とクラスが同じ。成績学年上位。

「相馬（父）」

50歳前後。加藤家の隣の借家に引っ越してくる。イタリア人と

日本人のハーフらしい。

「相馬（息子）」
20歳。身長185cm。イタリア人と日本人のクオーターラシ
い。

「ドン・ガルネオ」

60歳代。イタリアマフィアのドン。シチリアに点在する島を1
つ所有している。

「トロッキオ」

30歳後半。ガルネオの片腕。ガルネオに恩義があり、いろいろ
と尽くしている。

「三人の男」

ロイ。ベン。アル。年齢不詳。身体能力が優れているらしい。

「生田公雄」

50歳前後。物理学博士。いくつもの特許を持つ大富豪。
ノーベル物理学者の加藤知子を恨んでいる。

ゲームマニア。

「坂野（女）」

20歳後半。生田公雄とよく一緒にいる。

「カプリッオ」

トロッキオの孫。トロッキオの6番目の娘から生まれる。

ノーベル物理学者の加藤知子の経歴

1998年	誕生。
4月13日（月）。	岐阜県岐阜市の病院で生まれる。体重3 kg。
40kg	血液型A型。
1999年	1歳。
2000年	2歳。
2001年	3歳。
保育園入学。	
2002年	4歳。
2003年	5歳。
2004年	6歳。
2005年	7歳。
小学校入学	
2006年	8歳。
2007年	9歳。
2008年	10歳。
2009年	11歳。

今回は、こここの物語です（ファーストインパクト）。

2010年 12歳。

2011年 13歳。

中学校入学。

2012年 14歳。

2013年 15歳。

2014年 16歳。

高校入学。

2015年 17歳。

2016年 18歳。

2017年 19歳。

大学入学。

2018年 20歳。

2019年 21歳。

2020年 22歳。

2021年 23歳。

大学院生となる。

2022年 24歳。

できちやつた結婚。

2023年 25歳。

2024年 26歳。

2025年 27歳。

2026年 28歳。

新相対性時空移動理論を学会に提出。博士号を取得。
タイムマシン試験機により物体の時空移動に成功。
使用された物体は油性ペンのキャップ。
タイムマシン技術の特許を取得。

2027年 29歳。

ノーベル物理学賞を受賞。

2028年 30歳。

国際科学アカデミー時空移動研究所を設立。場所はガルネ才島。
時空移動研究チームの総責任者となる。

2029年 31歳。

2030年 32歳。

日本国立研究所の所長に就任。
時空移動研究のみをしたい理由から知子は所長就任を何回か辞退
している。

2・女神の婿養子になりたいっす

夜空は今日も晴れていた。

3人の男は今日のよだな月夜の晩がとても嫌いだった。

服装は3人とも上も下も黒。白い所が見当たらない真っ黒な姿は夜の背景にピッタリとはまり、何もまとっていない顔が宙に浮かんでいるように見える。

ズボンの左右のポケットに両手を入れた男が空を見上げる。

「雲一つ無い満月を喜ぶのは、狼と天文学者くらいのもんだ。やっぱり神様は、俺たちの味方になっちゃあくれない」

「淋しい事を言つなよ。ベン」

呴くように言つた男はポケットからタバコを取り出して口にくわえる。ライターで火をつけようとするが、ライターはカチカチと音を立てるだけで火がつかない。

「チツ。火の神様が意地悪をしやがる」

アタッショケースを持っている三人目の男が、自分のライターに火をつけてタバコの前に出した。

「兄貴、俺のを使って下さい」

「有難うよ、アル」

男はタバコに火をつけると胸いっぱいに煙を吸い込んで、口と鼻穴からゆっくりと煙を出した。

三人の男の前には太いビルがそびえ建つてゐる。ビルは塀に囲まれ、その頑丈そうな塀が、中にあるビルを守りながら、ビルを見上げてゐる三人の男を威嚇^{いがく}し、男たちの行く手を阻^{はば}んでいる。

塀の外は何も無いだだつ広い草原。所々にある監視塔^{かんしとう}がビルの周りを明るく照らして監視をしている。

ビルの玄関前には太い道が門まで伸びていて、門には太い鉄格子でできた扉があり、そこから道は外へと伸びていた。

三人の男は門の外の道の上に並んで立ち、月の光に照らし出された鉄格子の扉を見ていた。

真ん中にいる男がタバコを吸つてゐる。

右端の男はポケットに手を入れたベン。

アタッシュケースを持ったアルは左端に立つてゐる。

タバコを持つてゐる男が言つ。

「ハードボイルドな俺にとって、夜空にいる月の女神の微笑みは眩^{まぶ}しそぎるぜ」

ポケットに両手を入れたベンが言つ。

「口イ。俺なら、月の女神を誘惑するね

アルが冗談混じりに呟つ。

「兄貴。俺は、逆玉の輿で月の女神の婿養子になりたいっす

「その顔で婿養子だと。バカじゃないのか、お前は？」

ロイは口から煙を出しながら呟つと、短くなつたタバコを高く上げて、振り向くことなく後ろへ投げ捨てた。

ベンはポケットから手を出して振り返る。

「ロイ。タバコを捨てちゃあダメだぜ。罰金もんだ

アルも呟つ。

「もうひすよ。センサーに引っかかったら、オレたち捕まつてしまひますぜ」

ロイはポケットから出し帽を取り出して被る。

「なあに、見つかったら逃げればいいんだ」

ベンも出し帽を被る。

「奴ら、逃げてもしつこく追いかけてくるだ

アルも出し帽を被つた。

「まつ、捕まつても、オレは二回チン検査に引っかからないうらい

「いけどよ」

アルの一コテン話を聞いて、真ん中で喫煙をしていたロイは氣を悪くしたのか、少し乱暴な口調で言つ。

「つべこべ言つてないで、早く門を壊せ」

なぜか右にこるベンも口調が荒い。

「そうだ、早くしろ。お前が門を壊すのをオレたちは待つていろんだぞ」

アルは泣々歩き出した。

「本当に兄貴たちは、勝手な事ばかり言つんだから」

アルは、アタッシュケースを地面に置いて、ポケットから手の平サイズのカプセルを取り出す。カプセルをひねりカプセルについているメモリを合わせると門に向つて投げた。カプセルは地面に落ちたあと門へと転がつて行く。

三人は同時にゴーグルをつける。まるで訓練された者のよう。

ベンが聞く。

「時間は？」

アルが答える。

「30秒後」

ロイが言った。

「30秒は、遅いんじゃないのか？」

「兄貴、この前の時、20秒じゃ早いって言ったじゃないですか？」

ロイとアルが向き合つと、ベンが二人の間にに入った。

「言い合ひをしていても始まらんだろ」

言い切つた時、門は大爆発に見舞われた。

道路上にいた三人は吹つ飛んで地面に転がる。

ベンが叫びながら立ち上がる。

「バカヤロー、火薬多すぎだ」

ロイも叫びながら立ち上がる。

「二口チンをとやかく言つ前に、お前の火薬をどうにかしろ。早死にさせる気か」

アルも立ち上がった。

「頑丈な門だから火薬を多めにしろ、と言つたのは兄貴たちじゃないですか」

ロイとベンは言い返した。

「俺たちが怪我をするほど火薬を多くしないとは言つとひりん」

「そうだボケ」

二人の兄貴はアルを残して壊れた門へ走り出す。

「兄貴、あんまりだ。3日もかけて作った手榴弾なのに」

残されたアルも二人を追いかけて走り出した。

3：次は俺の出番か

同じ体系に同じ黒い姿。場所を入れ替わり立ち代りで走り出した
ら、傍田には誰が誰だか分からなくなつてくる。

だが、役割分担はきちんとされているようで、手榴弾を投げるの
はいつもアルで、必ずあとの一人を冗貴と呼ぶ。

手榴弾は玄関も壊し、三人に立ち憚る扉をも壊していく。

中は廊下と壁と扉だけで表札も何も無い。

ビルの警報装置が作動し、警報音を聞いた警備員が走り出す。

三人の男は、エレベーターを無視して通り過ぎ、その先にある階
段を上つて行く。

途中、出会つた警備員を殴り倒して氣絶させ部屋に連れ込み、警
備員の服を剥ぎ取つて着替える。

田出し帽を取り警備帽を被れば、ロイとベンとアルは立派な警備
員に見えてくるから不思議だ。

ゴーグルを隠して警備員に紛れて移動すれば、追われる事もなく
なる。

目的地の見取り図は頭の中に叩き込んだある。

三人の男は平然とした様子で目的地の部屋に到着した。

アルが目の前の扉に触り、ポケットから取り出したカード型の機械を扉に宛てがつて言う。

「兄貴、この扉は俺の手榴弾でも無理だ」

「だつたら、次は俺の出番か」

ベンはポケットからハンドライトを取り出す。

スイッチを入れて、ゆっくりとメモリを回していくと、ライトの光が白から赤に変わっていく。

赤い光線は扉を照らし、もう一つのスイッチを押せば赤い光は細い光線となり、光線は扉の上を這つて動き、扉に切れ込みが入つていく。

赤い光線が1周して最初の切れ込み跡にたどり着いた時、扉はズしてから床に倒れた。

三人の男は扉の中に入つて行く。

その奥にまた扉があるが、三人は入つてすぐに立ち止まつた。床にラインが引いてあるようにきちんと整列をする。

右端のロイが胸ポケットからタバコを出して口にくわえて言う。

「赤外線トラップだ」

三人のゴーグルには無数に張り巡らされた赤外線が見えているよ

うだ。

真ん中のベンがハンドライトの赤い光りを照射してロイのタバコに火をつける。

「赤外線に触れると、更にでかい警報音が鳴るか、俺たちが死ぬか

左端のアルが言つ。

「二二二まで来て、死ぬのは「メンですぜ」

アルが左端に立つのは決まっているようだ。

ロイは煙をゅっくりと吐き出す。

揺れる煙に赤外線が映り、網目状に張り巡らされている赤外線も揺れ動いているように見える。

煙が薄くなり赤外線が見えなくなつた時、ロイはタバコを前に投げ捨てた。

瞬間、閃光が目の前を走り、タバコはあつという間に燃え尽きる。

赤外線センサーが物体を感知すると、壁の光線銃が顔を出して瞬時に感知した場所を特定し、光線が撃ち込まれる仕組みのようだ。

ベンは口の端を歪めて苦笑した。

「二二二のシステムは、タバコ好きのようだ」

ロイはタバコの箱の中味を見ながら言つ。

「それは困つた。残り一本しかないから、かわいい娘以外は渡したくないんだが」

アルは体を揺らして言つ。苛立つてゐるようだ。

「兄貴、早くして下さいよ。警備員が来たら、まずいつすよ」

ロイはタバコを懐に入れる、変わりに銃を2丁出した。

「せつかちな男はもてんぞ」

2丁ともベレッタM92。

銃は両方とも手入れされていて黒光りしているが、表面の細かい傷が多く目に付く。

その2丁のベレッタを両手に持ち、まず赤外線の出所に撃ち込んで赤外線システムを壊していく。

自動システムが作動し光線銃が顔を出せば、撃たれる前に光線銃を撃つて破壊していく。

暫くロイと警備システムとの撃ち合いが続き、勝利したロイは銃を懐に入れからタバコを取り出した。しかし、タバコは吸えない。

ベンがハンドライトの柄を、ロイの手に載せているからだ。

「ロイ。残り一本のタバコは、仕事を終えてからだ」

「チツ、仕方ねえな」

ロイは面倒くさそうに舌を鳴らしてからタバコを懐に入れた。

左端で待っていたアルは、体を揺らしながら足を出して前に進む。

「全く、なんで俺はこんな兄貴たちについてきたんだろ?」

真ん中のベンも歩きながら言つた。

「金以外にないだろ、普通」

「そうだ」

右端のロイも歩きながら言つた。

三人は奥へと入つて行く。

手榴弾では壊せない扉。網目状に赤外線が張り巡らされた通路。下手に歩けば光線銃で狙い撃ちにされる。一体、そんな厳重な警備の奥に何があるというのだろうか。いや、三人がすんなり入れるような場所には何もないのかも知れない。

三人が歩く通路は一本道。狭くて扉すら見当たらぬ。

アルは、胸中の不安を膨らませて、それを隠すようにアタッシュケースを胸に抱いて、おどおどとした表情で言つ。

「兄貴。本当にこの先にあるんですかね?」

ベンは左手をポケットに入れて、ハンドライトを持った右手を前後に振つて歩きながら囁く。

「ああから行くんだる」「

狭い通路の先は、吸い込まれそうなくらい真っ暗で何も見えない。だがその闇が、空間の広さを意味している。

ロイはその闇を見ながら懐の銃に手をかける。

「どうしたんですか、兄貴？」

ロイは問われても答えない。無言で銃を出す。そして銃を構えてから口をきく。田をギラギラとさせて。とても嬉しそう。アリス。

「傭兵の俺が生き残つてきた理由。それは……」

「それは？」

聞きたがるアルの横で、ベンがハンドライトから細く赤い光を出す。光りが当たつた床は焦げてジューと音を出しながら煙を上げる。

「答える必要はないだろ。お前も傭兵なんだからないから」

「俺もっぱら分からないつすよ。兄貴たちみたいに傭兵長くやつてないから」

ロイは走り出す。闇に向つて。

「じゃあ、お前は死ぬだけだ」

ベンも闇に向つて走る。

「これは言葉で言つても分かるもんじゃないからな」

残されたアルは身震いしながらも小走りで一人の男に続く。

「なんで俺は、あんな二人と組んじまつたんだろう」

前を走る一人の男は不規則に蛇行しながら闇に向つて行く。

闇は静かに一人の男を待ち、男たちが闇に飛び込んだ時、闇の中を無数の光線が飛び交った。

4：ベレッタを両手に

通路で一人走るアルは叫ぶ。

「兄貴！」

光線はまだ闇の中を飛び交っている。

「こいつ時、俺はどうすればいいんだ……」

アルは、アタッシュケースを手放し、懷から手榴弾を取り出して両手に持つ。

「あんなに暗いのに、どうして戦えるんだ？」

怖くて汗がどんどん噴き出してくる。でも戦わなければ殺される。それが傭兵の定め。

「兄貴。兄貴。くつそー、俺も、俺も、やつてやるー。」

アルは闇の中に飛び込んだ。すぐに頭の上を光線がかすめる。反射的に床に転がり込み、更に一回転してから、身を低くして手榴弾を持った両手を振り上げて構えた。

「ここの野郎。てめえら、俺の手榴弾で全員ぶつ殺してやるー。」

アルが大声で叫んだ時、カチッと音がして辺りが急に明るくなつた。天井の照明が光つている。

アルは眩しそうに手を細めて、手榴弾を持った手を額に当てて底を作った。

周りにロイとベンはない。いろんな姿形をした機械が見える。

床には警備員の死体。死体はざつと数えても20以上はある。

2丁のベレッタを両手に持ったロイが機械の間から現れて歩いて来る。

「遅いんだよ。バーカ」

ハンドライトを持ったベンがロイの隣に並ぶ。

「終わってから来るな。ボケ」

「あにきいー」

手榴弾を持ったアルは脱力して床に尻をつけて座り込んだ。

きっと警備員との戦いは激しいものだつただろ。

だが、並んで立っているロイとベンの表情は、清々しい笑顔に満ちている。

たつた今20人以上を殺した傭兵とは思えないほどに、さっぱりとした表情をしている2人を、床に座り込んでいるアルは、まだ落ち着かない息を吐きながら見続ける。口の中に入ってくる無意味な汗が、なんとも言えない苦さをアルの舌に伝えた。

体育館ほどの広さがある室内に、機械はある一定の法則で並んでいる。その並びが何を意味しているかなんて、三人の傭兵は知らない。傭兵たちは、雇い主の依頼に従つて言われたとおりに動くだけ。

ベンは機械の一つに触れる。

「まずは年数のセットだ。何年だ？」

アルは立ち上がって爆弾を懷に戻しながら言つ。

「2008年つす」

ボタンを押して言われたとおりの年数をセットする。

表示された年数も確認して間違いない事を確かめる。

「セットしたぞ」

ロイは床に落ちていたアタッショケースを拾い、アタッショケースの表面に付いた埃ほじりを払いながら歩く。

「ここつを箱の中に入れる」

箱といつても、日本の茶室ほどの大きさがある。壁は金属でできているが材質は何か分からない。コニットハウスといったほうが早いのかも知れない。

そこにアタッショケースを入れてドアを閉めた。ハンドルを回してしっかりと閉める。

アルは箱の外壁を触つてその感触を確かめてからドアの窓ガラスに額をくつつけて中を覗く。

「兄貴、本当にこれがタイムマシンなんですかね？」

ベンが確認ついでに、別の窓からタイムマシンの中を覗く。

「でなければ、雇い主は俺たちを騙した事になる」

「だつたら俺たちも過去へ行きましょつよ。ねえ、兄貴？」

火のついていないタバコをくわえたロイが言つ。

「ダメだ。お前も雇い主の話を聞いただろ。人を飛ばすのは無理だつて」

「そうだ。人が乗れるなら、とつくの昔に雇い主が過去へ行つてゐるだろ。普通」

ベンは言つたあとに、普通と付け加える事が多いよつだ。それはベンの口癖か。

ロイは、並んでいる機械に次々と触れていき、雇い主から指示されたとおりにスイッチを順番に入れていく。

「おい、タイムマシンから離れる。作動させる。膨大なエネルギーがそつちへ行くぞ」

「兄貴、急いで離れるつすよ」

「あいよ」

ベンとアルは、年数が表示されている機械へ移動する。

機械のパネルはとてもシンプルにできている。

数字を入力する場所のほかはオンオフのスイッチしかない。

その機械から隣の機械へ、また隣の機械へと太いコードが伸びて繋がっている。

きつとこの広い室内にある機械全部にコードは繋がっているのだろづ。

タイムマシンは室内の中央にあり、タイムマシンの周りをコードで繋がった機械が囲み、それが輪となって幾重にも広がっている。年数を入力した機械も多少離れているとはいえ、そのタイムマシンの傍らにあった。

ロイは全ての機械のスイッチをオンにすると年数が入力してある機械に戻ってきた。ロイのタバコにはまだ火がついていない。

「冗貴、火いるっすか?」

差し出されたライターの火に手を翳す。かざ

「いや、いい。このタバコに火をつけるのは、タイムマシンを見送つてからだ。仕事が終わったら恰好良くハードボイルドで決めたいからな」

タバコを吹かしていないのに、なぜかロイの機嫌はいい。

「そうですね。へへっ」

断られたアルも機嫌よく笑顔でライターを懐に戻した。

5：仲良く三人同時押し

ベンは数字が表示されているパネルに手をつく。

「で、誰が発射のボタンを押すんだ？」

「そりゃあ、決まってるだろ」

口には、ハネルの上にあつたベンの手をボタンの上に載せる。

ベンは意外だと喜ぶ。

いしのが俺が押してもらひ

「何を勘違いしている？」

口にはベンの手に自分の手を重ねる。重ねてから首を動かして、黙つて突つ立つているアルに手を重ねると合図を送つた。

アルは自分に指をさして言う。

「兄貴、俺もいいんですか？」

ロイとベンは同時にハモって言う。

「たり前だろ。お前もメンバーなんだから」

「あにきこ」

アルは突っ立つたまま鼻をすすつて鳴らす。

「泣いてんじやねえよ、バカ」

「早く手を置けつて、ボケ」

アルは嬉しそうに一人の手の上に自分の手を置いた。

「俺、兄貴たちに一生ついていくつす」

「気持ち悪い事言つてんじやねえよ」

「」の前、そう言ってトイレにまでついて来ただる。お前は

なんだかんだと言いながらも「一人の兄貴はアルが大事なようだ。

アルも一人の兄貴との腐れ縁を今さらながらに感じて嬉しそうだ。

「えへへつ」

「泣きながら笑うな。バカ」

「」の変態野郎

そして、ボタンは押された。

ロイは、くわえているタバコを小刻みに揺らして言つ。

「今、ボタンを押したのは誰だ?」

ベンは首を横に振る。

「俺は押してねえ。お前か？」

「兄貴、俺も押してないですって。三人の手の重みでボタンを押してしまつたんじやないですかね？」

ロイとベンは顎を落とした。

「なにい！ 俺の……、ハードボイルド人生に傷が……」

「仲良く三人同時押しのセオリーが、ここぞという時に崩壊するとは……」

嘆いている一人の兄貴 + キョトんとしているアルの周りで、室内にある全ての機械は動き出し個々に青い光を帯びる。

光は外側から中へと円を描いてコードに沿つて移動していき、渦巻きキャンディの渦そつくりの光のデザインが浮かび上がり、螺旋となつた光の触手が中心にあるタイムマシンに触れた時、タイムマシンを中心に渦は背を伸ばして高くなり青い光の巻きとなつて立ち上がつた。

光の渦の中にいた三人の傭兵は、口を開けて身の回りで起こつている不思議な現象に見とれている。

「なんて綺麗なんだ」

「美しい」

「俺、生きていて良かつたつす

風圧はないよつで、感嘆している三人の頭髪はなびいたりしない。ただし、三人の体は、頭から金粉を被つたように煌き、それは金色の煙となつて少しづつ竜巻に巻き込まれていく。

「兄貴、これなんすか？」

アルは手を見せて言つ。アルの手は既に指の第一関節が消えてしまつてゐる。今もアルの指から金色の煙が立ち昇り竜巻に吸い込まれてゐる。痛みは全く感じないようだ。

「どういう事だ？」

ロイがくわえているタバコも金色の煙になつて竜巻に吸い込まれていく。

「俺たちヤバいんじやねえのか？」

そう言つべんの頭の上半分は消えて、残つてゐる顔から金色の煙が湯気のように立ち昇り竜巻に吸収されていく。

床にある警備員の死体も金色の煙となつて消えていく。

竜巻は光りながら回転運動を続け、三人の男の体が全て金色に光る煙に変わつた時、機械の外側から青い光がなくなつていき、光の渦は中心にあるタイムマシン上の竜巻だけとなり、その竜巻もタイムマシンに吸い込まれ、竜巻の背丈せたけは低くなり、青く光る竜巻はタイムマシンと共に消え去つた。

6：美少女戦士

事の一部始終をシステムは鮮明に録画していた。

竜巻が消え去った映像が映し出されているモニターを、椅子に腰掛けた白衣の男が見ている。

頭に白髪が混じった男の胸には名札があり黒字で「じくたきみお生田公雄」とプリントされている。50歳前後に見える。

生田は画像を巻き戻して、また青く光る竜巻が発生する現象を見始める。きっと何回も連続で見続けているのだろう。

生田は尻の痺れを感じてか、椅子に座り直して肘掛けに手を置いてから鼻から息を出した。

「まだ」」覧になっているのですか、生田博士？」

生田に声を掛けたのは女性。生田と同じ白衣を着ている。どれくらいためのか分からないが、その長い頭髪を束ねてねじつてあげて、解けて落ちないようにピンでとめてある。年齢は20後半だろうか。

生田は肘掛けにあつた手に力を入れてゆっくりと立ち上がった。

「実験が失敗に終わつたんだ。失敗の原因追究のため、何度も見直すのは当然だろ」

生田は歩いてコーヒーメーカーに手を伸ばす。

女性は生田の横に並び、生田より早くデカンターを取り出して、生田の目の前でカップにコーヒーを注いだ。

「だからといって、根を詰められて『病氣にでもなつたら』

女性は生田にコーヒーが入ったカップを手渡す。

「坂野君、有難う。そこまで年を取つたつもりはないんだが」

生田はコーヒーを口に含んでから、また続けて言った。

「私は悔しいんだ。大学在籍中に物理学の博士号を取得し、その大学も首席で卒業し、卒業後に書いた論文は世界に認められ、その論文を元にシステムを考案開発し、特許も取り、巨万の富を築いた私が、今では世に忘れられ、一介の博士扱いだ」

生田がカップを置いた机の上には、分厚いハードカバーの本が一冊ある。著者の名前は「かとうともこ 加藤知子」

生田は本を持ち上げる。

「新相対性時空移動理論。加藤知子。加藤知子。加藤知子。ノーベル物理学者、加藤知子」

生田の、本を持っている手が力んで震えている。眼球は血走って今にも毛細血管が切れそうだ。

「私と同期だったこの女の大学時代の成績は、下から数えたほうが早いくらいだつたんだ。なのに、新相対性時空移動理論でノーベル物理学賞をとつたとたん、国の要人扱いだ。今では日本国立研究所

の所長兼、国際科学アカデミー 時空移動研究チームの総責任者。お陰で日本国立研究所の所長の地位を失った私は、世間に笑われどれほど酷い扱いを受けたか

助手の坂野は椅子を引いて生田に座るように促す。

「生田博士、そんなに興奮してストレスを溜められてはお体に障ります」

生田は口から息を吐きながら坂野の顔を見る。

美人というほどではないが坂野もそこそこ端正な顔立ちをしている。上目づかいで生田を見る坂野の表情は、興奮する生田を心配していた。

生田は本を机に置いて坂野が掴んでいる椅子に腰掛けた。

「どうすれば、この女を超える事ができるんだ」

ハードカバーの本の表紙の端に加藤知子の顔写真がある。笑顔で映っている加藤知子は眼鏡をかけている。年齢は50前後だろうか。その加藤知子もまた、美人過ぎることのない普通のごくありふれた顔立ちである。

巨万の富を築き、欲しいものはなんでも手に入れる事ができる生田が、なぜこの女性ノーベル学者をライバル視するのだろうか。

「相対性時空移動理論は、先に私が唱えたんだ。なのに、この女が新相対性時空移動理論を学会に出して、ノーベル物理学賞を」

生田は拳を机に置いて、更に手を握り締める。

「なぜこの女が考案開発したシステムだけ、タイムトラベルが可能なんだ」

坂野は自分のカップにコーヒーを注ぎながら言つ。

「生田博士もタイムトラベルシステムを完成されていらっしゃるじゃないですか」

「私のタイムトラベルシステムは、まだ物体を100%完全なままで飛ばせん。特に人体へ影響が酷くてな、体の細胞が分子分解を起こして時間移動のエネルギーになつてしまつ。今回行つた実験でも、人間そつくりに作られた有機ロボットとはいえ、1体数億はする軍用の傭兵ロボット3体と、30体以上の警備ロボットを失つてしまつたんだ」

「また有機ロボットを使って、実践型戦略シミュレーションゲームで遊びながら、タイムトラベルの実験をしたんですね。前回のメインキャラクターは美少女戦士でしたが、今回のメインキャラクターはどういう設定に……」

生田の鋭い眼光が坂野を捉える。

坂野は、生田に対して言つてはいけない事を言つてしまつたと思い、急いで口元を手で隠した。次に生田が怒鳴るかと思い覚悟を決めるが、生田は首をうな垂れてしまう。

「仕方ないだろ。毎日実験ばかりしてては、さすがの私も飽きて

くる

たび重なる実験の失敗に生田の心身は疲れているようだ。

坂野は生田の机に歩み寄つて、その机にカップを置く。

「今回、実験に用いたアタッショケースはどうなりましたか？ また、分子レベルで崩壊したんですか？」

生田は頭を持ち上げる。

「どうだらうな。映像ではうまくタイムワープして消えたように見えるが」

会話をしている生田の部屋に、突然若い研究員が入つてくる。若い研究員の手には書類がある。

「生田博士、実験の分析結果が出ました」

若い研究員は加藤知子の本の横に書類を置く。

生田は書類に目を通す。

若い研究員の表情は嬉しそうだ。

「実験後、空間の残存物を計測分析した結果、やはりいつもの如く有機ロボットと思われる分子の存在がありました。ですが、アタッショケースの分子の存在は見当たりませんでした」

生田の表情から笑顔がこぼれる。

「有難う。よく調べてくれた」

坂野も笑顔になる。

「よかつたですね。生田博士」

生田は立ち上がり、若い研究員の退室を見送る。

「アタッシュケースは無事にタイムワープしたんだ。これで加藤知子を超える。今回の私の理論が正しければ、ノーベル物理学賞の受賞者は私ということになるはずだ」

「生田博士」

「坂野君」

生田博士は坂野と嬉しそうに握手を交わした。

7：ガルネオ島

広がる珊瑚礁。揺れるサファイア色の海。

ここはイタリア共和国、シチリア自治州にある、孤島。

孤島の名前は、ガルネオ島。

世界五大魔王の1人と謳われるマフィアのドン、ガルネオが所有する島である。

島にある全ての砂浜は、ガルネオのプライベートビーチ。

島に生えている椰子の実も全てガルネオのもの。ガルネオの許しなく椰子の実をとつて食べてはいけない。

平地には一階建てだが広大な土地を利用して作られた白い別荘があり、別荘内は召使いと思われる男女が行き来している。

広い庭には手入れされた芝生が一面を覆い、丸いプールもあり、プール際の女神像が持つ壺からは水が流れ落ち、常にプールにはきれいで清潔な水が満ちている。

そんなガルネオ島は今日も晴れていた。

ドン・ガルネオの一日は、庭が見渡せる部屋での朝食から始まる。

ガルネオの室内にいる時の服装はなんもありで、ガルネオは周りの視線など全く気にしない。頭の天然パーマも鼻の下のヒゲも手

入れ前の状態で、ガルネオ本人は恥じる様子もなく、太った体を揺らしてのんびりと優雅に歩いている。

今日もガルネオはパジャマ姿で朝食を食べにリビングに参上した。

召使いから渡された朝刊を、指輪が沢山ついた手で受け取る。

どの指輪にも、ガルネオの親指の爪より大きな宝石がついている。

赤はルビー、青はサファイア、緑はエメラルド、そしてダイヤモンド。白は真珠とオパールといったところだろうか。

極彩色な手は新聞を広げてガルネオの顔を隠す。

ガルネオが朝刊を読んでいると、召使いが朝食を持つてくる。

朝食はいつも決まった内容。

ヴェネチアングラスに入った冷えた牛乳。もちろんガルネオ島で飼育されている牛から搾^{しづ}ったものだ。

銀の卵置きに載っている温かいゆで卵。これもガルネオ島で飼育されている鶏が産んだ卵である。

緑黄色野菜がいっぱいのサラダ。やはりガルネオ島の畑で栽培されたものだ。

最後に丸い器に入れられたコーンフレーク。これだけはイタリアの首都ローマで購入している。

なぜ「ーンフレークだけが、ガルネオ島産でないのか？

それは　印のコーンフレークが一番健康によいとガルネオの母親が生前に言い残したからだ。

マフィアのドンといえど、ガルネオは60を過ぎた今でも母親の言ひつけを守っているのである。

最初、ガルネオは朝刊を読みながら片手でコーンフレークに牛乳をかける。それをろくに混ぜもせずスプーンですくい口に入れて噉み碎く。

次にゆで卵の上半分をスプーンですくいつのりにして一ひと分け、スプーンに載つた殻つきの白身は捨ててしまい、顔を出した半熟の黄身だけを食べる。

事件はその時に起つた。

突然、庭に光る竜巻が発生したのである。

青く光る竜巻は移動せずに体をくねらせて腰だけを振つてゐる。

この異様な光景を、ガルネオは新聞から顔を出して黄身が載つたスプーンを持つたまま見守る。

竜巻が発生する時に必ず現れる黒い雲は空ではない。雲一つない青空が広がつてゐるのである。

そもそも、イタリアの気候で竜巻が発生するのは珍しく、ガルネオ島という孤島で青く光る竜巻が発生する事はありえない。

この光る竜巻事件はガルネオ島の歴史始まって以来の怪事件だった。

光る竜巻は成長してどんどん太くなり、ガルネオ自慢の白い別荘が飲み込まれると、ガルネオが覚悟を決めた瞬間に突如として消え去った。

ガルネオは立ち上がる。両手にあつた朝刊とスプーンは床に落ちる。スプーンに載っていた半熟の黄身は床の上で平べつたくなっている。

青く光る竜巻が発生した庭が気になつて、ガルネオは両手に何があつたのか忘れているのだ。

「あれはなんだ？」

ガルネオの口から出る言葉は生糀きつすいのイタリア語。

庭を目指して歩くガルネオは、自分がしゃべったのにも気づいていない。

大きなガラス窓の向こうには、見たこともない金属の塊がある。

ガルネオはパジャマ姿でガラス窓を開けて、素足で庭に下りた。

手入れされた芝生に、ガルネオの足の裏を傷つけるものは何も無い。

金属の塊に触ろうとするガルネオを、ガルネオの片腕であるトロ

「キオが止める。

「ガルネオ様、お待ち下さい。先に危険がないか確認をしますので」

トロッキオの年は30後半。細身ですらりと伸びた身長は180センチ以上あり、体の太いガルネオとは対照的だ。

「これは神の仕業だ。でなければ、天国にいるママからの贈り物かもしれん。それをほかの者に任したとあっては、このガルネオの汚券に^{けん}関わる」

ガルネオはゆっくりとトロッキオの手を遠ざけるが、トロッキオはガルネオから離れようとしている。

走り出した子分がガルネオより先に金属の塊に触れて、何も無いですと首を横に振つてトロッキオに知らせる。

ガルネオは、トロッキオが子分を見た瞬間にトロッキオを押し退けて歩き金属の塊に手の平をつけた。金属は^{ほの}仄かに温かい。手の平を滑らせて金属の表面に沿つて歩き、半周もしないうちにドアに行き着いた。

ガルネオはドアにあるガラス窓を覗く。中にはアタッショケースがある。アタッショケースが気になつて、ドアを開けようとするが、それもやはりトロッキオが止める。

「もしもの事があるといけませんので」

「大丈夫だ。だけ、トロッキオ！」

今度のトロッキオは、ガルネオに怒鳴られてもどかなかつた。ガルネオの両肩を掴んで行く手を阻んでいる。

そういうしているうちに子分がドアのハンドルを回して開けて中に入り、アタッシュケースを取り出した。

ガルネオはトロッキオの体の横から顔を出してアタッシュケースを見る。

トロッキオは、ガルネオと一緒に動いてガルネオの顔の前に自分の顔を移動させる。

「ガルネオ様、もし爆弾でも入つていたら

ガルネオの銀色の瞳は、トロッキオの琥珀色の瞳を睨む。

「くどいぞ、トロッキオ。これは神の仕業だと言つただろ」

ガルネオはバスケットの選手のように体を左右に揺らしてフェイントをかけてトロッキオの陰から飛び出した。太つた体からは想像がつかない早業で子分が持つアタッシュケースに手を掛けて、ロックを外し、なんの警戒心もなくアタッシュケースを開けた。

中には幅が2センチくらいの金色の棒が並んで入っている。表面は凸凹でいぼうしていて真ん中に繋ぎ田つなぎだがある。数は全部で10個。その上にA4サイズの封筒があつた。

ガルネオは封筒を手に取り、中身を出した。A4の用紙の上を滑つて一枚の写真がガルネオの手に載る。写真には一人の少女が写っている。

「なんだこれは？」

ガルネオは写真をトロツキオに手渡す。

「ただの写真画像です。太陽に透かして見ても、なんの仕掛けもありません」

ガルネオはA4の用紙を見る。

「俺が知ってる文字じゃねえ」

それもトロツキオに渡す。

「これは英語ですが、俺も読めません」

ガルネオはほかのA4用紙を搔き分けて見ていく。

「これも読めん。これも、これも、これもだ。なんだってんだ、畜生！」

ガルネオは手を振り上げて空に向つて叫ぶ。

トロッキオは、ガルネオが見ていたA4用紙を一枚一枚手に取つて見た。

「日本語。中国語。フランス語。イタリア語。お！ これなら読める」

トロッキオは、芝生に睡を吐いて苛立つてゐるガルネオを呼んだ。

「ガルネオ様、読めるのがありましたぜ」

ガルネオは振り向いてそのA4用紙を手に取つた。子分が駆け寄りガルネオに老眼鏡を渡す。

ガルネオが読んでいるA4の用紙には、プリントアウトされたイタリア語でこう書かれていた。

このアタッシュケースがファミリーが住むガルネオ島に届く事を祈る。

ガルネオ島で暮らすドン・ガルネオに未来からの贈り物を渡そうと思う。

ケースに入つてゐるのは全てレーザー銃。

10丁ある。

製造価格は10億アメリカドル。

1丁の価格だ。

弾丸の補充も充電もしなくていい。

半永久的に使える。

そのレーザー銃である人物を殺して欲しい。

名前は加藤知子。日本人。

写真のとおり今は10歳の子供だが見縊るな。

その娘は将来、大人になった時に、ガルネオ島に研究施設を建設する。

当然、島の所有者であるドン・ガルネオは刑務所行き。ファミリーも全員刑務所暮らし。

ドン・ガルネオは、未来の記録では獄死となつている。気づいたかもしれないが、これは未来からの手紙である。そしてレーザー銃も未来で製造されたもの。

信じる信じないは、銃を手に取つて判断して欲しい。

用紙の裏には少女の居所と思われる住所が明記されている。

ガルネオは顔を上げた。黙つて手紙をトロツキオに渡す。

アタッショケースに手を突っ込んだガルネオの横で、手紙を読み終えたトロツキオは声を上げる。

当然、生粋のイタリア語で。

「マジかよ。未来からだなんて信じられん」

トロツキオは、身震いをして天に向つて祈りだす。

ガルネオは金の棒を1つ摘まんで持ち上げた。太陽の光りを反射して輝く金の棒は、ガルネオの手で煌きらめいている指輪といい勝負だ。

しかし、引っ張り上げられ全身を現した金色に輝くものは、S&WM39にそつくりの物騒な銃だつた。表面が全て金色のため、見た目はおもちゃ屋で売っているプラスチックの銃と変わらない。持

つた時の重量も軽過ぎる。

「これは本当にレーザー銃なのか？」

ガルネオは銃口をプールの女神像に向けて、照準を合わせた。引き金を引く。

レーザー銃はチューンという音のあと、銃口から赤い光線が飛び出す。

赤い光線は女神像に当たり、女神像の水瓶に直径10ミリの穴が開く。穴からは勢いのない水がこぼれ壺の表面を伝つて零となって下に落ちていく。

撃つたあの反動は全くない。撃つた時の衝撃で手が痺れたりもしない。

姿形はS&WM39。銃口から飛び出るのはレーザー光線という不釣合いなものが、正真正銘のレーザー銃なのだ。

トロッキオは祈るのをやめて、撃たれた水瓶を見ている。

ガルネオは小走りで女神像の所へ行き、水瓶に開いた穴を見た。

穴の入り口は焦げており、反対側にまで貫通している。反対側の穴も、もちろん焦げている。

ガルネオは両手で金色の銃を持つ。太陽光を浴びて神々しく輝く金色のレーザー銃。

「これが未来の銃。なぜだか分からんが、未来の奴が俺を助けるために届けてくれた、金のレーザー銃」

ガルネオは未来人に選ばれたのだ。少なくともガルネオは、自身を島の救世主だと思っている。事の次第を他界した母親に伝えるために、力と恐怖の象徴である金色のレーザー銃を空に掲げる。そして大声で叫んだ。

「マンマ・ミーア……」

と。

9・青色の水

2008年。4月半ば。

日本の空は今日も晴れていた。

その日本のほとん中に、かとうともじ加藤知子は住んでいる。

場所は岐阜県。

関が原の戦いで加藤清正が武勇をあげた地域として有名である。

そのためなのかは分からないが、岐阜県がある東海地方は実に加藤姓が多い。

知子は10歳になるまでに、家族親類縁者、血の繋がらない者も含めて、いろんな加藤さんを見て育つた。

テレビ番組でも、俳優の加藤さん、医師の加藤さん、スポーツ選手の加藤さん、と様々な著名人を眺めてきたから、それぞれの加藤さんがどんな人なのか自然と頭に入っている。

そんな毎日を過ごしている知子は、大人になつたある日、自分がノーベル物理学賞を受賞する加藤さんになるなんて全く思つていなかつた。

ある男に出会いまでは。

知子の一日は、納豆をかき混ぜる事から始まる。

箸はしもお椀わんも家族揃そろつて同じ柄がら。どれが自分のものなんて決まっていない。

おかげはイワシの煮付け。昨日の夕飯の残り。

その隣はホウレン草のお浸し。スーパーの見切り品で母おやしが買ってきたもの。

味噌汁はワカメが入った赤出汁あかだし。家計に余裕があるとタマネギが加わる。

朝食のメニューを見ても、とてもノーベル物理学賞を受賞するほど、脳に栄養がいっているようには思えない。

知子は朝食を終え、歯磨きを済ませて学校へ出かける。

背負つているランドセルは、従姉妹いとこのお下がり。

知子の父は、加藤姓の親戚縁者しんせきえんしゃがいっぱいるので、服でも勉強机でもゲームでもお下がりが知子に回つてくるのだ。

お陰でおこづかいを使わずに済むという利点はあるが、友達と並んで歩く時、傷が多い自分のランドセルが、まだ艶つやが残つている友達のランドセルの横に並ぶのは恥ずかしい。親に新品を買ってもらえる友達が羨ましいとさえ思う。でも、知子が卑屈ひくつになるのは短い間だけ。教室でクラスの仲間と遊んでしまえばなんてことはない。

授業中は至つて普通。知子が優等生ゆうとうせいという訳でもない。読めない漢字もあるし、計算けいさんだって間違える。理科の実験なんて男子に任せ

つきり。しかし知子の一日の学校生活は過ぎていく。

下校も決まった時間に帰る。塾には通っていないので寄らない。

一緒に帰る友達は2人。一人は安田佳枝。^{やすだよしえ}同じクラスだが学校の近くに家があるので、すぐに別れてしまう。もう一人は山田美里。^{やまだみのり}クラスが同じだったのは1年生の時だけ。帰る方角が同じなのでクラスが違つてもずっと一緒に帰っている。

美里はフリルのついた服を好んで着る。今日はシャツの袖口とスカートの裾^{すそ}に白いフリルがついている。

「体育のなわとび嫌い。50回飛んだら、足がだるくなっちゃった。明日筋肉痛になっちゃう」

長い髪。手足の細い美里はお嬢様タイプ。4年1組の美里のクラスは体育でなわとびをしたようだ。

「それ最悪。2組はまだ跳び箱だから、なわとびの授業になつたら私も筋肉痛だ。イヤだあー」

知子は4年2組のようだ。ショートボブにブラウスとミニスカートを着ている姿は普通の女の子に見える。

帰り道の会話はもっぱら授業内容の情報交換。

知子は美里との会話を楽しみながら、青葉に紛れて咲いている遅咲きの里桜の下を歩いて行く。

通り過ぎる家は2階の一戸建てが多い。たまに畠や田んぼもある。

少し視線を彼方に向ければ、河の堤防がありその上で犬の散歩をしている人が見える。都市近郊にありがちな風景だ。

そして、知子が美里と別れたあとにたどり着く自分の家は、庭付き平屋の借家だったりする。3LDK。知子は一人っ子。自分専用の部屋は無い。

知子は、いつも何事もなく我が家へたどり着くのに、今日に限っては、自宅まで残り約100メートルという所で呼び止められた。

若い男に。

「あの、すいません」

後ろから声を掛けられて、知子は振り返る。

知子の目に一番に飛び込んできたのは、見上げるほどに、そう今までに見た背の高い人よりずっと高いだらうと思ひ青年の姿だった。

知子の脳内にある「ギネスブック知子版」の記録が更新されデーターが書き替えられている間、青年を見上げている知子の口がゆっくりと開いていく。

次に知子の目に入つたのは、青年の青い瞳。知子は青年の青い目をじっと見る。

知子は、この青色をどこかで見た事があると思い、それがいつで、どういうものだったのか、記憶の底を探していく。

そう、あれは白い筆洗い箱の中の、青色の水。青い絵の具がつい

た絵筆を一番最初に洗つた時のように、青色が水に溶け込んで、でも水は少し透きとおつていて筆洗い箱の底がちょこつとだけ見える。青年の青い瞳は、そんな青い水のようだ。

生まれて初めて生で見た外国人。知子の開いた口は空氣を吸い込む。

青年は、動かなくなつた知子を見て、困つた表情をしながら持つていたメモ用紙を知子に向けた。

「道に迷つてしまつて。この近くだと思つんだけど分かるかな?」

青い目の中の青年の口から出た言葉は、がいじゅくじなま外国語訛り無しの日本語。

日本語をしゃべる外国人が出たあー、と心の中で叫び口で呼吸をしながら驚いている知子は、目の前に出されたメモ用紙を見た時に、口が閉じた。

メモに書かれた地図の下に住所が日本語で書いてある。住所から矢印が伸びて地図の一画をさし示している。

地図が示している場所は知子が住んでいた場所だった。

「あ、私んち」

「言つてから知子は気づく。

「でも番地が違う。それ、うちの隣だ」

知子の心の中に疑問が浮かぶ。この外国人は、なんでもうちの隣に行きたいのか? と。

疑問を抱きつつ、とりあえず知子は素直に教えた。指をさして。

「あそこだよ。離れてるけど見えるでしょ」

約100メートル離れた先を、あそこと言われただけで分かるほど、青年はここの中の土地勘がないようで、知子が指さした場所を探しているのか、遠くを眺めて頭が揺れてい。

知子にもそれが伝わり、

「私も行くから一緒に行けばいいよ」

知子はランドセルを揺らして歩き出した。

少し歩いてから、知子は青年がついて来ているか振り返って、青年の存在を確かめる。

知子と目が合った青年は足を少し早めて知子の隣に並んだ。

会話はなく、でも知子は隣を気にして横目でチラリチラリと青年を見ながら歩く。

青年の頭髪は黒い。肌の色は、日焼けの違いはあるものの、ほぼ知子の肌と同じ色。顔もアジア系。目が青いところを除けば、背の高い日本人といった印象だ。

髪型は耳たぶが見えるショートヘア。カジュアルなシャツに綿スボン。その上に春用の上着を着ている。

知子の頭の中をジャーネーズの青年が通り過ぎて行く。

どのジャーネーズの青年も一部分が似ているが、なんかちょっと違う。

じゃあ、誰なのか？

青年の正体は謎のまま、知子が次に引っ越ししてきたのがディズニーランドで見た王子様だった。

知子の脳の中で、隣を歩く青年の姿が、ディズニーランドで踊っていた王子と重なっていく。

眠り姫の王子様。シンデレラ姫の王子様。白雪姫の王子様。

「」で知子の脳内の画像が停止した。そして結論にたどり着く。

異国情緒を漂わせて歩く青年は、白雪姫の王子様みたいだと。

急に知子の足取りが淑^{しゆ}やかになる。口から出る言葉はいつも同じだが、話方も上品になつてくる。

「もう少しで地図の所に行けるから」

「そう、よかつた。道を聞いたのが近くに住んでいる君で幸運だったよ」

青年が白い歯を見せて笑顔で言つた瞬間、10歳の知子の胸に恋の矢が刺さつた。

そして忘れていた疑問が色の濃いものとなつてまた浮上する。なんでもうちの隣に行きたいのか？

好きな男の事はどうんな些細な事でも知りたい。

10歳の知子は、不審者かもしれない青年に、何の疑いも無く聞いてしまつ。

「うちの隣になんの用なの？」

「ああ、そうか。そうだったね」

青年は思ひ出しだよひと言ひ。

「僕は引っ越して來たんだ」

青年の答えはよくある平凡なものだつた。

だが、知子は心の中で飛び上がるほど喜ぶ。知子の喜びは自宅の門に到着してからも続く。知子は人差し指で青年の家を教える。

「あのね。地図の番地の家なんだけど、右側の家で、手前の家じゃなくて、あうちの家だから」

別れ際なのにまだ王予と話せるのがとっても嬉しかつたりする。

「うん、右側のあうちの家だね。分かった」

青年は知子の家の門の前を通りて行く。青年の家は知子の自宅を通り越した次の家だ。青年は隣の家の門の前で手を振つて知子に道

案内のお礼とさよならを言った。

知子も手を振つて答える。

「またね」

青年への「またね」は社交辞令無しの本音。下心も大いにあつたりする。

知子が機嫌良くスキップして玄関に入ると、玄関の中にまた別の男が立っていた。

知子の母は玄関先で正座をして男と話していたが、帰つて来た知子に気づいて、視線を知子に向けた。

「あ、おかえり」

母は早速目の前にいる男に言ひつ。

「ここの子は、うちの娘の知子です」

突然でも紹介されたら必ずしなければならない事がある。

知子は母に躊躇じゅうられたとおりにお辞儀をする。

「ほんにちは」

「ほんにちは」

振り返つて挨拶をした男も目が青かつた。しかも青年と同じ日本語。

身長も先ほどの青年と同じくらい高い。年齢は自分の親より年上。そうだが、腹は出でていなくてスマート。綿ズボンをはいてカッターシャツをラフに着こなしている姿は、青い目が手伝つて極上の中年紳士の雰囲気が漂つている。

もう知子は先ほどの青年で免疫^{めんえき}ができているので、目の青い人を見ても驚きはしないが、代わりに心中に淡い期待が膨^{ふく}れあがる。

その知子の期待に母が答える。

「知子、 いちらはお隣に引っ越^{いりおほ}してみえた相馬さん」^{そうま}

みえたと言うのは、東海地方特有の方言で、いらっしゃったと同格の意味になる。

母が正座している横にきちんと包装された箱がある。中味はタオルだろうか。

相馬は引っ越しの挨拶に来たようだ。

母は更に続けて説明をしていく。

「相馬さんの奥様は、おばあちゃんの看病で実家に行つてみえて、今は息子さんと一人暮らしなんですって」

「息子と一人暮らしごといても、妻の母が入れる老人ホームが見つかるまでの間だけですが」

相馬は知子に説明をしてから、知子の母に向き直つて頭を下げた。

「妻が不在で何かと迷惑をお掛けすると思いますが、どうか宜しくお願い致します」

「いらっしゃりや宜しく」と母が頭を下げてこらへり、「知子は靴を脱

いで上にあがつた。それでも相馬の身長のほうが高い。髪の色は青年より茶色がかっている。顔も日本人離れしていて、明らかに外国人だと分かる。

相馬は頭をあげて「バイバイ」と知子に手を振つてから玄関を出て行つた。

母は立ち上がりながら知子に言つ。

「ハーフなんですつて」

「ハーフ?」

「あの人のお母さんがイタリア人なの。お父さんは日本人。国籍も日本。それで青い目なのに、苗字が相馬なのよ」

知子はランドセルを下ろすのも忘れて、隣人の話を始めた母にくつついて、台所まで歩いて行く。

「ねえ、そつまさんの名前は?」

母はハツと氣づいた表情をする。

「あ、聞いてないわ。もしかするとカルロとか、サルヴァトーレとか、向こうの国の名前かもしれないわね」

母は先ほどの中年紳士の事を言つているのだが、知子の頭には青年の姿しかない。

白馬に跨つた白雪姫の王子様。名前は相馬カルロ。もしくは相馬

サルヴァトーレ。

知子は、あの青年に会わない名前だと思った。

青年の名前が分からぬまま、知子の妄想は膨らんでいく。

白雪姫の姿をした知子は、身に降りかかる不幸にもめげず7人の小人と健気に暮らしていくが、悪い魔女に毒を飲まされて知子姫は倒れてしまう。

そこに王子の姿をした青年カルロが登場。知子姫はカルロ王子に助けられ、カルロ王子と見つめ合い、手を取り合つた時、

「知子、宿題は？」

母の声が聞こえ、知子は現実に引き戻された。台所に立っている知子の目に、使い古されて表面が茶色に変色した冷蔵庫が映る。そう、ここは借家。7人の小人もいない。

青年王子が引っ越した隣の家も、同じ大家が管理している借家。やつぱり相馬家にも使い古された冷蔵庫があるのだろうか。

姫でもないだたの小学4年生の知子は、家に帰つて来たら宿題をやらなければならぬ。知子は母に視線を移す。

「ある。漢字を10個、暗記するのだけ」

「だったら、そんな所に突つ立つてないで、早く宿題をやりなさい」

「はあーい」

知子は暖簾を潜つて隣の部屋へ移動した。

テレビとひやぶ台と、背の低い本棚がある部屋。

知子はランドセルを下ろして、中から国語の教科書を出してひやぶ台の上で開く。

畳の上にある新聞紙の近くにあつた折り込み広告の裏を見て、何も印刷されていないのを取り出すと、そこに漢字を書きながら暗記を始めた。

漢字の暗記は集中すれば2、3回書いただけで頭に入ってしまう。この頃からノーベル物理学者としての素質があつたのかもしれない。30分もしないうちに漢字を10個覚えてしまった知子は、書き込まれた漢字の隣にひらがなで「そうま」と書いた。

また知子の脳内に疑問が浮かぶ。「そうま」は漢字でどう書くんだろう? と。

とりあえず本棚の辞書を引っ張り出して調べてみる。

そうま【相馬】福島県北東部の市。姓氏のひとつ。

辞書とは便利なものだ。

そして知子は広告の裏に「相馬」と書き込んで青年の苗字も暗記してしまった。

次の日。

岐阜県の空は、少し曇っていた。

4月の半ばなので、曇っていても暖かい。

朝、知子は学校へ行くために家の門を出た。ちよつゞ隣の家でも門が開く音がする。

相馬さんちの門の音が、である。

知子の足は止まり、膨れ上がつてくる期待を胸に、知子は隣の家の門を見た。

知子の期待通り、青年が門を閉めているところだった。

手にはビジネスバッグ。服装はネクタイをしたスーツ姿。ショートヘアの頭髪は整髪剤をつけているのか艶々としている。

知子の王子様はビジネスマンのようだ。

青年は、知子に気づいて近づいてきた。

「おはよ。昨日は有難う。助かったよ」

憧れの青年を見上げている知子は、昨日より大人っぽい姿の青年を前にして、緊張して動かなくなつた。

それでも出会った最初は必ずやらなければならない事がある。

「おはよっ

知子は朝の挨拶をした。

青年は知子の隣に並び、ラングドセルを背負った知子を見下ろす。

「これから学校みたいだね。行く方向も僕と同じみたいだから、途中まで一緒に行こうか?」

青年王子からの願つてもない申し込みである。

「うん

知子は一緒に歩き出した。

今日の青年からはいい香りがする。知子の鼻の穴は大きく開き、青年の香りを何回も吸い込む。

10歳の知子の頭は、デオドラントといつ言葉は浮かばない。香水か、それとも整髪剤の香りか。

しかし、いい香りに酔っている場合ではない。少し先には友達の美里が待っている。そのほかの近所の子供もいる。

朝の登校は所定の場所に集合してみんなで学校へ行かなければならない。

青年と一人つきつで歩ける時間は制限つきなのだ。

知子は歩きながら青年を見上げた。

「名前なんていつの？」

集合場所に着く前にこれだけは聞いておかなければならぬ。

今の知子にとつて青年の名前を聞く事は、自分の将来に繋がる、
そう思つほど重要な事になつてゐる。

「僕は、智」

「セトリル…… セン」

知子の同級生にも同じ名前の男子がいるので一応名前の文字も分
かるが、王子はイタリアの混血児なので名前がイタリア文字なのか
漢字なのか聞いておかなければならぬ。

「漢字？」

「うん、漢字。知るの下に日付の日がつく漢字だよ」

「そうなんだ」

4年生の知子はまだ習つていらない漢字だが、智の説明でなんとなく想像がつく。

カルロでもサルヴァトーレでもなかつたのだ。

しかし、悠長に漢字の想像をしてくる場合ではない。足は進み集会場所に近づきつつある。

知子は次の質問をする。

「彼女いるの？」

これが一番重要なかもしない。

智は遠くを眺めるようにして言う。
「今はいない。付き合つた人は何人かいるけど

知子は心中でガツツポーズをとつた。これで知子の恋心に勢いがつく。もう門で智に会つた時の緊張感はない。知子の質問は次々と続く。

「何歳なの？」

「20歳」

「身長はなんセンチ？」

「185。でも、測つたの1年前だから変わつているかもしないけど」

「なんの仕事をしてるので？」

「それは……」

智が答えようとした時、美里の知子を呼ぶ声がした。

知子と智は、呼ばれた方角を見る。

そこは登校する時の集合場所。美里は知子に手を振つてゐる。

時の流れは無情なもので、知子の緊張がほぐれてやつと会話ができるようになった時に、知子は集合場所に到着してしまつたのだ。

美里が知子のところへ走りてくる。

「知ちゃん、おはよ！」

美里は今日もかわいこつりルがついた服を着ている。そのかわいい姿で智にお辞儀をする。

「おはようござまわ」

「おはよ」

当然、智は美里にも、王子の笑顔で挨拶をする。

例え相手が恋のライバルだとしても、出会つたら必ずしなければならない事がある。

「美里ちゃん、おはよ！」

知子は、笑顔で智を見上げている美里に挨拶をした。

智は体の向きを変えて言ひ。

「じゃあ、僕はこれで。知子さん、またね」

「うん、またね」

智は知子に手を振り、知子も手を振つて智が歩いて行くのを見送

つた。

智の後ろ姿が遠くなつてから、美里が瞳をキラキラとさせて知子に詰め寄る。

「あの人、誰？」

知子は、やつぱり美里は恋のライバルだと思いながら答える。

「隣に引っ越してきたお兄さん」

知子は、恋のライバルに青年の名前は教えない。

それでも美里は興奮する。

「あの人、カツコイイ。彼女いるの？」

知子はそれも教えたくないと想いながら答える。

「付き合っていた人はいるらしくけど、詳しく述べ知らない」

「やっぱり元カノがいるよね。あんなにカツコイイんだもん」

美里はため息混じりで、離れて小さくなつていく智の背中を見つめながら言った。

「ビリの国の人？」

知子は、やっぱり青い田舎づくよね、と思いつつ答える。

「日本人。あの人人のパパがハーフなんだって」

「じゃあ、あの人クオーターね」

姉がいる美里は、その姉の影響もあり、知子よりませている。

「どこに勤めてる人？」

「知らない」

従つて男を見る田も知子とは違う。

「年は？」

「20つで言つてた」

「思つたより年上なんだ」

これで美里の興奮はなくなり、美里は静かになった。

「出発するだおー」

6年生のまとめ役の男子が、登校するために周りで遊んでいるみんなを呼び集める。

知子は美里と歩きながら、なぜ美里が静かになったのか、さり気なく聞いてみた。

「なんで年上だとダメなの？」

「だつて、私が20になつたら、あの人は30で。私が30になつたら、あの人40だよ。今はカッコイイかもしけないけど、年を取つたら10歳離れたオヤジになるんだよ。ダメに決まつてるじゃない」

ませている美里の考えは現実的だ。

それでも知子は、智が40になつた姿を想像する。智が40になつた姿は容易に想像できる。玄関で会つた智のパパを思い浮かべればいい。智が40になつたら極上の紳士になる可能性が高い。

知子はメンデルの法則を用いて、智の姿が将来極上の紳士になるという結論に至る。なのだが、10歳の知子はメンデルの法則を知らない。

なぜ知子はメンデルの法則を用いたのか？ それは「子さんはお母さん似、夫さんはお父さん似」といつた、おばちゃんたちの田舎会話のお陰だつたりする。

無意識に学者の法則を用いる知子。姉の影響でませた考えを持つ美里。

考え方の違う一人が、ずっと先の未来まで親友としてこの三次元世界で一緒に存在できるのも、相対性理論の一つのかもしけない。

数日たつたある日。

岐阜県の空は、どんどんより曇っていた。

多少寒さは感じるが、長袖を着ていれば寒さは防げる。

知子は授業が終わつたあと、美里と一緒に同じクラスの安田佳枝の家に上がりこんで遊んでいた。

宿題はもう済ませてある。

遊ぶといつてもただの雑談で、話題は知子の隣に引っ越してきた相馬智についてだった。

安田佳枝は、左右にある肩につくつかないくらいのお下げを揺らしながら話す。

「目の青い人、学校の門の前も通つて行くよ。あの人、カッコイイよね」

佳枝の服装は花柄が多い。母親の勧めらしく佳枝も好んで着ている。下はスカートだつたりズボンだつたりと日によつて違う。

今日は裾が膝下ひざしたまであるスカートをはいている。

隣に座る美里はきょうもフリルのついた服を着ている。長い髪が顔の前にこなによつて、頭につけているピンがかわいい。

「20歳なんだって」

美里の説明に佳枝はちょっと驚く。

「大きい人だから30かと思った」

「近くで見ると童顔だから10代に見えるって。会話も子供っぽかつたよ」

美里はそんなに智と話していないのだが、さも知っているように話す。

佳枝は興味津々に聞く。

「え、話した事あるの？」

「うん、あるよ。だって、知子の隣に引っ越して来た人だから。知子、目の青い人と一緒に歩いて集合場所に来るもん。ね、知子？」

王子智の話は美里のペースで進んでいく。

美里と佳枝の一人から見られ、一人の目がいろいろ知りたがっているようで、知子は身構えながら頷いた。

「うん。私が会ったのは2、3日前だけ、引っ越してきたのは1週間くらい前って、ママが言つてた」

今日、佳枝の家に招かれたのは、智の情報を聞き出すのが目的だったのかと、知子は気づいた。

その作戦を立てたのは美里だろうか。

佳枝は、智に興味があるようで、早速知子に質問を始める。

「名前知ってるの？」

「うん、相馬さん」

「どう書くの？」

佳枝に聞かれて、知子は自分のノートの端に漢字で書いて見せた。

佳枝は静かに驚く。

「変わった名前だね。初めて見た」

美里も「相馬」の文字をじっと見て言つ。

「竜馬は知ってるけど、相馬は初めてだわ」

竜馬と言わられて、知子は気づく。

「あ、違う違う。相馬はね苗字。名前は……」

知子は迷つた。青い目の王子の個人情報を、目の前のライバル姫2人に教えるべきかどうか。

「まだ知らない」

知子は教えなかつた。

佳枝は考える。

「じゃあ、名前はなんていうんだら?。リチャードかな。ウイリアムかな」

佳枝は、知子の母と同じ事を考えるが、口から出でてくるのはイギリス王子の名前だつたりする。

それを知らない知子は、リチャードとウイリアムの名前は智に似合つていて恰好いいと心の中で喜び、言つた佳枝を博識だと思い尊敬した。

イギリス王子の事はニュース番組でたまに放送されているので、佳枝が本当に博識なのは分からぬが、佳枝は学年で上位に入るほど成績がいい。

佳枝の家で智中心の雑談を楽しんだ知子は、夕方になつた事もあり、帰る事にした。

帰り道にする美里との会話は、美里の姉からの情報といつともあり、聞いているだけでも楽しい。

「お姉ちゃんから聞いたんだけど、今の生徒会長、彼女がいるんだつて」

「本当なの、それ?」

「うん、5年1組の女子だつて」

「へえ」

ただし、情報の信憑性は低い。

もつぱり学校の事を話し、美里と別れたあとは、一人で自宅まで歩く。

その距離、ご存知のとおり約100メートル。

知子の家は、帰りながら眺めると右手側になり、智の家より手前にある。

智が好きな事もあって、自分の家より奥にある智の家に視線がいつてしまつ。

借家同士の境界線はコンクリートの塀でできている。塀は知子の背丈より低く、知子は相馬家の庭を覗き見る事ができる。

相馬家の庭はその塀に沿つてツツジの木が植えられている。ツツジは以前住んでいた人の趣味によるものだ。

約100メートル離れていても、知子の目には相馬家のツツジの木がちゃんと見える。

知子が智の家を見ながら歩いていると、智の家の玄関前にある庭で、人影が動いている事に気づいた。

ツツジの木の間で見え隠れしている茶髪の頭は、智のパパのようだ。

知子は、もしかするとパパと一緒に智がいるかもしないと思いつ足を早めた。

智のパパは軍手つけて、立つたり座つたりしながら何かをしている。

何をしているのか気になるし、智にも会いたい。しかし、それだけの理由で相馬宅へ行き、いきなり敷地内に踏み入つては変に思われてしまつ。

知子はとりあえず自宅へ行く事にした。相馬家の家も庭も見ず、全く何も気づかない振りをして、自宅の門を開けた。

「知子さん、おかれり

低音の声がする。智のパパの声だ。

じつやつて声を掛けようかと考えていた知子にとっては、嬉しい低音の響きだ。

さぶづけで呼ばれるのも、お嬢様扱いを受けているようだ心地よい。

知子としては智がいなくて残念だが、極上の紳士、智のパパと話すのもいいと思い、笑顔で返した。

「ただいま

さつそく知子は堀越しから相馬家の庭を覗く。

智のパパが何をしているのか、知子としては興味があるからだ。

「おじさん、何やつてるの?」

しかし、智のパパの次の言葉は、知子が望んでいたものではなかった。

「おじさんか……」

しかも智のパパは、あまり嬉しそうじやない。

知子は今になつて氣づく。おじさんと呼んではいけなかつた。

知子が焦つてどうしようつかと考へていると、智のパパは目尻を下げて、急ににこやかな表情をして言つた。

「知子さん。私の名前は、相馬・ジョゼフ・圭介です。圭介さんと呼んで下さい」

智のパパは、智より名前が一つ多くついていた。

「圭介さん……」

今度の知子は、名前が一つ多い圭介に驚いて、次にの言葉が浮かばない。

知子が困つていると、圭介は庭に咲いていたパンジーの花を一つ千切つて、塀越しに知子に手渡した。

「この花は、知子さんのように綺麗でかわいく咲いてるので、差し上げます。お近づきのしるしです」

知子はパンジーの花を受け取る。

「ありがと」

知子の手にオレンジ色のパンジーが渡る。

極上の紳士から花を手渡された知子は、お姫様気分を満喫し有頂天になる。

知子が笑顔になつたので、圭介はしゃがんで庭の土をいじりだした。

圭介は、庭のパンジーの手入れをしていたようだ。

知子は壙に身を乗り出して聞く。

「どうして圭介さんの名前は、ジョゼフがあるの？」

「それは、私の母がイタリア人だからです。母は私を産んだ時ジョゼフとつけたかった。日本人の父は圭介とつけたかった。だから、私の名前は相馬・ジョゼフ・圭介なのです」

圭介は、いじっていた土を手早く均す。

「知子さん、ちょっと待つていて下さい」

スコップなどの道具を片付けて、圭介は軍手から手を抜く。軍手を振つて土を落として、道具の上に置いてから、知子に向き直つた。

圭介は、智と同じ青い瞳で知子を見る。

圭介の目尻にシワがあるが、それでも圭介は極上の紳士で日本人離れした品のある顔立ちをしている。

差し詰め圭介は、王様だらうか。

「知子さん、もう少しだけ待つていて下さい」

圭介はさう言つと、家中へ入つて行つた。

なぜ待つていなければならぬのだろうか？

予想外の展開に、知子は大きなマークを頭の中に浮かべていると、圭介が皿を持って家から出て来た。

皿の上にはカットされたマーブルケーキがあり、埃が被らないようこりたつがかけてある。

「私が焼いたチョコのマーブルケーキです。おうちの人と食べて下さい」

知子にとつて思いがけない収穫だった。

「あつがとう。おじつ、圭介さん」

今後は絶対におじさんと呼んだりいけないと、知子は思つた。

圭介からまた何かをもらつたために、そして智子に会つたために。

「圭介さん、ケーキ作れるんだ。凄い。私のママ、作れないよ」

子供は、恨みも罪悪感も無く、自分の親の無能さを隣人に伝える時がある。その親に育てられた自分の印象をも悪くするとも知らずに。

圭介は少し笑い間を取つてから説明をする。

「妻は今おばあちゃんの所にいるから、料理をするのは私が智にな

るのである

だからといって、ケーキは普通作れないと知子は思った。

圭介と別れ、圭介が家に入るのを見送つてから、知子は自宅に入つて母親にマーブルケーキを渡した。

母は皿を動かして、マーブルケーキを上から横から眺める。

「まあ。これを相馬さんが」

母が驚くのも無理はない。普通、日本人の男はケーキを焼かないからだ。

「もしかして、そのお花も頂いたの？」

「うん」

「もらつてばかりで悪いからお礼ついでに何かお返しをしないといけないわね」

知子がパンジーを適当なコップに生けているうち、母はケーキの上のラップを捲る。

「夕食前だけど、これ食べてみようか？」

「うん」

知子は母の横に並びマーブルケーキを見る。

皿の上にある、カステラのようないつに四角いケーキ。卵色のスポンジ部分にチョコレーント色の渦がある。

母親は真っ先にケーキを食べる。

「うふ、おこしー。相馬さん、ケーキ焼ぐの上手ね」「うふ、おこしー。相馬さん、ケーキ焼ぐの上手ね」
知子もケーキを食べる。チョコの風味があつた以上にしつとりとしていておこしー。

「うふ、おこしー」

キング圭介は、じつやつてこのケーキを作ったのだろうか。

知子はオレンジ色のパンジーを見ながら、圭介のケーキを作る姿を想像しているうちに、ある事を思い出した。

「そりいえば、ママ。相馬さん、相馬・ジョゼフ・圭介っていうんだって」

「ジョゼフなのね。なんて恰好いいのかしら」

母は、マーブルケーキに続いて、名前の収穫にも喜ぶ。

きっと今の母の心にはジョゼフしかいないだらつ。

知子は、そんな母の姿を見て、パパがかわいそうだ、と思つた。

「うして、朝は智と一緒に出かけ、帰つてくれば圭介が庭にいたりする。」

知子は、青い目の隣人とそんな毎日を送るようになり、そして5月がやってきた。

薰風くんぷうがすり抜けでいく季節。日本では5月を皋月さつきと呼ぶ。五月と書いてむづむづと呼ぶ時もある。

5月2日、金曜日。

岐阜県の空は、今日も晴れていた。

南の方角。空の彼方には、入道雲いりゆうしき姿がある。夏は間近に迫つているようだ。

知子は汗がつたう類を赤らめて帰つて来た。今日も圭介が作ったおやつを手に持つている。

「ママ、またくれた。梨のパイだつて

母は、知子の汗を見て言ひ。

「また庭でジヨゴサウとしゃべつていたの？」

「うん」

「知ちやんはジヨゴサウと仲がいいわね」

母は言つが、知子としては智と仲良くなりたいと思つてこら。

「いつもこつも、もうつてばかりで悪いから、たまにまつりの夕食に招待しようつか」

母は台所の洗い場に手を入れて、そこから毛ガードを持ち上げて知子に見せた。

「ママ、凄い。毛ガード」

母も母なりに頑張つて作戦を考えていたようだ。

母が狙つているのは、圭介か、それとも智か、もしかすると両方なのか。10歳の知子には知る由もない。

母はいつもより多めの野菜を刻みながら言つ。

「もうね、ジョゼフさんには、今夜の夕食にご招待するつてお話しであるの」

策略家の母は、知子より先に圭介と会話をしていたようだ。

「知子には料理の準備を手伝つて欲しいから、早く宿題を片付けね

「はあーい」

知子にとつても、2人のライバル姫から邪魔されずに、智王子と一緒にいられる絶好のチャンス。知子は喜び勇んで隣の部屋に駆け込んだ。ランドセルを置いて、いつものちゃぶ台に宿題を広げる。

今日の宿題は算数。授業で習つたとおりに割り算の筆算を解いていく。いつもはのんびりやる宿題も今日に限つては早い。応用問題もあっさり解いて、知子は母がいる台所へ行く。

知子が母の隣に並んで立つた時、母親は一番大きな鍋を出してモガニを煮込んでいた。知子の母もヤル気満々のようである。

知子もヤル気満々で、母の手伝いをしてテーブルに器を並べていく。

「うーひーこひー」時は流れ、知子の父が帰つて來た。

「ただいま」

「パパ、おかえり」

父は「普通のサラリーマン。某有名会社の経理事務をしている。

「あなた、おかえり」

母も言つ。

父は首元のネクタイを緩めながら、テーブルに並べられた器の数が、いつもと違う事に気づいた。

「なんだ？ 子供の日のお祝いにしては、ちょっと早いんじゃないのか？」

母はこじかかな表情で言つ。

「今日、お隣の相馬さんを」招待したのよ

「は？ なんで？」

父は何も知らなかつたようだ。父の存在は忘れられていたのか。

「今日、姉からの毛ガニが届いたの。6匹入つていて、ちょうどいいから、お隣も呼ぼうと思って。ほらだって、知子がいつもお世話になつてゐるじゃない」

姉とは、北陸へ嫁に行つた母の実の姉の事である。

「確かにそうだが……」

父は、知子の事でなぜ野郎2人をうちに招かなければならいのか、と不服そうな表情をしてゐる。

母は父の背中をポンと押す。

「パパの大好きなお酒も買つてきてあるの。明日は土曜でパパの会社も休みだから、お隣さんとどれだけ飲んでも構わないわよ。だから、早く着替えてきて」

「そつか　じゃあ、軽くシャワーでも浴びて汗を落とすか」

父は、酒飲み友達が増えるチャンスかもと、気が変わり、喜んで隣の部屋に荷物を置きに行つた。酒が鱈腹たらぶく飲めるなら、野郎2人が増えるくらいどうつて事ないらしい。

父が風呂に入つてゐる間に、母が作る料理が順番にテーブルに並んでいく。

料理を並べてゐるのは知子である。

茹で上^フがった毛ガニ。サラダ。酒のつまみ。どれも彩りよく並べられていて、見ているだけで食欲がそそられてくる。それに付け加え、茹でた毛ガニのうまそ^トうな匂いがするから腹の虫が騒ぎ出しそれを宥めて諭すのが大変だ。

しばらくして、風呂場から父の上機嫌の鼻歌が聞こえてくる。

母は、その鼻歌に耳を傾けながら知子に言った。

「知ちゃん。パパ、そろそろお風呂から出でてくるみたいだから、ジヨゼフさんたちを呼んできてくれる?」

「はあーーい

知子は手伝いの手を止めて、玄関へ走つて行く。途中、鏡を見て髪型と服の乱れがないか確かめる。チェックOK。知子は玄関を出て隣へ走つた。

塀から覗く事しかできなかつた相馬家の庭に入る。圭介が手入れしているパンジーが綺麗に咲いている。

知子はパンジーを横切つて相馬家の呼び鈴を押した。

「はい

ドアの向こうで圭介の声がする。

例え相手がドアの向こうにいても言わなければならぬ事がある。

「こなんばんわ

知子は服の乱れを直しながら声を出した。

「知子さん、入つておいで」

圭介の声だ。圭介の招きに応じて、知子は中に入った。入つてすぐの左にある棚の上に、細工が施された綺麗なガラスの置物がある。隣に置いてあるポプリからはよい香りもする。

奥からキング圭介が歩いて来た。極上の紳士は、今日も綿ズボンにカッターシャツをラフに着こなしていて恰好いい。

「息子が今準備をしているから待つててね」

智は家に帰つてきているようだ。

「うん」

今日の智は、どんな服装だろうか。

最近は朝しか会っていないのでビジネススーツ姿の智しか知らない。

知子がお行儀良く待っていると、その智が廊下に顔を出した。

「父さん、ごめん。今シャワーを浴びたばかりだから先に行つてくれる？」

「智、まだ準備をしていないのか」

圭介が体の向きを変えて智の所へ歩いて行く。

智王子は肩にバスタオルをかけて、トランクス一枚の姿で廊下に現れた。

智の胸の筋肉は盛り上がっている。腹も線が縦横に入つて肉が盛り上がりはつきりと腹筋だと分かる。肩についている筋肉も凄い。腕も足もスポーツ選手並みの筋肉がついている。

それでいて、185センチの身長は、智の体型をスマートに見せてしまう。一体何をどうしたらああいう筋肉がつくのだろうか。

10歳の知子でも普通じゃないと分かるほど、智王子は筋肉質でスマートな体型をしていた。

圭介と智は肩を並べて話しているため、なんの話をしているのか、知子の耳まで届いてこない。

知子がつまらなそうに立っていると、圭介が振り返って知子を見た。

「知子さん、智は準備に時間がかかるようなので、私と先に行きましょう」

圭介は歩いて来て、知子がいる玄関に足を下ろした。靴を履く。

「智さんは？」

知子は一番の目的である智の事を聞く。

「髪を乾かして、服を着たら来ると言つていきましたので、すぐに来ると思いますよ」

圭介は、知子の手を握る。圭介の手は大きくて温かい。

「智にも、私の母であるイタリア人の血が流れています。イタリアの男は女性を大切にします。身だしなみにも気をつかいます。きっと、知子さんと知子さんの」両親の前では、きちんとしていたいのでしょう」

圭介はワインクをする。

「だから智は、身だしなみに時間をかけているのですね」

知子は圭介のワインクを受けて心のときめきを覚えた。だが智といふ時ほどの激しいときめきはない。そう感じながら、知子は圭介と一緒に玄関を出た。

父以外の人と手を繋いで歩くのはちょっと恥ずかしい。しかも夜道で、相手は先ほどウインクをした青い目の極上の紳士ときている。その圭介の青い瞳は街灯の光りを反射して夜に煌く宝石のようだ。

圭介は加藤家の玄関に来ると、知子の手を放した。代わりにドアノブを握り玄関ドアを開ける。

「こんばんは」

母が顔を出す。

「こんばんは、ジョゼフさん。わあ、上がつて下さー」

「失礼します」

圭介は加藤宅に上がった。

知子も圭介に続いて家に上がる。

リビングのテーブルには風呂上りの父がいて、座ってビールを飲んでいる。

圭介は改めて父に挨拶をする。

「こんばんは、知子さんのパパさん。」ついで直接お会いするのは初めてですね。相馬・ジョゼフ・圭介と申します」

父も挨拶をする。

「どうも。知子がいつもお世話になつてこられた」

父は圭介を椅子に案内して座らせ、グラスを渡し、そこにビールを注ぐ。

知子が黙つて圭介を見ていると、母が鍋から毛ガードを出しながら言つ。

「知ちゃんも立つてないで、座つたら？」

「うそ」

知子は圭介の隣に座つた。

圭介は父を見てビールが入つたグラスを持ってこいやかに話をしている。

「いえいえ、お世話になつたのはこちらのほうでして、道に迷つていた息子を知子さんが案内してくれたのです」

「うちの知子が。そうだったんですね？」

父の頭の中で、なぜ野郎2人を家に招かないといけなくなつたのか？ の真相を究明するパズルが完成していく。

母は無意識にそのパズルを手伝つ。

「それでね、パパ。ジョゼフさんが毎日のように知子に手作りの洋菓子をくださるよつになつたのよ」

「それはそれは。もう二つめで何のお返しもなく、申し訳なかつたですね」

「いえそんな、お返しつていうほど大したものは作つてないんですね」

嬉しそうに笑う父の前で、圭介は一気にビールを飲み干した。

「おいしい」

「ジョゼフさん、飲める口ですね。だったら、どんどん飲んで下さい」

父は圭介にまたビールを注ぐ。

「パパさんも、飲んで下さい」

圭介も父にビールを注ぐ。

母は圭介に茹で上がった毛ガニを出す。

「姉が送つてくれた毛ガニです。ビーフを遠慮なく食べて下さいね」

「これをお姉さんが。ほう、おいしそうな毛ガニですね」

圭介は毛ガニに手を伸ばした。

大人3人は酒の場で楽しそうにしている。

キング圭介はビールを飲むばかりで、知子に見向きもしない。

知子は仕方なく黙つてモガニの甲羅を外す。

カニの分解は、母の姉がよくカニを送つてくれるので、幼い頃から一人でできる。

知子は大人3人の会話を聞きながら、甲羅の裏についているカニ味噌を食べた。

カニ味噌はおいしげ、一人で食べているとなんだか味気ない。

母が相馬家を夕食に招待するというので、きっと楽しい夕食になると思っていたが、実際は3人の大人から切り離された、知子にとってはがっかりな一人の寂しい夕食時間となっていた。

毛ガニ。別名オオクリガニ。

全身に剛毛が生えているのは、硬くない甲羅を守るためにらしい。

肉食性。天敵はオオカミウオやタコ。

人間以外にも天敵がいるようだ。

毛ガニが主役の夕食は半ば進み、知子の両親と圭介は酒が入つて酔つ払つていた。

知子の母は酔つた勢いもあり、父の横で話をしながら相馬家の情報収集に躍起になつていて。

父は酒飲み友達ができたので嬉しそうにビールを飲んでいる。

圭介は、両親に好意があるようビールを飲みながらリップサービスに勤しんでいる。

知子は、両親も、キング圭介も話し相手になつてくれないので、一人で毛ガニを食べていた。

カニ味噌は食べてしまったので、次は毛ガニの足を折り、足の中にある身を食べよつとするが、なかなか上手に食べれない。

いつもは母がカニの足を割つてくれて、カニの身を食べやすくしてくれたのだが、今は圭介との会話に夢中になつていて、知子の毛

ガードの足を割れつつもしない。

知子はあとで母に頼めばいいと思い、サラダに箸を伸ばした。

今夜のサラダはスライスポテトのマヨネーズ和え。刻んだハムとスライスしたタマネギが入つていて一応サラダもおいしい。

知子が一人でサラダを突いていると、玄関のドアが静かに開いた。

「こんばんは」

智の声である。

知子は椅子から飛び降りて玄関へ走った。

玄関下にいる智は、それでも知子より背が高い。

「智さん、いらっしゃい」

知子は喜んで智を招く。

王子智は風呂上りといつものもあつて上下同じ柄のスポーツトレー
ナーを着ていた。

手には大きな皿があり、中には焼けたピザがある。

知子はピザを覗き込んで見る。

「ピザだ」

智は知子のかわいい反応を見て鼻から笑いを漏らす。

「ふふふ。僕がピザの生地を作つて焼いたんだよ」

「凄い」

智の手作りは初めて見る。

ベースはトマトソースとチーズ、上にベーコンとオニオンとバジルが載つているシンプルなピザだ。

智は知子にピザを見せながら、靴を脱ぐと中に上がった。

知子は智の横について歩く。

ソビングに入つて智はもう一度囁く。

「じょばんは。夕食にお招きトそり有難うござります」

母は早速鍋からモガードを出す。

「智さんいらっしゃい。どうぞ座つて」

智は座つてピザを渡す。

「これ、みんなで食べて下さる」

「あら、おこしあうなピザ。智さんの手作り?」

「ええ」

智は照れながら返事をする。

「パパ、智さんが焼いたんですつて」

「おお、そりか」

「初めまして、知子さんのパパさん」

「初めまして。智君、なんかもうつてばかりですまないね」

「いえいえ、あとこれ。父さん」

智はもう少しお手に持っていたビンを圭介に渡した。

「おお。智、あつたか。よしよし」

圭介は知子の父にビンのラベルを見せながら呟つ。

「パパさん。これはグラッパという、イタリアの酒です」

父は太めのビンを珍しそうに見る。

「グラッパ？ 見た事も、聞いた事もないな」

「じゃあ、試しに飲んでみて下さー」

圭介は、父と母にグラッパを振る舞つ。

知子はそんな圭介や父と母を見ながら椅子に腰掛けた。

智は知子の隣に座る。

「毛ガニか、おいしそうだね」

「うん、おいしかった」

王子智は知子の相手をしてくれるようだ。

しかし大人とは勝手なもので、やっとできた知子の話し相手を奪おうとする。

「智君も飲まないか?」

父は酔いながら手招きをする。

「もう、パパ。そつちで飲んでよ」

知子は王子智を守るために、実の父を牽制する。けんせい

智は笑顔で父に答えた。

「いえ。僕、実は酒が飲めないんですよ」

「もうしつかりとした大人じゃないか。そんなはずないだろう」

「いえ、本当に飲めないんですよ。パパさん」

智が断つていると、圭介が間にに入った。

「息子が酒が飲めないというのは本当です。だから、パパさん。私と飲みましょう」

「そうか。なら仕方がないな」

父は圭介がグラスに注いだグラッパを、ゴクリと喉を鳴らして飲んだ。そのあとすぐに呞^{むせてせき}て咳き込む。

「アルコールの度が高くないですか、これ?」

圭介は自分のグラスにグラッパを注ぐ。

「多少高いかもしませんね。35度くらいありますから」

圭介は平気な顔をしてグラッパをゴクリと飲んだ。

智は知子にピザを手渡す。

「知子さん、今日は元気ないね。何かあったの?」

「ううん。カニが硬くて食べるのが大変だったから疲れただけ」

知子は、智がいなくて寂しかったから元気がないの、と素直に甘えられない。とりあえず智からもらつたピザを食べる。

焼けたチーズが香ばしく生地は餅々としている。

智が焼いたピザは、一人でモガニを食べていた知子の傷心を癒していく。

「おこし。智さん、ピザ作るの上手だね」

「ナリ？ 有難う。ピザの作り方は母さんが教えてくれたんだ」

知子は考える。祖母の看病のため実家に帰省している智の母はどんな人だろうと。

知子が智の母を想像しながらピザを食べていると、智は自分の毛ガニを食べながら、知子の毛ガニにも手を伸ばす。

「さつき、疲れたって言つていたから、知子さんの毛ガニも解してあげようか？」

王子智は、知子がさつき言つた言葉を覚えていた。

「え、いいの？」

「もううん

智は、知子が見ている前で知子の毛ガニを解し始める。

知子の田にはもう智しか映つてはいない。横で酒を飲んで騒いでいる大人3人の声も聞こえない。

田の青い智は、解した毛ガニを知子に手渡した。

「智さん、毛ガニの身を取るのも上手だね」

「上手ってほどでもないよ。知子さんも僕ぐらいになればできるようになるわ」

一仕事終え智はまたパンを食べる。智のパンを食べる仕草も結構いい。

知子はすっと智を見続けていた。

智は知子の皿の前でよく食べた。自分で焼いたピザの上に、器用に母のサラダを載せて食べる。一人で皿の半分のピザを食べたところで、智の食べるスピードは急に遅くなつた。

知子はお茶を入れて智の横に置く。

「お茶だよ」

「有難い」

智はお茶を飲む。お茶を飲み干してから智は知子をじっと見た。

席が隣同士といつ至近距離から、智王子の青い視線を浴びて、知子は急に畏まる。

「知子さん、お願いがあるんだけど、いいかな?」

青い皿で見つめられてお願いをされたら断れない。知子は「クリ」と頷く。

「知子さんの部屋を見てみたいんだ。いい?」

「私の部屋、無いよ」

知子の返事に、智は少し驚いた表情をする。

「じゃあ、どこで勉強をしてくるの?」

「あつちの部屋」

知子は隣の部屋を指さした。

智は知子が指さした暖簾の向こうを見た。

「見てみたい。いい？」

「いいよ」

知子は立ち上がった。

母が気づいて声をかける。

「あら、知子。食べないの？」

「うそ、もういい」

言つて知子は暖簾を潜る。

「智さん、もう少し食べたり？」

「いえ、沢山食べたので、ちょっと休憩します

智もにこやかに断つて知子のあとに続いた。

隣は居間。テレビと背の低い本棚と、知子がよく使つちゃうふ台がある。そのちやぶ台の上に知子の算数の教科書とノートが載つていた。

急いで割り算の宿題をして、母の手伝いにはいったので、教科書とノートを片付け忘れていたのだ。

知子は恥ずかしくなって、開いて置いてあるノートを急いで閉じた。

智はちやぶ台に手をついて畳に直接座る。

「へえ。知子さん、ここで勉強をしているんだ」

智は算数の教科書を手にとつて開いて中を見る。

パラパラとページを捲り、それを途中で止めて、知子の前で開いて見せた。

「これ、知子さんが書いたの？」

知子が見ると、授業中に遊び半分に書いたブタの絵があった。しかもブタの絵はうまくない。

教科書に絵を描いて遊ぶ時は授業中が多い。眞面目に勉強をしていないのを知つたら、智は知子の事をどう思つだらうか。だからと言つて友達が描いたと嘘をついたらもつと智に嫌われるかもしれない。

知子は仕方なく首を縦に振った。

「うん」

「ブタさん、かわいいね」

智の思いがけない誉め言葉に、知子の顔は真っ赤になった。

学校で佳枝や美里と描いた絵を交換して見比べていた時は楽しくて笑つていて、王子智に見られるとしても恥ずかしい。

「知子さん、ノートも見せて？」

智は言うが、ノートにはもっといろいろ描いてある。知子は悩んだ。更に恥ずかしい絵を見せなくてはならないのかと。

「もしかしてダメ？」

智のお願い事は、甘い調べとなつて知子の鼓膜を震わす。

知子はちゃぶ台の前で人生の岐路に立たされた。ノートを智に渡すか、それとも断るか。知子のノートを握る手が震えてくる。

頑張つて考えても、10年しか生きていかない知子は饒舌な断りの言葉が思いつかず、知子は鼓膜に響く智の甘い声の誘惑にも負けて、手を横に動かして智にノートを渡した。

智は赤面している知子の顔を見て、にっこりとしてノートを受け取り、表紙を捲つて知子が書き取つた算数の授業内容を見た。智の口から品のよい笑い声が漏れる。

「フフフ。ノートのほうが絵がいっぱいだ。どれもかわいいね」

知子のノートの中には、先生が説明した算数の授業内容が書き[写]し

てあるが、その周りには動物の絵やアニメキャラクターの絵がいくつも書き込まれていた。

智はゆっくりと次のページを捲つて見ていく。

「これがノーベル学者の子供時代のノートか

智はノートの中味を全て確認し、最後のページに描かれている絵も堪能してから、知子にノートを返した。

「見せてくれて有難う」

知子はノートを受け取る。ノートを持ったまま智の顔をじっと見た。ノーベル学者の子供時代のノート。それはどういう事だらうか。知子の頭には大きな？マークが浮かんでいた。

智は次の催促をする。

「知子さんのほかのノートも見てみたいけど、いいかな？」

智が喜ぶのでほかのノートを見せてもいいが、智が言つたノーベル学者の事が気になり、知子は口を開いた。

「ノーベル学者って何？」

智の顔色が変わる。だがすぐに智は笑顔になる。

「ノーベル学者か……」

智は考え込んで、すぐに答えない。

「ノーベル学者はね……。知子さんが分かるよつこ、ビーハツで説明したらしいのかなあ」

智は「えつとねえ」と考えながら知子の顔を見た。

智の青い目が知子の顔をじっと見つめる。

知子はこんな時も王子智の青い瞳に吸い込まれそうになり、智に見とれてしまう。

智はとびっきりのいい笑顔を知子に向けると、ちやぶ台に手を置いて立ち上がった。

「ちょっと待つてね」

智は暖簾を潜つてリビングに戻る。

リビングでは、3人の大人が酒を飲んで酔っ払っている。

智は圭介の肩に手を置いた。

「父さん。ノーベルの事、知子さんにどうやって説明しよう?」

酒を飲んで笑っていたキング圭介から笑顔が消えた。

「どうしてノーベルの話を。何を話したんだ?」

「話したのはノーベル学者の事だけ。まだ何つていうほど話してない。だからどう説明しようかと思つて」

真顔で顔を見合わせる智と圭介。

知子の両親はグラッパを飲んで上機嫌になつてゐる。

「ノーヘルでバイクだあー」

「いやーん、パパ。警察に捕まっちゃう

父と母は今別世界にいる。

知子は智が戻つてこないので、何をやつているのかと思い、暖簾を潜つてリビングに戻つた。

リビングに現れた知子を、智と圭介は無言で見る。四つの青い目は、全く表情がない。

知子はその四つの青い目を怖いと思つた。

「智ちゃん？」

不安な表情をして知子が智を見上げると、圭介の顔が急に優しくなつて、知子にノーヘルについての説明をした。

「ノーベル学者はね、アルフレッド・ノーベルという偉い人が作った賞からきていて、その賞は毎年世の中のために世界で一番頑張つた人に贈られる賞なんだよ」

キング圭介の顔は全く酔つていないうつに見える。

知子は、ノーベルはとても偉い人で、いっぱい頑張った人がノーベルから賞をもらうらしい。というのを記憶する。目の前に差し出された情報を、知子の脳は漠然と記憶した。といったほうが近いのかもしれない。知子は黙つて頷いた。

圭介は知子の顔を見て急に立ち上がる。

「寝ぼけた。智、そろそろ帰るわ」

「やうですね、父さん」

バイクの運転のマネをして遊んでいた父が圭介を見る。

「ジマゼフさん、もうとやつくりしてこつてトセコヨ」

母も圭介を引止めめる。

「パパもああ言つてますし、そんなに遠慮なさりないで」

「ご好意は嬉しいのですが、夜も遅いですし、知子さんもやめないと

両親と話をしている圭介の後ろを、智は黙々と歩いて玄関へ向う。

知子は智の横に並んで歩いた。

「ねえ、智さん」

「ん?」

智は知子を見る。

知子は智ともっと話をしたいと思つ。でも、何を話せばいいのか分からぬ。今の知子は、急に帰ると言つて、歩き出した智の笑顔が欲しかつた。

「また、遊びに来てね」

「うん。知子さん、そんなに寂しそうな顔をしないで」

今はとても優しく接してくれる智王子。

その智の表情がノーベル学者の話をしたとたん消えてしまつたのはなぜだらうか。キング圭介の表情も。

知子はとても不安でたまらなくて、玄関を下りようとした智の手を掴んだ。

「だつて、明日は土曜日で智さんと一緒に学校に行けないから

「ゴールデンウィークが終わつたらまた一緒に学校へ行けるじゃないか。明日だつて庭で会つかもしれない。父さんは毎日会つていでしょ？」

「そうだけど」

智は知子の手を放して玄関に下りた。靴を履く。

圭介も後ろからやつて来て知子の横を通り過ぎて行く。

「知子さん、ご馳走様でした。また明日会いましょう」

圭介も玄関で靴を履く。

「うん」

知子は寂しそうに智と圭介を見送りて手を振った。

智と圭介が出て行つてから、母が知子を呼ぶ。

「知ちゃん。毛ガニが2つ余つたから、相馬さんちに持つていてあげて」

「はい」

また王子智に会える機会が到来する。知子は毛ガニが入ったボルを受け取ると玄関を下りた。靴を履いて家を出て、小走りで相馬家に行く。

相馬家の玄関前にたどり着いた時、ドアの向こうから圭介の声が聞こえてきた。

「小学生相手に向をやつしてくるんだ？」

「分かってるよ。だから、じつして反省してんじゃないかな」

智の声もある。

夕食の途中で抜け出して隣の部屋で遊んでいたから、圭介が智を叱っているのだろうか。

知子は、一緒に遊んでいた自分も同罪だと思い、急いで玄関ドア

を開けた。ノックもなしに。

会話をやめて知子に注目する圭介と智。二人は靴も脱がずに玄関に立っている。

知子はドアを開けてすぐ目の前に立っていた一人に驚いて硬直した。

智の手はベルトを掴んでいる。

そのベルトには金色に光る金属が差し込まれている。光る金属は知子がよく知っているものだった。

テレビドラマでよく刑事や犯人が持っている。おもちゃ屋にも売っている。同級生の男子から借りて遊んだ事もある。

知子が知る金色の金属は、銃だった。

なぜ智が金色の銃を持っているのだろうか。

智を庇^{かば}おうと思っていた知子は、金色の銃に気を取られて、智の手の下で揺れているベルトを凝視してしまつ。

智は知子に向き直りベルトを後ろに隠した。

圭介が歩いて、智と知子の間に立つ。

「知子さん、どうしましたか？」

圭介の体で智が隠れてしまつて見えない。知子は横に少し移動して智を見る。

「知子さん、どうしたのですか？」

圭介の声に、知子はまた圭介の顔を見る。

「あの……その……」

圭介は笑顔だが、知子がどう見ても、圭介の青い瞳は笑っているように見えない。

そして圭介の後ろにいる智は顔すら笑っていない。

知子は一人の様子に怯えながら、毛ガニが入ったボールを差し出した。

「これ、ママが。二人で食べてつて」

圭介はボールを受け取った。

「ママさん、有難うと伝えてトモヤー」

「うん」

知子が頷いても智の表情は硬いままだ。

「じゃあ、おやすみなさい」

「おやすみ、知子さん」

知子は圭介の声を聞いたあと、ドアを閉めて、急いで相馬家を飛び出した。自分の家に駆け込む。

あの一人の異様な雰囲気は何だったのか。智はなぜ金色の銃を持っていたのだろうか。ベルトの中に銃が入っていたという事は、刑事ドラマのように智はベルトを体のどこかに巻いて、銃を身につけていたのだろうか。

息を切らしてコンビングに来た知子を、酔ぱらった両親が迎える。

父は今も上機嫌で酔つていて、呂律が回つてない。

「お隣の相馬さんはいい人だつたな」

母は酔つ払いながらも後片付けをしている。

「でしょう、パパ」

知子は強張った表情をして父にしがみついた。

「どうした、知子？ 手が冷たいな。外にいたから冷えたか？」

父は酒が入つて赤くなつた手で知子の手を包んで温める。

「パパ、あの人たち、銃を持ってた。金色の」

銃を持っていたのは智だけなのだが、知子には名前を口にして言うほど心に余裕がない。

「じゅう？」

父は知子の手を撫でながら言いつ。

「うん。刑事が持つてる銃」

「金色の？」

「うん、金色」

父は急に笑い出す。

「それはなあ、知子。モーテルガン、だ」

父は、からかい半分に口を大きく開けて最後の「だ」を強調して言つ。

父が知子の心情に気づいているのか知らないが、酔つておひしゃりしている事もあって、知子を笑わせようとしているようだ。

「でも、パパ。刑事みたいに銃がベルトに入つてた」

「銃を入れるベルトもガンショップで売つてる、ぞ」

父はまた、最期の「ぞ」を強調して言い、知子から笑いを取りつとしている。

「もう、パパ。ちゃんと聞いてよ」

「ちゃんと聞いてるだろ」

父は少し不機嫌になつた。知子が笑つて相手をしてくれないのがつまらないからだ。

まだ残つている酒のつまみを口に入れ、口をもぐもぐと動かしながら言う。

「モデルガンが好きな人はな、刑事のマネがしたくて、刑事みたいに本物そつくりの銃を身につけて遊んだりしているんだ。銃が金色のものそうだ。客の気を引くために本物には無い色で鍍金して売るんだ。だから、お隣の相馬さんが持つている銃の事で騒ぐんじゃないの。分かった？」

知子は、おもちゃの銃を貸してくれた同級生の男子も銃を入れるベルトを持っていたのを思い出して、コクリと頷いた。

「分かった、パパ」

「うん、宜しい」

父は知子の頭を撫でた。

本当に父の言うとおりなのだろうか。だつたらなぜ智はベルトを後ろに隠したのだろう。王子智がなぜ、そんな事を……。

風呂に入つても、歯を磨いても、知子の脳は答えを求める。答えは辞書にも百科事典にも載つていない。

夜が深まり、知子は布団に入る時間になつても、智と圭介の笑つていなかつた瞳と、智が持つていた金色の銃の事が気になつて、玄関に立つていた圭介と智の姿がずっと頭から離れなかつた。

その日の夜。

岐阜県の夜空は今日も晴れていた。

月が出ていないので、辺りは普段より暗い。

知子は布団に入つてからも、智と金色の銃が気になつてなかなか寝付けないでいた。

なぜ王子智は、金色の銃を持つている時、笑顔がなかつたのだろうか。明日の智は笑顔で会つてくれるだらうか。

知子の頭の中に、いろいろな不安が交互にあがつてくる。どうか智王子が笑顔で会つてくれますように。知子は小さな胸で何度も祈りを捧げる。

そうして何度も祈りを捧げているうちに、知子は眠りについた。

知子が寝静まつても、智は起きていた。

ルームライトをつけず、薄暗い部屋の中で青い目を光らせて立つている。

その瞳に感情はなく、静かに視線を走らせて、智は隣の部屋へ歩いて行く。

タンスに手をかけ、中から大きなスースケースを出して蓋を開け

る。

中には黒い服とベストがあり、蓋の内側には様々な装備品が固定して入れられていた。

ベストは防弾チョッキだろうか。

智はスポーツトレーナーを脱いだ。鍛えられた智の肉体がシリコンとなって暗い部屋の空間に浮かぶ。

智は黒い服を着る。黒い布は智の肌にピタリとくっついて服の上からでも筋肉質な体がうかがえる。

次に、室内なのに底の厚いブーツをはく。畳を踏んでブーツのはき具合を確かめながら、ベストを着る。

今度は金色の銃が入っているベルトに手を通し肩から提げる。銃の位置は左脇の前。銃が動かないように反対側の肩にもベルトをかけて銃を固定する。

それから、しゃがんで蓋の内側についている様々な装備品を取り出して身に着けていく。

バタフライナイフ、手投げナイフ、ハンドライト、千枚通し、ピアノ線。

金色の銃以外、風変わりな装備はなさそうだ。

智は皮手袋を手にはめた。口から息を吐きながら皮手袋が抜け落ちないように手首のベルトを締める。両方の手首のベルトを締め終

わると歩き出した。

「父さん、準備は？」

圭介の青い瞳が智を見る。

「もうすぐ終わる」

見ると、圭介も同じ姿をしていた。

加藤家の前の道を、酔っ払いが千鳥足で歩いて行く。

その酔っ払いの後ろを、黒い影が横切る。

酔っ払いは気配を感じて振り返った。誰もいない。

「なんだあ、畜生。縁起でもねえ」

酔っ払いは見えない何かに叫ぶと、また前を向いて歩き出した。

酔っ払いの影が遠くなり消えた頃、物陰から黒い服に身を包んだ者が出てきた。

1人、2人、3人……。

黒い覆面をしていて顔が分からない。

次々と出て来て加藤家の門の前に集まる。

集団から一人だけ出てきて玄関前の庭に入る。危険がないのを確

認して、仲間を呼びながら先に進んで行く。

集団は合図を受けて加藤家の庭に入る。そのまま進み玄関ドアを囲んだ。

一人がしゃがんでドアの鍵穴に細い金具を差し込む。その作業は巧妙でほとんど音がしない。

ドアの鍵が開くと、別の者がドアノブを握り静かに開けて音もなく入って行く。

リビングのテーブルの上には、中味の減ったグラッパがまだ置いてある。そのグラッパのBINに、暖簾を潜つて隣の部屋に入つて行く集団の影が映る。

隣の部屋にはちやぶ台とランドセルがあるだけで誰もいない。

近くの襖を開ける。奥では知子の両親がぐつすりと眠つている。

もう一つの襖を開ける。その奥に知子が寝ていた。

23・ドアシップ

集団は知子を囮み、一人がしゃがんで布団を捲る。

知子はぐつすりと眠つていて起きない。

『この子がノーベル物理学者の加藤知子なのか

聞き慣れない言葉。

『こんな幼い子を殺したくないな』

それはイタリア語。

『殺さなければ俺たちは務所暮らしだ』

声は全員男。

『仕方ないだろ。運命とはいつにいつものだ』

黒い服の間から金色の銃が出てくる。

金色の銃口が知子に向けられた。

その瞬間、ちゃぶ台で音がして、眩いばかりの閃光が走った。

『なんだ、この光は！？』

部屋にいた男たちは全員目が眩んで周りがよく見えないよつだ。

知子の部屋に、新たな黒い服装の男が現れて、部屋にいた男たちを殴り倒していく。

『誰だ?』

『何が起こっているんだ?』

『よく見えん』

慌てふためく男たちは次々と倒されていき、黒い服装の男は最後の一人を倒すと知子を見下ろした。

全く息が乱れていない。覆面もしていない。それは智だった。

智は腰を下げて畳に片膝をつける。

「知子さん、起きて下さい」

向こうの部屋では、黒い服を着た圭介が両親を起こしている。

知子は体を揺すられて目を開けた。

ドアップの智の顔が見え、青い瞳が知子を見ている。

「智さん? え? 何? どうしたの?」

知子は、夢を見ているのか現実なのか、判断ができない。

「知子さん、起きて着替えて下さい」

「え、着替える？」

10歳の知子にも恥じらいはある。智さんが見ている前で着替えるの？ パジャマの下、下着だよ。見たいの？ 今の知子はそれが一番聞きたい。

「早く逃げないと。急いで着替えて」

智は、知子を抱きかかえて布団に座らせた。

智に体を起こされ、ようやく知子は畳に倒れている黒服の男たちを目にした。畳には金色の銃が落ちている。

知子はビックリして智にしがみついた。その智の左脇にも、革袋に入った金色の銃がある。知子は怖くなつて智から離れた。

倒れている男たちは覆面をしているので表情が分からぬが、目が日本人の色をしていない。中には智の瞳と同じ色の男もいる。

「知子さんの服はどう？」

智は近くのタンスから引き出しを開けていく。

ちやぶ台がある部屋を挟んで向こうにある部屋では、圭介に起された両親が怯えて畳に座り込んでいる。

知子は、勝手に人のタンスを開けて衣類を探している智の姿に怯える。王子智が泥棒に見えるからだ。

じゃあ、畠に倒れているその他大勢は、仲間割れで喧嘩をして負けた人たちなのか。うちはそんなにお金持ちだったのか。

知子の頭の中に浮上した大きな？マークは、いろいろな疑問を從えて、知子の頭の中を通り過ぎていく。

「知子さん、時間がありません。僕たちは、すぐに逃げなければならんんだ。早く！」

強い口調の智の声に動かされて、知子は立ち上がった。

「私の服はここ」

知子はまだ何が起こっているのか理解できていない。知子が今の状況を把握するために考えながらタンスの引き出しを開けると、智が中から服を出した。

「ズボンを。それと長袖の服」

「えー、スカートがいい」

王子が例え泥棒だつたとしても、智と一緒にの時はかわいい服がいいに決まっている。

「走つて逃げるのにスカートは邪魔だから」

「でも……」

知子は渋つて着替えようとしない。

圭介は時計を見ながら言つ。

「智、連絡はしたのか？」

「出る時したじやないか。父さんだつて見ただろ?」

「時間はとっくに過ぎていい。なんで助けが来ないんだ?」

「分からぬ。聞こうにも通信が繋がらないんだ」

苛立つ^{いらだ}ている智と圭介の声が飛び交う。

王子とキングは何をそんなに苛立つ^{いらだ}しているのだろうか。

不運にも知子が抱いたその疑問だけはすぐに解けた。

家に侵入者が駆け込んでくる音がする。

今度の侵入者はビジネススーツを着ている。覆面^{ふくめん}もしていない。

頭髪の色も違う。瞳の色も違う。スーツの色もまちまちで人数が揃つ^{そろつ}とカラフルだ。

手には全員、短機関銃FNP90。赤い照準光が智と圭介の眉間に光る。

智はすぐに両手をあげた。圭介も両手をあげる。

最後に白いスーツの男が現れた。スーツと同じ生地で作られた白い帽子を被つ^{かぶつ}ている。顔は外国人。智のように日本人の血が混じっているようには見えない。男は手にある金色の銃口を知子に向けて口を開いた。

「ボオナセーラ、トモコ」

現れた男はトロッキオだった。トロッキオはにやけながら続けて言つ。生糀のイタリア語で。

『随分うちのもんを痛めつけてくれたな。兄ちゃんよ

智は何も言わない。

『ここでお前に落とし前をつけてやりたいが、ガルネオ様は全員生かしたまま連れて來いとの仰せだ』

トロッキオは金色の銃口を玄関へ向ける。

『外へ出るー』

イタリア語で言つても、知子には分からぬ。トロッキオは動かない知子を見てもう一度言つた。

『早くしろーー』

智は手を上げたまま言つ。

『知子さん、外へ行きましょう』

「うん」

知子は智の服を掴んで一緒に歩き出す。

畠に倒れていた黒服の男が、仲間に搖さぶり起^レされて1人、2

人と起き上がる。

『「Jの野郎!』

智は、起き上がった黒服の男に横からいきなり殴られた。

「智ちゃん!」

知子は、よろける智の体を支える。

『ふざけた事をしやがって!』

智は首の後ろを叩かれて、体を屈めたあと、畳の上に倒れた。

「智さん、智さん」

知子が呼んでも智は反応しない。

トロツキオは、知子の頬に金色の銃口をくっつけた。

『騒ぐな! かわいい頬っぺに穴を開けたくないだろ?』

知子は頬に当たった冷たい感触を感じてトロツキオを見る。顔の真横に金色の銃が見える。知子は恐怖で全身を強張らせた。

「知子さん、静かに。お願いですから」

圭介が言つ。圭介の後ろにいる父と母はパジャマ姿で怯えながらも無言で首を振つて知子に騒がないでと合図を送つてゐる。

知子は口を閉じた。

『いい子だ。さすがノーベルの卵』

知子の耳はノーベルだけを聞き取る。トロツキオの瞳の色は琥珀色。目の色は違うが、トロツキオも智が言ったノーベルを口にしたのだ。

知子の脳がその理由を考えようとした瞬間、トロツキオは知子が着ているパジャマの襟首を掴み、引き摺るようにして知子をちゃぶ台のある部屋へ連れ出した。

智はまだ畳に倒れている。

「智さん」

トロツキオは知子の口を手で塞ぐ。知子を片腕で抱きかかえて連れて行く。

『外で騒いでもらっては困るんですね』

智の姿は一瞬にして知子の目の前から消えた。知子はトロツキオによつて外へ連れ出されたのだ。

外にはほかにも大勢の外国人がいる。

『いいか。何事も無かつたように、部屋の中を片付けておけ。日本の警察に見つかって国際問題にでもなつたら厄介だからな。鍵もかけておけ。いいな!』

トロッキオは周りの連中に言つと、抱きかかえた知子と一緒に車に乗り込んだ。車の色は黒。

車のドアが閉まると同時に知子はトロッキオの腕から解放された。

知子を乗せた車は走り出す。

知子は窓に手をついて外を見る。

父と母が銃を突きつけられながら車に乗り込んでいる。圭介は他の車に乗るように強制的な誘導を受けている。

父と母が乗った車と、圭介を乗せた車は、知子が乗っている車について走り出した。

「おじさん、誰？」

『黙れ、くそガキ！ 僕は子供が、大嫌いなんだ！』

トロッキオが金色の銃を知子に突きつけて怒鳴るので、知子は後ろに飛びのいて口を閉じた。車のドアが背中に当たつて痛いが、銃を向けられていては痛いとも言えない。とりあえず知子は分かったという意味でトロッキオに頷いた。

『そうやって最初から大人しくしてれば、俺もお前を見て苛々せずにすむんだ』

トロッキオは銃を引いて前を向いた。

今もトロッキオが何を言つているのか全く分からぬ。

車の中は香水の匂いが充満している。更にトロッキオは知子の隣で葉巻を口にくわえて火をつけた。

独特の葉巻の煙の匂いが香水の香りと入り混じって、知子は慣れない匂いで吐きそうになり手で口を押さえた。

車は岐阜県を南下して愛知県名古屋市へ向つて走つて行く。

東の空は細い三日月が顔を出している。昇ったばかりの三日月は赤みを帯びていて大きい。その大きな三日月をバックにして、街の夜景が星屑となつて流れしていく。

車は2時間近く走り、今度は高速道路に入った。一気に加速して走つて行く。

智はどうなつたのだろうか。

高速道路の防音壁の間からたまに見える夜景は綺麗だが、智が生きているか心配で、知子の頭の中には畳に倒れた智の姿ばかりが浮かんでいた。

知子を乗せた車は名古屋港に到着した。

その後ろに、両親が乗った車と、圭介が乗った車、あと黒い集団が乗った車が次々と到着する。

波止場には大型クルーザーが数隻あり、静かに揺れていた。

知子はトロッキオの指示で車から降りた。トロッキオに抱きかかえられて車に連れ込まれた事もあって、知子はパジャマ姿の素足。

夜のアスファルトは冷たく、知子の足の裏を冷やしていく。更に冷たい夜風がパジャマの中にまで吹き込んでいて寒い。

知子は唇を震わせ歯を鳴らしながら両方の腕を擦つて体を温める。

後ろを見れば、父と母、圭介も車から降りて歩いている。黒服の集団も続々と黒い車から降りてくる。

その中に智の姿はなかつた。

『来い！』

知子はまたトロッキオに襟首を掴まれた。そのまま強引にクルーザーへ連れて行かる。

歩く知子の足の裏に砂利が減り込む。知子は痛みで顔を歪ませながら歩く。泣き出せばトロッキオに怒鳴られ銃を向けられる。知子

は半泣きになりながら足の裏の痛みに耐えた。

クルーザーに来るとトロッキオは軽々と知子を抱え、クルーザーの乗員に知子を手渡す。

知子の視界は黒く揺れる波を最後に目まぐるしく変わり、知子は今どこにいるのかが分からぬ。

白い壁が見えて次に鼠色の絨毯じゅうたんが見えたと思った時、知子は下におろされた。

鼠色の絨毯じゅうたんがある狭い部屋。絨毯はふわふわとしていて足の裏を優しく包んでくれる。風もなく暖かい。部屋にあるものといつたらベッドが一つと簡易キッキンくらい。

そばにいる乗員の顔は怖いが、トロッキオのようにすぐに怒鳴つて銃を向けたりはしない。だがその優しさも束の間で、乗員は知子を船室に入れると、外から鍵をかけた。

知子は走つてドアの前に立つ。「助けて」と叫びたいが、銃を向けられるのは怖い。そつとドアに触れ窓を覗くが、外は闇しか見えない。

一人つきりになつてしまつた知子。聞こえてくるのはクルーザーのエンジン音のみ。たまに大きく揺れるのは、波せいだらうか。

知子はベッドに腰掛けて毛布にくるまつた。

どうしてこんな事になつてしまつたのか訳が分からぬ。なぜうちに外国人の集団が来たのか。どうして智と圭介は黒い服を着てう

ちにいたのか。畳に倒れた智はその後どうなったのか。

トロツキオから解放され、金色の銃からも解放された知子は、今やっと涙が出てきた。

「パパ、ママ。怖いよー。会いたいよー」

知子は嗚咽を漏らしながら泣く。
おえつ

しばらくすると外で足音がする。足音は徐々に大きくなつて誰かが近づいてくるのが分かる。

知子は毛布を口に当てて押し黙つた。

歩いてきたのは乗員。乗員も外国人だ。まだ若い。

乗員は、知子がいる部屋のドアノブを握る。ガチャガチャと鍵を開ける音が大きく響く。ドアを開けて毛布にくるまつて寝ている知子に近づく。

知子は毛布の中で目を開けていた。寒くもないのに体が震えてくる。

自分はどうなつてしまつたのだろう。智のように黒い服の人たちに殴られて叩かれるのだろうか。

恐怖が体中を駆け巡り、今では智の心配より自分の心配をしている。

乗員は知子の毛布を剥ぎ取つた。

知子の眼はしっかりと開いて乗員の顔を見る。

『来い！』

乗員は知子の腕を掴んだ。10歳の知子の体は腕を掴まれただけで浮いてしまう。

「腕が痛いよ」

乗員は痛みで顔を歪めている知子をベッドから引き摺り下ろした。腕を掴んだまま外へ連れ出す。

外は名古屋港にいた時より強い風が吹いていて寒い。絨毯もない外の床は凍るよう冷たくて、知子の足の裏はすぐに冷えて、痺れと痛みを感じる。このまま冷たい所に立たされいたら、きっと霜焼けになってしまつだらう。

クルーザーの周りは大海原。ひがはいおおひそばに停泊しているクルーザー以外は、どこにも灯りらしきものが見当たらない。あるとしたら、夜空の三日月と星くらいか。

乗員は無線で連絡を取りながら、その夜空を見ている。一体何が始まるというのだろうか。

大海原の星はよく見える。天の川もとても大きく見えて空の端から端へと続いている。天の川の近くで一際目立つて輝く赤い星がある。知っている人ならすぐに分かる火星なのだが、知らない知子は震えるように輝いている赤い火星を不思議な思いで見つめた。

その火星の近くで知子は点滅する赤い光りを見つける。規則的に点滅する赤い光りは明らかに人工的なものだ。10歳の知子でもそれは分かる。

乗員はその赤い光りを見つけると、空に向けて閃光弾を打ち上げた。

点滅する赤い光りは、飛行機についている衝突防止灯。しばらくして飛行機のエンジン音が知子の耳に届く。飛行機は閃光の周りを旋回すると海面に着水した。

海面に機体の腹をつけて浮かんでいる飛行機。

知子は、海に浮かんだ飛行機を生まれて初めて見た。

普通なら子供心に「飛行機が海に浮いている」と感嘆するのだが、乗員に腕を掴まれている知子はそんな余裕を与えてももらはず、乗員は黙つて知子を甲板の端へ連れて行く。

クルーザーはエンジンを低く轟かせて、ハッチを開けた海面上の飛行機に横付けした。

知子は乗員に抱きかかえられる。抱きかかえられたのは2回目だ。今度はトロツキオではない。知子は、この人は乱暴な事はしないだろうと思っていると、乗員は知子を投げた。

「わっ」

一瞬の浮遊感のあと、知子は飛行機の乗員に受け止められた。乗員は恐怖で体を小さくしている知子を機内へ連れて行き、知子を機内の後方に下ろした。

床に座り込んだ知子は歯をガチガチと鳴らしながら震えている。

次にトロツキオが機内に乗り込んで来る。

知子は震える口を止めるために奥歯を噛み締めた。トロツキオは絶対に子供に優しくしない。車内で金色の銃を向けられてからトロ

トロッキオには気をつけなければならないと記憶している。知子はトロッキオと目が合わないよう体を横に向けた。

その知子の耳に飛行機のエンジン音がまた届く。飛行機はほかにもあるようだ。

外はどうなっているのだろうか。両親と圭介は元気なのか。智は無事なのか。知りたがる知子の目の前で、トロッキオはハッチを閉めた。

知子を乗せた飛行機は海面から飛び立つ。機体は大きく傾き、知子の体は滑つて機体の壁にぶつかる。飛行機は大きく旋回しているようだ。

トロッキオは知子に背を向けてシートに座り葉巻を吹かしている。ここで泣いたらまた銃を向けられる。知子はそう思つて身を侵食する恐怖感に耐えた。

飛行機は東から赤い味を帯びて徐々に白んでくる空を移動する。空全体が白んだ頃、飛行機は空母の上空を飛行し、旋回したあとに空母に着陸した。

知子は乗員に連れられて飛行機から下ろされる。夜の時は見えなかつたが飛行機には車輪がついている。どうやら水陸両用飛行機のようだ。

その水陸両用飛行機が移動したあと、また同じ飛行機が着陸する。その飛行機から知子の両親が降りてくる。両親は、トロッキオの子分から身振り手振りで知子の所へ行くように指示を受けて歩き出す。

途中、両親は知子を見ながら小走りになる。

「知ちゃん！」

「ママー。」

母は知子を抱き締めた。父も知子を抱き締める。

「知子、無事だつたか？」

「うん。パパ、怖いよ」

次に圭介が機体から降りる。疲れた表情の圭介は何も言わずに知子の近くに移動する。

また飛行機が着陸する。一体何機あるのだろうか。

その飛行機から黒い服の人々が降りる。

その何人目かに智が降りた。知子は智をじっと見る。智の左脇にあつた金色の銃はベルトごとなくなつていて、智の左頬はアザになつていて。アザは知子の目の前で殴られた時のものだ。それは間違いないく智だった。

智は移動して圭介の横に並んだ。

圭介は小声で言つ。

「殺されたと思つてた」

「僕もね」

圭介と智の会話を聞いて、知子の父も話して大丈夫と思ったのか、父は小声で圭介に言つた。

「ジヨゼフさん。あなた方の黒い服といい、あの人たちの黒い服といい、これは一体どういう事ですか？」

父の声は小さいが田は噉みつかんばかりに怒つている。

圭介は溜息混じりに答えた。

「話せば長くなりますが、簡単に申し上げると、私と智は未来人で、この時間に生きる知子さんを助けに来たのです。酔い潰れて皆さんがぐつすり眠つているうちに速やかに事を終わらせる予定だった、と申し上げたほうが正確なのかもしれません」

「はあ！？ 未来人？？」

父は、そんな戯言^{たわいこと}には騙されないぞと、威嚇交じりの声を上げる。

今度は智が言つ。

「あの、パパさん。僕はSPなんです。知子さんの身辺警護のために未来から來たのですが、未来で何かがあつたようで、連絡しても増援部隊は來ないし、僕のほかにも未来の銃を持つてゐる……」

智は両手をあげて口を閉じた。

トロツキオが会話に気づいて智に金色の銃を向けたからだ。

『 いじめかと何を話しているか。逃げる相談か？』

トロツキオの言葉は何回聞いても何を言っているのかさっぱり分からぬ。と知子は思つ。

27・ファミリー

圭介は口を開いた。トロッキオを興奮させないように静かに言つ。

『せめて、この家族に、今どういう状況なのか説明をさせてくれ。彼らは、何が起きたのか分からなくて、とても困惑している。お前たちだけファミリーを大切にするだろ?』

圭介の口から出た言葉はイタリア語だつた。

トロッキオは銃を圭介に向ける。

『お前、イタリア人か?』

圭介は条件反射で両手をあげる。

『いや、日本国籍だ。母はイタリア人だが』

『だつたら、これだけ説明しろ。黙つていれば殺さない。つてな

『わかつた』

圭介の返事を聞いても、トロッキオは銃を下ろさない。

圭介はトロッキオの銃を見ながら、知子たちに言つた。

『黙つて従つていれば、殺さないそつです』

父はそれを聞いても圭介に言つ。

「知子に身辺警護が必要だなんて信じられない。これは何かの間違いだ。ジョゼフさん、あの人に私たちを家に帰すように説明してくれませんか?」

言った直後に、トロツキオは父に銃を向けた。

「ひええ」

父は悲鳴をあげて両手をあげる。父の反応は、智と圭介と比べるとかなりの違いがある。

『よく普通に生活をしてきた父と、S.Aとして訓練を受けた智たちとの差だらうか。』

トロツキオは琥珀色の瞳で父の反応を見て苛立ちを募らせる。

『ここには、黙れと説明しても分からんのか?』

圭介も両手を上げながら囁く。

『待ってくれ。今それを説明していろといふだ。もつ少し待つてくれないか?』

圭介はトロツキオの銃を見ながら囁く。

「パパさん、黙つて下さい。彼らは日本語が分からないので、私たちの行動に過敏に反応します。彼らをあまり刺激してはいけない。お願ひだから」

銃を向けられては言つ事を聞くしかない。父は口を閉じて何回も頷いた。

それでトロッキオはやつと銃をさげた。

滑走路が広がる空母の上。裸足で立たされている知子は、踏み締めている冷たい金属が滑走路だという事に気づいていない。

知子たちは歩かされ、別の小型飛行機に乗せられた。

飛行機はすぐに飛び立ち空へ向う。

飛行機の機体が傾き旋回している時に窓から見えた巨大な船が先ほどの空母で、知子はその上にいた事を知った。

銃と飛行機と空母を所有する見知らぬ外国人たち。それでいて彼らは軍服ではなくビジネススーツを身にまとい、空母とはとても不釣合いな恰好をしている。

訳も分からず銃を向けられ、これから何が起らるのか分からないが、知子はやつと家族と一緒になる事ができて、とりあえず人心地着いた。

知子たちは機内の隅へ行くように誘導を受ける。近くで銃を持った外国人が見張りをしている。

知子は母の腕に掴まって腰を下ろした。隣に智が座る。智は知子と眼が合つとアザのある顔でにっこりとした。

こんな時になぜ智が微笑んでくれるのか分からないが、智の隣に座つた圭介も知子と目が合つとにっこりしてくれた。

今の王子とキングの笑顔は優しい。

言葉が交わせない分、表情で大丈夫だよと知子に伝えようとしているのだろうか。

知子は二人の笑顔が何を意味しているのか分からなかつたが、王子智とキング圭介の笑顔に釣られて、知子も少しだけ微笑んで笑顔を見返した。

落ち着いてくると子供の好奇心が先立つて、知子の瞳は狭い機内を見渡す。

壁と床は全部エンジ色のホール天の生地で覆われていて素足でも温かくて気持ちがいい。

少し離れた場所に、ソファーに腰掛けたトロッキオがいる。知子たちを監視するために体の前面を知子たちに向けている。

トロッキオの前にあるテーブルには、ベルトに差し込まれた金色の銃が置いてあり、トロッキオはそこで葉巻を吹かしながら酒を飲んでいた。

金色の銃を持つていたのは、智とトロッキオと知子を殺そうとした黒服の男の3人。あの銃は刑事ドラマや映画と同じで、みんな黒い短機関銃を持っている。

トロッキオが葉巻の灰を灰皿に落とすたびに、ビジネススーツの胸元が開き金色の銃が見え隠れする。という事は、テーブルの上の金色の銃は、智が持っていた銃だろうか。

知子の頭脳は拉致された理由を探してぐるぐると回転して動く。

智とトロッキオの口から出た「ノーベル」という言葉。

圭介は、世の中のために世界で一番頑張った人に贈られる賞だと
言つていたが、それが拉致とどういう関係があるのか。

知子の心の中に夕食の時に聞いた智の声が蘇る。智は確かに知子
のノートを手にとつて言つた「ノーベル学者の子供時代のノートか
」。

知子は思つ。未来の自分はノーベル学者なのか。でも違うかもし
れない。知子は答えを求めて智を見た。

智は落ち着いた表情で周囲を観察している。

周りには短機関銃を持った見張りがいるので、知子は智に答えを
教えてと声にして聞くことができない。

そのうちに智はじつと見つめる知子の瞳に気づいて、首を動かし
て知子を見た。

アザのある智の顔を見ているうちに知子は辛くなつて涙を流す。
王子の頬にあるアザは、少なくとも自分のせいではいたのだから。
声を出す事が許されない今、どうやって智に謝ればいいのだろう。

智は突然泣き出した知子を見て何がなんだか分からず動搖してい
るようだ。

知子の母がそれに気づいて無言で知子の頭を引き寄せて胸に抱き知子をあやす。

知子はひたすら母の胸で泣き続けた。

小型飛行機は一度パキスタンのイスラマバード国際空港で補給をしてイタリアの孤島ガルネオ島へ向つた。

知子と両親は疲れて眠つていたため飛行機が一度着陸した事に気づいていない。それを知つてるのは起きていた圭介と智だけ。

日本からイタリアのガルネオ島まで約12時間。空を移動して小型飛行機はガルネオ島に到着した。

知子は母に体を揺らされて目を覚ました。

智と圭介はすでに立つていて知子を見下ろしている。

母は腰を上げて中腰になり、知子を先に立たせてから立ち上がつた。

飛行機はいつの間にか着陸していて機内の窓から何本かの木が見える。

トロッキオの子分に誘導されて飛行機を降りると、窓から見えた木の先にゴバルトブルーの波を揺らして広がる海が見えた。

知子は連れられて車に乗る。今度はトロッキオでなく父と母が一緒にいる。

知子が車の窓から外を見ると、圭介と智が乗り込んだ車にトロッキオが乗り込むのが見えた。

知子としては両親と車に乗れて安心なのだが、すぐに銃を向けるトロッキオと乗っている王子智とキング圭介が心配で仕方がない。

車はそんな知子の思いを乗せて走り出した。

道路はあるが標識も信号も何もない道。その道はずつと先のガルネオ自慢の白い別荘へ続いている。

途中牧場を通り過ぎる。知子は牧場にいる牛が全てガルネオのものとは知らない。次に通り過ぎる畠も。

車は10分ほど走りガルネオの別荘に到着した。

玄関前はロータリーになつていて、ロータリーの中心には噴水があり水を噴き上げている。

知子の乗る車は玄関に横付けされ、知子は車から降りた。

玄関前の階段の左右に女神像が立ち、知子を見下ろしている。女神像の表情は優しく、来訪者の知子を歓迎しているように見える。

知子は白い別荘を見て思う。1階建てのホワイトハウスみたいだと。

智と圭介も車から降りて、知子の横に並んで立つ。

トロッキオが後ろから現れて知子たちを通り過ぎて行き、それから背中を押された知子たちがトロッキオのあとに続いて階段を上つた。

トロッキオは扉を開けて中に入る。知子たちも中に入った。

中はバリアフリーで玄関との段差はない。広い間取りは玄関内といつよりエントランスといったほうがいいかもしれない。

同じ服装の人が数人知子たちとすれ違い、無表情で知子を見ていく。ガルネオに飼われている召使いなのだが、知子にその知識はない。

知子は自分のパジャマ姿と、靴をはいていない裸足を気にして、召使いと目が合わないよう下を俯いて歩いていた。

トロッキオは真っ直ぐ歩いて行き、目の前の扉を開けて入つていく。知子たちも誘導されるがままに歩いてその中に入つた。

明るい部屋。庭が一望できる大きな窓ガラス。壁に沿つて置かれた高価そうな棚。棚の中と上には調度品が飾りのようにならべて置かれていた。

庭は海まで続いているかと思うほど芝生が一面に広がり、テラスの近くにある丸いプールには透明な水が静かに揺れていた。

テーマパークのような家。これが知子の第一印象だった。

その家主のガルネオはパジャマ姿で大きなテーブルに一人座つて朝食を食べている。両手の指全部に大きな宝石がついた指輪をしている。場合によっては一本の指に指輪が3つ填まつていたりする。

知子たちはそのガルネオの前に一列に並んで立たされた。加藤家

は全員パジャマ姿。父と母は靴をはいているが、抱かれて家を連れ出された知子はまだ裸足のまま。智と圭介は黒い服装のままである。

ガルネオは牛乳がかけられたコーンフレークを口に入れて、唇を牛乳で濡らして白くさせながら知子を見た。

『その娘、写真より幼いな』

ガルネオはにやつきながら知子を頭の上から足の先まで見てている。

知子はガルネオの銀色の瞳が怖くて母にしがみついた。しかし、子供の好奇心で怖いもの見たさにガルネオの顔を見てしまう。

ガルネオは60歳くらいのオヤジだが、丸顔に天然パーマの巻き毛と鼻の下にあるヒゲ面がスーパーマリオに似てなくもない。

それとは対照的な細面のトロッキオは、ガルネオのコーンフレークが入った器の横に、ベルトに入った金色の銃を置いた。

『ガルネオ様、あの男がこれを持っていました』

『何!』

ガルネオはトロッキオがさした指の先を見る。その先には智がいた。

29・ブローニング・ベビー

ガルネオはフキンで口元を拭いてテーブルの上の金色の銃を手に取る。銃のグリップを握り近くの壺に狙いを定めて引き金を引いた。

銃口から赤い光線が出て壺に穴が開く。

知子も、父も母も金色の銃が普通の銃でないのを知る。

ガルネオは横目でトロッキオを見る。

『1丁だけか?』

『はい、1丁だけです。ほかはナイフやライトなどで、大した物は持つておりませんでした』

ガルネオは銃を反対の手に持ち替えた。

『こいつは俺たちが持っているレーザー銃よりシンプルでスマートだ。あいつから話が聞きたい。日本語ができる奴を呼べ』

『それは必要ありません。あの男一人はイタリア語が話せます。先ほど車の中で確認をしました。なあ、そうだよな?』

トロッキオはガルネオに説明をしたあと、智と圭介の両方を見る。

『ああ』

『ええ』

智と圭介は返事をした。

ガルネオは金色の銃を前に出して聞く。

『この銃をどこで手に入れた?』

圭介が答える。

『別に手に入れるってほどでもない。お前たち全員が銃を持つているように警察も軍人も普通に持っている』

『普通に持っているだと!? マフィアもか?』

『マフィアも。多分。見た事はないが』

圭介の返事を聞いてガルネオは立ち上がり^{すそをめく}た。パジャマの裾を捲^{すそをめく}る。出っ張った腹のパジャマズボンのゴムに金色の銃が差し込まれている。ガルネオはそれを抜いて圭介たちに見せた。

両手にある銃はどちらも金色だがガルネオの腹にあつた銃は大きい。その大きいほうの銃を圭介たちに見せた。

『これは10億アメリカドルもするそうだ。こっちの小さいのはいくらだ?』

圭介と智は顔を見合^{あわ}る。10億アメリカドルの高額に驚いているようだ。

智がガルネオに言つ。

『小さいほうは2000アメリカドルくらいだつたと思つ』

『2000アメリカドルだと！！』

ガルネオは素つ頓狂な声を上げて続けて言つ。

『俺をからかうんじゃねえ。こいつはレーザー銃だ。そんな安くねえだろ。ああ？』

ガルネオは銃を振り最終的に智に銃口を向けた。

今回の智は手を上げずに銃口を見ている。

圭介はガルネオに言つ。

『大きいほうのレーザー銃は旧式だ。S&WM39をモデルにアメリカ軍が開発した当初のもので製造数はとても少ない。だから高額なんだと思う。小さいほうは、その後ブローニング・ベビーをモデルにして開発された量産ものだから、価格はそれよりずっと安い』

ガルネオの眉毛がピクリと動いた。

『お前、ひょつとして未来から来たのか？』

圭介は頷く。

『ああ。未来から来た』

ガルネオは大きく頷く。

『ほり。どうやって来た?』

圭介が答えないでガルネオは銃を突きつけてもう一度聞く。

『どうやって来たか答える!』

それでも圭介が答えないで、ガルネオは知子たちに銃を向けた。

知子と両親は震え上がって身を寄せた。

智が顔色を変えて切羽詰った表情で説明を始める。

『タイムマシンで来た。でもタイムマシンは無い』

ガルネオは銃口を智に向けた。

『なんだ?』

『悪用されたら困るからだ』

『嘘をつくな。どこかに隠してあるんだ?』

圭介が言つ。

『嘘じゃない。本当にタイムマシンはない』

ガルネオは知子に銃を向けた。

『言いたくなるよつてやる』

智は血相を変えて言つ。

『本当にタイムマシンはないんだ。未来の法律で、過去にタイムマシンを保管する事は禁じられているから』

ガルネオは智の必死の説明に納得した。

『そういう事か。未来の法律で決まっているなら仕方ないな』

ガルネオは知子に照準を合わせる。

知子は怖がって母にしがみついている。

圭介の声が急に大きくなる。

『待て、その子を撃つな』

『タイムマシンが無いなら、もつお前たちに用は無い。この娘も生かしておくと俺の島がなくなる』

『待て、撃つんじゃない』

圭介は叫び続ける。

『その子はタイムマシンの設計者だ!』

圭介が叫んだ直後、辺りはシーンと静まり返った。

圭介は肩で息をしながらガルネオを見ている。

知子は声を荒げたキング圭介を初めて見た。イタリア語が分からぬ知子は、圭介がなぜ必死になつているのか分からなかつたが、圭介の叫び声を全身に受け、勇ましいキング圭介の姿が知子の脳裏に焼きついたのはいつまでもない。

ガルネオは手首を動かしてレーザー銃の銃口を天井に向かた。

『今、なんて言った?』

圭介は息を荒くしながら囁つ。

『その子は、タイムマシンの設計者だ。その子を殺せばタイムマシンは存在しなくなる。タイムマシンが存在しなければ、タイムマシンに乗つて来た私たちも2008年のこの時間に存在しないし、そのレーザー銃もお前の手から消えてなくなる』

『なんだ? 話が見える。この娘は将来、俺の島を乗つ取るんじゃないのか?』

『正確に言えば……』

圭介が言いかけた言葉を智が止める。

『言つたらダメだ。マフィアに言つたら未来が変わつてしまつ』

『うるさい、小僧!』

ガルネオは両手にある二つのレーザー銃を智と知子に向ける。

『撃つな! 言つから撃つな』

圭介はまた叫ぶ。息を整えガルネオが持つてている大きさの違う両方のレーザー銃を見ながら囁つ。

『正確に言えば、この島に時間移動の研究施設が作られ、大人にな

つたあの子がタイムマシンを設計し、その設計を元にタイムマシンが作られるんだ』

圭介の頬に汗が伝う。

『それに、そのレーザー銃の金属部はタイムマシンの内壁と同じ特殊合金が使われている。その特殊合金の開発を依頼したのも未来のその子だ』

『ほひ』

ガルネオはレーザー銃を下ろした。嬉しそうにトロッキオを見る。『今のを聞いたか、トロッキオ？ あの娘がタイムマシンの設計者だと』

『はい、聞きました』

ガルネオはとり憑かれたように笑い出す。天井を見て笑うガルネオの声が部屋中に響き渡る。

『がははは。こんなに笑ったのは久し振りだ』

ガルネオはまだ笑っている。笑いながらトロッキオにレーザー銃を見せる。

『お宝は、こいつじゃねえ』

トロッキオは信じられないといった素振りをして言ふ。

『なんですか？ その未来の銃を武器商人に売れば巨額の資金が懐に転がり込みますぜ』

『だがレーザー銃は新しく手に入つたこの銃を合わせて全部で11丁。売つぱらうにしても数に限りがある。俺たちもこの銃は使いてえ。だがよ、あの娘をうまく育てれば、俺たちの言つがままにタイ

『マシンの設計をして、あわよくばレーザー銃の設計もある。あの娘は生きている限り金蔓かねづるを生み続けるんだ』

トロツキオはガルネオの意見に反して首を横に振る。

『ガルネオ様。俺たちは、あの娘が大人になるまで待たなければならぬんですか？ イヤですぜ。その銃を売つて金をファミリーで山分けにしましょう。そうすれば俺たちは全員遊んで暮らせますぜ』

ガルネオの表情が急に険しくなり、トロツキオに怒鳴つた。

『うるせえ。俺が決めた事に口答えをするな。孤児あだだつたお前を育てたのは誰だ？ 俺だろ、トロツキオ。お前はその恩を仇で返すつていうのか？ ああ？』

『いえ、そんなつもりは……』

『だつたら、黙つて俺の言う事を聞け。いいな！』

『……はい、分かりました』

トロツキオの返事を聞いたガルネオは召使いに叫んだ。

『おい、こいつらを部屋へ連れて行け。地下室じやねえぞ。分かるな？』

トロツキオが言つ。

『ガルネオ様、そんな事をしたらここから逃げますぜ』

『心配ない。ここは離島。そう簡単に逃げられやしねえ。それにこいつらを逃がすほどドン・ガルネオの子分はバカじやないだろ?』

『そうですが……』

ガルネオは引き続き呪使いに言ひ。

『とりあえずだ、こいつらのパジャマ姿をなんとかしろ。あと、娘の裸足もな。飯も食わせる。栄養不足で頭が悪くなつたら金が入らなくなるからな。がはははは』

ガルネオはまた笑い出す。

『未来は俺が変えてやる。研究施設も建ててやるや。このドン・ガルネオが』

ガルネオは太つた体を揺らしてパジャマ姿で踊りだす。

『世界征服も夢じゃねえ。タイムマシンも、レーザー銃も、全部俺のものだ』

知子の目に悪魔の姿をしたスーパー・マリオ、ガルネオが映り、そして思う。この人はワリオだ、と。

ガルネオの笑い声は気味悪く、しゃべるたびに口から飛び散る唾^{つば}が汚らしい。

両親も、気違ひのように騒ぎ出したガルネオを怯えた目で見ている。言葉が分からぬから尚さら怖いのだ。

召使いが知子たちを囮む。

圭介は知子たちに声を掛ける。まだ圭介の額の汗は乾いていない。

「パパさん、ママさん、知子さん。もう大丈夫です。身の安全は保障されました」

安全と聞いて父が真っ先に言つ。

「ジョゼフさん、これはどういつ事ですか？」

圭介は、ガルネオがそばにいるので、といつ意味を含めて視線をガルネオに向ける。

ガルネオは、近くにいた女の召使いの手を取つて一緒に踊つている。

「パパさん、とりあえず彼らに従つて移動しましょう」

「分かつた」

知子たちは召使いに連れられてリビングを出て行く。

最後に、知子の耳に嬉々として踊つているガルネオの奇声が届いたところでリビングの扉は閉められた。

今日は5月4日。

イタリアの孤島。ガルネオ島は今日も晴れていた。

シチリア自治州にあるガルネオ島は、イタリアの南に位置しているだけあって、5月の日差しは暑く感じる。

気候は日本と似ているが、湿度が日本より低いため、空気がサラッとしていて肌に心地よい。

知子は今朝、圭介から今日が5月4日だと聞かされてビックリした。なぜなら、知子は2日過ぎの5月5日だと思っていたからだ。

知子がそう思うのも無理はない。知子が拉致されたのが5月2日の夜。厳密にいえば深夜を過ぎてるので、5月3日の三日月が地平線から顔を出す時刻になる。

三日月が昇る時刻が深夜2時半くらい。車で岐阜県から名古屋港まで移動し、名古屋港からはクルーザーで移動し、水陸両用飛行機で空を飛び、大海原のどこに停泊していたのか分からぬ空母に着陸し、空母にいた時は朝陽が水平線にあつたのを知子は記憶している。

日の出の時刻は5時くらい。5時頃に小型飛行機で空母を飛び立ち、あとは朝陽と一緒に空を移動してイタリアに来たのだ。

途中、飛行機は補給のためイスラマバード国際空港に着陸したの

だが、知子は眠っていたので気づいていない。

その眠っていた時間を知子の体は2日過ぎたと判断をして、知子自身もそう思っていたのだ。

地球の裏側へ海外旅行をした事がある人が必ず経験する時差ボケを、10歳の知子は今経験していた。

知子は起きたばかりのベッドの上で指を折つて寝た回数と過ぎた日を確認する。どうしても経過日数が合わない。

昨夜、圭介からイタリアと日本は時差があるといつ説明を受けているのだが、知子はまだ理解しきれていなかった。

パジャマは昨夜の入浴後に呑使いが持つてきたのを着ている。素材は感触からして綿。悪くはない。

昨夜入った風呂も、銭湯のように広く、母と一緒に入れてよかつたと思っている。ただし、住み込みの呑使い用の風呂に一番に入れてもらつたとは気づいていない。

夕食はご飯もあったが、日本のように炊き込みではなく、おかゆになっていた。智曰くリゾットというものらしい。あとはパスタやピザ。おいしかったが、日本のパスタやピザとは風味が違っていた。

一番知子の印象に残っているのは昨夜の夕食後の出来事だ。

圭介はガルネオと別れてから、通訳をして呑使いの言葉を知子たち家族に伝えた。

「大人しくしているなら、客用のリビングと個室を行き来してもいいそうです」

それを聞いた知子たち家族は、夕食後、一息ついてから圭介の部屋へ行つたのだ。

圭介の部屋には智がいて、一人してベッドに腰掛けて何かを会話していたのだが、知子たち家族を見るなり、圭介は会話をやめて、ドアにいる知子たちを中へ招いた。

中は個室なのでベッドが1つに、テーブルが1つ、椅子が1つあるだけで狭い。

知子はベッドに腰掛けていた智の隣に座つた。

今の中は知子に微笑む。

知子は王子智の青い目と笑顔が嬉しくて智の左頬にあるアザを指さした。

「頬つぺ痛い？」

「ちょっとだけ痛いかな」

「大丈夫？」

「うん、僕は大丈夫だよ。知子さんもいろいろあつて怖かったでしょ。大丈夫？」

「私も大丈夫」

智の話し声は優しく知子の耳に響いて心地よい。

智と知子が笑顔で会話をしているうちに、父はテーブルにもたれ、母はその横にある椅子に腰掛けた。

知子も母も、圭介や智に聞きたいことがいっぱいあり、特に父の圭介に問い合わせをする意気込みは凄かつた。

「圭介さん、これはどういう事ですか？　あなた方は未来から来たつて言うし、なぜ私たちは拉致されてここに連れてこられたんですか？　一体ここはどこなんですか？」

圭介としては予想していた展開だつたらしく、落ち着いた青い眼で父を見て話し始めた。

「ここは、イタリアの南部にある島です。島はマフィアのドン・ガルネオが所有しています。ここで話す事は全てマフィアには秘密にして欲しいのですが、実は、そちらの知子さんは、ノーベル物理学賞を受賞する人なんです」

「は？」

父が開けた口は、両方の扁桃腺が見えるほど大きく開いていた。

知子は特にやる事がないので父の口の中を覗く。

圭介は、父の表情を笑う事なく真面目な表情で説明をする。

「未来の知子さんは、大学を卒業後、大学院に入り、院内で新相対

性時空移動理論を書き上げ学会へ提出します。それで博士号を取得するのですが、その後も知子さんは時空移動の研究を続け、28歳の時にタイムマシンを発明するのです

「つむの知子が？ タイムマシンを発明？」

父が圭介に聞き返すたびに、父の顔は手を使っていないのに手の周りにシワが寄つて面白い表情になる。

知子は、父の表情を見て静かに笑いながら、大人たちの会話を聞くが、圭介は全く笑っていなかった。

「はい、そうです。そのタイムマシンを欲しがる者や団体が、未来には沢山おりまして、タイムマシンを売つてくれ、知子さんを研究所に招きたいと、交渉を持ちかけてくるのはいつもの事で、タイムマシンを盗もうとしたり、知子さんを拉致しようと強硬手段に出る不届きな者もおり、未来の知子さんは国際レベルで保護される立場となっています」

知子の父はもう何も聞き返さなかつた。顔は驚いたままなのだが、黙つて頷いて無言で圭介の話を催促している。

圭介は、知子の父の表情が幾分落ち着いてきたのを見ながら話を続ける。

「その後タイムマシンの量産が可能になると、タイムマシンの特許権やノーベル物理学賞を欲しがる者が現れ、今度は過去の知子さんの命を狙うようになったのです」

そのあとは、智が説明をする。

「時空を移動するには特殊なエネルギーが必要になります。僕たちは時間エネルギーと呼んでいますが、その時間エネルギーが無許可で2008年に向けて使われたのです。その時のエネルギー数値は世界各地の時空移動を研究する施設で計測されました。計測の報告は国際科学アカデミー時空移動研究所に入り、研究所から連絡を受

けた日本は、至急2008年の知子さんの身辺警護をするよう、S.P.時間警察日本支部に要請をしたのです。その命令を受けたのがS.P.の僕でした

「S.P.ってなあに?」

知子の質問を聞き、智はまた笑顔になつて答える。

「S.P.はね、セキュリティポリスといってね、人を危険から守る仕事なんだよ」

知子は、だから智は毎朝一緒に登校してくれたんだと思った。

今度は母が質問する。

「じゃあ、圭介さんもS.P.なの?」

「いいえ、私はタイムマシンのH.O.N.G.I.Aです」

圭介の答えを聞いて声を出した者はいなかつたが、父親が一番驚いた表情をして固まつていた。

母は少々戸惑いながら聞く。

「タイムマシンのH.O.N.G.I.Aのあなたが、どうしてここに来たんですか?」

「未来では、タイムマシンの完成に伴つて、新しい法律ができました。時間犯罪に関する法律です。その中に、タイムマシンを過去に保管してはならないという項目があります。それは過去の誰かがタ

「タイムマシンを発見して悪用するのを防ぐためです。私は2008年に飛んだタイムマシンを未来に戻すためにきました。もしそれができなければタイムマシンを破壊しなければなりません。それともう1つ

圭介は急ににっこりとして知子を見る。

「私も技術者として、ノーベル物理学賞を受賞した加藤知子さんの子供時代の生活を見てみたかった。まあ、これは任務以外の事なので、未来の人には秘密にしておいて欲しいのですが」

圭介は苦笑する。

父は、拉致された状況下で未来の人間に告げ口なんかできる訳がない、と思ったが、そのツッコミは知子を助けるため、未来からわざわざ来てくれた礼としてあえてしなかった。

その後も、これからどうすればいいのか？ 助けは来るのか？ など、両親の圭介に対する質問は続き、圭介は「定期連絡がなくなつたので、未来の時間警察も私たちを探していると思います。ガルネオがタイムマシンの技術を欲しがっている限り、知子さんとご両親は殺される事はありません」と説明をし、そのほかの質問には全て分からないと答えた。

昨夜の知子は、難しい表情をしている大人たちの顔を見ながら、ずっと会話を聞いていた。

タイムマシンは、アニメやマンガを見ているから知っている。でも自分が作るとは到底思えない。

ノーベル物理学賞は、モガニを食べた日に圭介から説明を受け、昨夜の大人たちの会話も聞いていたが、一夜明けた今もよく分からぬ。

今の知子が理解している事は、ここが日本ではなくイタリアだという事と、自分たちが拉致されてここに連れてこられた事だけ。

今ベッドに座つて足を動かして遊んでいる知子は、昨夜の大人たちがしていた話の意味がよく分からなくとも、誰が何を言ったのかは一言一句思い出せる。昨夜の王子智の笑顔も思い出せる。キング圭介の笑顔も思い出せる。両親もいる。クルーザーに一人でいた時に比べたら、ずっとずっと安心でいられると思つていた。

そういう訳で現在は5月4日の朝なのだが、大人たちはいろいろな事があつたせいで疲れて眠つているのか、両親も誰も知子の部屋に来ない。自分から両親の部屋へ行つたほうがいいのかと考えていると、ドアからノックの音がした。

『失礼します』

中年女性の召使いが部屋に入つてくる。化粧のない顔だが、ガルネオやトロツキオと比べると、とても優しい表情をしている。ただし、その召使いが何を言つているのか話す言葉は分からぬ。

知子はベッドから降りた。

「待つて。圭介さんだったら、言葉が分かるから。今連れてくるから」

走り出した知子を召使いは引き止めた。知子の顔の前に指を一本

立てて見せる。

「何?」

知子が召使いの指を見ていると、召使いは知子の裸足を指さした。

「下がどうかしたの?」

召使いは体の向きを変えて外からワゴンを引つ張つてくる。

そのワゴンには衣類と靴が載つていた。

召使いは絨毯の上に靴を置く。茶色の子供用の革靴だ。

「私がこれをはくの?」

知子が足を出すと、召使いは何度も頷いた。

知子は足を入れる。きつくて足が入らない。

すると召使いは別の靴を絨毯に置いた。それも茶色の革靴。今度のは少し大きいがはけない事もない。知子は召使いの前で両方の足を革靴に入れてはいて見せた。

召使いは知子が靴をはいたのを確認すると、今度は衣類を手渡した。

パンツ・肌着・服・スカート・靴下・春用の上着・ハンカチ。必要なものは全て揃っている。

「着替えるの？」

知子は聞くが、召使いは会釈をすると部屋を出て行ってしまった。

知子は渡された衣類を見る。きっと着替えるのだろうと思つ。

服は無地だが変わった織り方がしてあり織り目が模様となつて表面に浮き出ている。スカートの裾は膝下まであり腰はゴムが入つていてフリーサイズになつてゐる。靴下は白でフリルがいつぱいついていた。

知子はフリルがついた靴下をはくのは親戚の結婚式依頼だと思いながら、パジャマを脱いだ。下着も変えないといけないので、それも脱いで素つ裸になる。召使いがくれたパンツをはく。サイズは少し大きいが別に問題はない。

肌着も着る。服に手を伸ばす。その服を掴んだ時、またドアからノック音がした。

「知子さん、起きてる? 朝ご飯ができたって」

智の声がして、智はすぐにドアを開けて中に入つて來た。

智は着替えがすんでシャツとジーパン姿になつてゐる。

知子は持つてゐた服で体の前面を隠す。急な事で声も出ない。

智は着替え途中の知子を見て赤面する。

「うわっ、『じめん』

智は一田散に部屋を飛び出した。

「知子さん、ごめん」

ドアの向こうから智の声がする。智はドア際に立つているようだ。

知子は持っていた服を急いで着る。スカートも靴下もはく。靴をはいて、そつとドアを開けて外を覗いた。

智はまだドアの傍に立っていた。智の顔はまだ赤い。

「知子さん、ごめんね」

知子の顔も赤くなる。

「見た?」

「見てない」

智は首を横に振る。

知子も一緒に首を横に振つて、智の言葉を否定する。

「ううん。智さん、絶対に見た。だって私と田が合つたもん

「そんなに見てないよ

智は弁解する。

「やつぱり見たんだ

「だから、知子さんの顔から下は見てないって」

知子は2、3歩足を進めて、右足を軸にぐるりと回転して体の向
きを智に向けた。

「この服かわいい？」

知子が急に話を変えたので、今度は何を言い出したのかと智の青
い瞳は知子をじっと見る。

智が答えないので、知子はもう一度聞いた。

「見てないんでしょ？ じゃあ、今見てビックリ？ かわいい？
似合ってる？」

智は鼻からスースと息を漏らし、口を閉じたまま喉を鳴らして笑
つてから顔いっぱいの笑顔になる。

「かわいい、お姫様みただ」

「うわあーい」

知子は有頂天になる。

喜んではしゃぐ知子がどこかへ飛んで行ってしまった。智は
手を伸ばした。

「朝ごはんを食べに行こう」

「うん」

知子は智と手を繋いだ。

5月4日の朝。知子と智は朝食を摂りに一緒にリビングへ行く。

リビングには、父と母、圭介が先に来て椅子に座っている。

服もきちんと着替えている。きっと畠使いが持ってきた服だらう。

知子は智の手を放して母の隣に座つた。

朝、顔を合わせたら必ずしなければならない事がある。

「ママ、パパ、おはよ」

知子は朝の挨拶をする。

「おはよ」

母は挨拶をするが、父は挨拶をしない。

父はテーブルに両腕を置いて、どこか一点を見つめて考え方をしている。父に何かあつたのだろうか。でも、朝から機嫌の悪い時があるので父の事は後回しにして、知子はとりあえず圭介にも挨拶をする。

「圭介さん、おはよ」

「知子さん、おはよ」

圭介はいつもと変わらぬ極上の紳士の趣で挨拶をした。

智は圭介の隣に座る。圭介が智にぼそりと小声で聞く。

「さつき、騒ぎ声が聞こえたが、何かあったのか？」

智の顔が真っ赤になる。

「いっ、いや、何もないよ」

智は持つたばかりのフォークを落としてしまう。

「本当に、何もなかつたのかな？」

今度の圭介は知子に聞いたのだが、フォークを拾っている智はそれに気づかず答える。

「本当になんにもなかつたから」

智が返事をしてしまうので、圭介は視線だけで知子にも聞く。

「何もなかつた。と思つ」

知子も赤面しながら返事をした。

相手はキング圭介。知子の着替えの最中に智がドアを開けてしまつた事までは分からぬにしても、智と知子の間に何かがあつたと

感じてこようつだ。

知子は鋭い圭介の勘にびっくりしながら田の前のパンに手を伸ばした。

朝食を摂り始める知子。今の知子は、様子が普通じゃない父の事を忘れてしまっていた。

朝食後、知子の父は母の部屋にいた。

父は難しい顔をして椅子に座っている。母は父と向かい合ひようつにしてベッドに腰掛け、そんな父を同情ともいえる表情で見続けていた。

「私は知子に嫌われるだろうな」

「でも仕方がないわ。加藤の苗字はいっぱいあるし、知子の名前だつていっぱいあるもの。人違いかもしれないのに、こんな所に連れてこられて、うちの知子がノーベル賞を取るなんて聞かされても信じられないもの」

平凡な家庭からノーベル賞を受賞する子供が生まれるなんて、誰が想像できようか。

母もまたその一人で、喜ぶどころか今の軟禁生活に憤りこきどおを覚えていふ。

きっと父も心の内に納得できない激しい何かを抱いているに違いなかつたが、今の父は静かに座つていた。

知子の両親の沈黙は続き、だがそれは長年連れ添つた夫婦にしかできない無言の会話で、それが終わつた時、父は無言で椅子から立ち上がつた。

「あなた、気をつけて」

母は父に手を伸ばす。父は母の手を握る。

「私にもしもの事があつたら、知子を頼むぞ」

「そんな事を言わないで」

父は母の手を放す。

「あなた」

父は母の声を聞きながら部屋を出て行った。

リビングでは知子が智と遊んでいる。トランプで神経衰弱をしているようだ。

父はチラリと田配りだけして、リビングをあとにした。

父の行き先はガルネオがいる所。父は通路を歩き、すれ違った召使いを呼び止めた。

召使いは、父の顔を見て目を見開く。父がリビングから離れた場所にいた事に驚きを隠せないようだ。

父は召使いに通じるよひゆつくつと言つた。

「ガルネオさんに、お会いしたい」

『ガルネオ様?』

日本語とイタリア語の隔たりがあつても、ガルネオだけは通じるようだ。

「そう、ガルネオ」

召使いは頷く。そして手招きをすると歩き出した。

父も召使いについて歩き出した。

壁に飾られた絵画。所々にある彫刻。全てガルネオが所有する美術品。不当な手続きでガルネオが手に入れるとは、父は知らない。通路に敷き詰められている絨毯じゅうたん。その上を行き交う召使いの人数の多いさ。ガルネオの裕福振りがうかがわれる。

父を案内している召使いは、十字路をいくつか曲がりエントランスに出ると、あのガルネオが朝食を食べていたリビングの扉を開けた。

中ではガルネオが人工芝を広げて、ゴルフのパターの練習をしている。

服はアロハシャツにサーファーズボン。口には葉巻をくわえている。

召使いはガルネオの傍に立つて恭しく頭を下げた。

『ガルネオ様に、お会いしたいそうです』

『ん?』

ガルネオは召使いを見て、次に父を見た。

『なんだ?』

ガルネオは外国人体型。傍で見ると思つた以上に大きく感じる。

父はたじろぐ。しかし、家族を守るために言わなければならぬ事がある。

「あんたに話があつて來た」

『分からん。何を言つてるんだ、こいつ?』

ガルネオが周りを見ながら言つと、トロツキオがどこからともなく現れてガルネオの横に並ぶ。トロツキオも柄の違つアロハシャツを着ている。その下は綿のズボンのようだ。

『ガルネオ様、通訳を呼びましょうか?』

『ああ、頼む。だがあいつは呼ぶな。訳ありかもしだねえからな』

『分かりました』

トロツキオは返事をすると傍にいた子分に指示を出した。

ガルネオが言つたあいつとは圭介の事。ガルネオはいくつも危ない橋を渡つてきたマフィアのドン。今回の話し相手は知子の父なのだが、何かあると勘が働いて、自分の子分の日本語が分かる者を呼びに行かせたのだった。

通訳はすぐに来た。アジア系の顔立ちをしている。日本人の血が混じっているのだろうか。

通訳はガルネオから指示を受けると口を開いた。

「何か話があるんですね？」

「そうです。タイムマシンについてです」

「ガルネオ様はゆっくり話がしたいので、あちらの椅子に座れとの事です」
通訳はガルネオと話す。ガルネオの表情が変わる。

「分かりました」

父はガルネオが朝食を食べていたテーブルの椅子に座る事になった。

父の前に水が入ったグラスが置かれる。

ガルネオも座ると、ガルネオは早速水を口に含んだ。

『運動をすると口が渴く。で、あんたはタイムマシンの何を話したんだ？』

父は緊張しながら通訳を挟んで話し始めた。

「知子は将来タイムマシンを発明します。しかし、知子が大人にな

るまで待たなければならぬ。私たちもそれまでここで暮らさないといけない。それよりも、もつと手っ取り早い方法を思いついたんです」

『ほう。それはなんだ?』

ガルネオが笑顔になつたので、父も緊張しながら笑顔を作る。

「私たちと一緒にいる男、年上の方はタイムマシンのエンジニアです。あの人にはタイムマシンを作らせたらどうでしょうか。あなた方は早くにタイムマシンが手に入るし、私たち家族も日本に帰れると思つんです」

『確かにそうだ』

ガルネオは通訳にそれだけ伝えるように指示をする。それからガルネオは、父がイタリア語が分からぬ事をいいことにトロツキオに笑いながら話す。

『聞いたか、トロツキオ。あの混血、タイムマシンのエンジニアだと』

『はい、聞きました』

トロツキオも笑いながら返事をする。

『この男は、自分の仲間を俺たちに売る代わりに、家に帰りたいんだと』

『それもこの耳で聞きました』

ガルネオはトロッキオと笑うだけ笑つてから父を見た。

『お前ら家族が日本の家に帰る。これだけでいいんだな?』

「そうです。私たち家族を日本の我が家に帰して下さい」

『分かつた』

ガルネオは席を立つた。

『早速、奴の所へ行くぞ。お前も、お前もついて来い』

ガルネオは人差し指を動かして、トロッキオと父について来るよう指示を出すと、歩き出した。奴と呼んだ圭介の所へ。

36：パパが決めた事

父は来た道を戻つていい。ガルネオの歩くスピードは60を超えている歳の割に早く感じる。

ガルネオは客間のリビングに来るとテーブルでトランプをしていた智に声を掛けた。

『あいつはどうだ？』

知子は急に現れたガルネオを見てビックリする。

あいつと書われただけで智の頭の中に圭介の顔が浮上する。

『呼ぶから待つて』

智は知子にも言った。

「危ないから部屋に入つておいで」

「うん」

知子は椅子から降りて部屋へ行く。部屋の中に入りドアを閉めると、知子はドアに耳をつけて外の話し声に耳をそばだてる。

智は部屋にいた圭介を呼び出した。

『外へ。ガルネオが待つてる』

圭介は部屋から出てきた。歩いてガルネオの前で立ち止まる。圭介の背は、ガルネオと同じくらいで、一緒にいても見劣りはしない。圭介はトロツキオの隣に知子の父が並んで立っているのを気にして、父をチラリと見てからガルネオを見た。

ガルネオは、圭介の前で葉巻を吹かしながら言つ。

『お前、タイムマシンのエンジニアだつてな?』

圭介の顔色が変わり、トロツキオの隣にいる父を見る。

「パパさん、話したのか。どうして?」

「仕方ないでしょ。私たち家族は、あなた方のせいで拉致されたんだから。あなたがここに残つてタイムマシンを作れば、私たちは日本へ帰れる」

智が声を大きくして言つ。

「僕たちは、みんなを助けに来たんですよ」

「助かつてないじゃないですか。それに知子がタイムマシンを発明するのはもつと先の話です。それまで私たちは関係ないはずだ」

圭介は言つ。

「パパさん、それは違う。確かに今の知子さんは、タイムマシンと関係がないように思えるかもしれない。でもそれは、知子さんがタイムマシンを発明するまでの道のりを歩んでいるからであつて、決してタイムマシンとの関係が切れている訳じゃないのです。タイム

マシンに乗り過去と未来を行き来すれば分かる事ですが、知子さん以外にタイムマシンを発明できる人はいません。いわば知子さんは、タイムマシンの起源ともいえる存在なのです

今の圭介は、品の良い極上の紳士とは思えないほど強い口調で父に訴える。

「物が生まれるには、その前の段階でいろいろなプロセスが必要になります。時は遙か昔からその様々なプロセスを紡ぎ未来へ運んできました。宇宙の誕生。地球の誕生。人類の誕生。そしてやっとタイムマシンが誕生する段階になったのです。知子さんは、これからいろいろな事を経験して大人になったある日、タイムマシンを発明する事になります。パパさんも知子さんが大人になるためにいろいろな影響を及ぼす大切な存在なのです。知子さんにとって父親という身近な存在であるパパさんが間違った行動をとれば、直接知子さんの運命に関わってきます。タイムマシンを発明する知子さんに関わってくるという事は、全人類の運命に関わってくるといつても間違いではありません。それほど過去と未来は影響し合っているのです。パパさん、タイムマシンを発明する知子さんの父親だという事をもつと自覚して下さい」

ガルネオとトロッキオは、圭介と父の言い合ひを面白しそうに見ている。

ドアに耳をつけて会話を聞いていた知子は、いても立つてもいられずドアを開けて部屋から飛び出した。

父がトロッキオの横に立っている。

「パパ、なんで一緒にいるの？」

話している内容はよく分からないが、父がガルネオの味方をしている事だけは、知子にも分かる。

智が駆けつけて知子の肩を掴んで知子を制止する。

「出て来たら危ない。部屋へ戻るんだ」

「だつて、パパが」

母も部屋から出てきて知子に言ひ。

「知ちゃん、これはパパが決めた事なの」

「ママ、イヤだ」

父は知子に歩み寄る。

「パパたちは、関係のない事に巻き込まれたんだ。だからあの人に事情を説明して、私たちは日本に帰るんだよ」

「でも、圭介さんがここに残るんでしょう？ そんなのイヤ。どうして圭介さんだけがここに残らないといけないの？」

私はみんなと一緒に帰りたい。みんなと一緒にお家に帰りたいの

父はしゃがんで知子と真正面に向き合つて言ひ。

「知子。パパの言つ事を聞くんだ」

「イヤ。パパ、お願いだから、みんなと一緒に帰れるよう頼んで

「それはダメなんだ」

「パパ、お願ひ」

「ごめんな、知子」

知子は父の胸で泣き出した。

ガルネオは冷めた目で知子を見ている。

トロツキオはガルネオに声を掛けた。

『なんだか飽きてきました。そろそろ戻りましょう。ガルネオ様』

『そうだな。トロツキオ、そいつを連れて来い。忘れるなよ』

『はい』

トロツキオは返事をすると圭介の腕を掴んだ。

『来い。一緒に来るんだ』

『待て。僕も一緒に行く』

智は知子の肩から手を放した。

知子は歩き出した智を見上げる。智がどこへ行こうとしているのか、10歳の知子でも察しがつく。

「行っちゃダメ！」

智は引き締まつた表情でトロツキオの所へ歩いて行く。知子を一度も見ず。

トロツキオは智に言い捨てる。

『ガキのお前なんざ、お呼びじゃねえ』

『僕は未来の大学で機械工学の学位を修めている。エンジニアの助手として使えるはず』

トロツキオに決定権は無く困惑した表情で答えを求めてガルネオを見る。

ガルネオは興味ありげに智を見た。

『タイムマシンが作れるなら必要だ。そのガキも連れて行け』

言つてガルネオは歩き出した。

トロツキオは嫌味を込めて智に言つた。

『ついて来い。だとよ』

圭介と一緒に歩き出す智。

知子は泣きながら父の肩から顔を出す。

「智さん！」

それでも智は振り返らずに歩いて行く。

父は知子の口を手で塞ぐ。

「知子、静かに。騒いで彼らの機嫌を損ねたら今度こそ殺される」

声が出せず言いたい事が言えない知子は、泣きながら父の肩を拳で叩く。

「知子、すまない」

父は知子が走り出さないよう抱きとめながら、ずっと謝り続けた。

圭介はガルネオのあとを追いついて歩いていた。圭介の左腕にはトロツキオの手が張り付き、指が肉に食い込んでいて痛い。

圭介の右側を歩いている智の表情は、知子とトランプで遊んだいた時の笑顔が消えていた。

圭介は横目でトロツキオの身体を見て、銃を所持していないか確かめる。

トロツキオは、知子の扱いを見る限り、相手が子供であっても容赦しない非情さを持つている。

下手に口答えをすれば銃で撃たれるのは必定だが、今のトロツキオは素肌に直接アロハシャツを着ていて、胸にも腰にも銃を身につけていなかつたので、圭介は少しだけ安心した。

『手を放してくれないか?』

今のトロツキオは銃を向けないだろう、といつ安心感が圭介の進言を進める。

言われたトロツキオは、ギロリと大きく開いた二重の瞳を圭介に向けた。

『バカな事を考えるなよ』

『ああ』

圭介の頷きに、トロッキオは手を放した。

トロッキオが手を放しても、握られていた圭介の左腕はまだ痛みを訴え、トロッキオの指の感触が残つていて気持ち悪い。

ガルネオは機嫌良く圭介の前を歩いて鼻歌を歌つてゐる。何がそんなに嬉しいのだろうか。

ガルネオが進んでいく通路は絵画や彫刻が無い通路ばかり。そのうちドアも無くなり、更に進んだガルネオは一番突き当たりにある大きな両開きのドアの前で立ち止まつた。

ガルネオはズボンのポケットから鍵を出して鍵穴に差し込む。ガチャリと大袈裟かと思えるほど大きな音を立てて解錠すると扉を開けた。中は暗くて何も見えない。

その中にガルネオが入つて行く。圭介もトロッキオに押されて中に入った。中はひんやりとして肌寒い。

ガルネオは壁を触つてルームライトのスイッチを入れる。スイッチはいくつもあるらしく、何回か音がする。その音ごとに部屋の各部分に光りが当たり部屋の様相が圭介と智の目に入つてきた。

中は窓が一つも無く、壁もコンクリートが剥き出しへなつてゐる。床もコンクリート。家具も棚も無い。エアコンの設備も無い。この部屋が肌寒いのはそのためだ。

部屋は広く、その中心に窓付きのユニットハウスが置かれている。屋根は無く一邊が同じ長さで大きなサイロ口のようだ。なぜ部屋の

中にまたユニットハウスが置いてあるのだろうか。

「あれは……」

圭介の口から日本語が漏れる。

ガルネオは歩いて行き、中にあるユニットハウスの外壁に手をついた。

『こいつは急に庭に現れた。青白く光る龍巻と共に』

圭介も歩いて行き壁に触れる。壁に触れた瞬間、圭介の手つきが変わる。

「間違いない」

圭介は触れただけでそれが何か分かるようだ。

智も壁に触れる。

「どうしてここ……」

智もそれがなんなのか知つていいようだ。

ガルネオはしゃがんで下に手を入れて、ユニットハウスを片手で持ち上げる。

『しかもこいつは軽い』

ユニットハウスはゆっくりと傾く。そしてすぐに手を引いて立ち

上がると、ユニットハウスはコトンと音を立てて元に戻った。ガルネオはユニットハウスの外壁にもたれ、手を叩いて手についたほこりを払う。

『こいつがタイムマシンだというのは分かつてているんだ。だが、こいつの動かし方が分からん。こいつをすぐに整備して使えるようにしろ』

『それは無理だ』

言ながら圭介は窓の中を覗いている。

ガルネオはいきなり圭介を突き飛ばした。

圭介は体を揺らして倒れないように数歩さがる。智も圭介の後ろに回つて、圭介の体を支える。ガルネオは早足で近づいて圭介の胸に人差し指を立てた。

『てめえ。ビックリつもつだ。あの家族が死んでもいいのか?』

『違う。話を最後まで聞いてくれ。これは旧型のタイムマシンだ。正確にいえば、旧型のタイムマシンの一部といったところだ。これだけでは時空移動はできん』

智も叫ぶ。

『これにはエンジンがついてないんだ。それに伴う操縦桿そうじょうこうも操縦席もない。よく見て。あるのは天井と壁と床と窓と、実験内容を測定する器具だけ。ビックリエンジンがついてない。だから、軽くて持ち上がる』

ガルネオは窓に額をつけて中を覗く。

『そんなはずはねえ』

トロツキオも別の窓から中を覗く。

『嘘だろー?』

智の言つとおり、中は殺風景でエンジンらしきものも操縦席もな
い。

圭介は歩いてまた外壁に手をつく。

『これは時空移動の実験の初期の頃に作られたものと同機種だ。あの頃の時空移動システムはかなり大型で、旅客機の格納庫くらいの広さが必要だつた。そこにこれを設置して、流動する時間エネルギーを一時的に増幅しマイナス方向に流す。つまり、この箱を時間エネルギーの流れにのせて過去へ移動させたんだ。君たちのいる時間にね』

圭介はガルネオに説明してから、両手で外壁に触れながら言葉を続ける。

『しかし、私が知っている実験BOXとは大きさが違う。私たちが行っていた実験で使われたBOXは、手の平にのるほど小さかつた。なぜこれはこんなに大きいんだ。試験体を乗せていたのか。しかし、バリアシステムも何もない状態では人体に影響が出るはず』

圭介の表情が険しくなる。

『もしや、それを承知の上で人体実験を行つていたのか。私たちと同じ時空移動技術を得るために……』

圭介はぶつぶつと言いながら考え込んでいたが、ガルネオが吼えほた時に我に返つた。

『おい、勝手に訳の分からぬ事を言つてんじゃねえ』

ガルネオは両腕を振り上げて圭介の襟首を掴む。えりくび

『いいか。こいつを使えるようにしろ。でないと、あの家族を一度と動けない体にするぞ』

智がガルネオの腕を掴んで言つ。

『そんなの無茶だ。エンジンが無いのに』

智は、ガルネオがこれ以上圭介に乱暴しないように防いでいるようだ。

『だったらエンジンを作れ。今すぐにだ』

ガルネオは邪魔な智に苛立ちながら手を放した。マフィアのドンとしては力ずくでも言う事を聞かせたい。しかし、タイムマシンのエンジニアに傷を負わせ、タイムマシンが作れなくなれば、ガルネオはかなり困る。頼みを聞いてくれと、囚われの身である圭介たちに頭を下げるのも腹立たしい。ガルネオは圭介の足元に唾を吐いた。

『必ずタイムマシンを使えるようにしろ。必要なものがあつたら言え。俺たちが揃えてやる。いいな!』

ガルネオは言い捨てると、圭介と智を残して立ち去つた。

トロッキオも、圭介と智の前に唾を吐き鼻で笑いながら部屋を出て行く。部屋に残された圭介と智を見下してバカにしているのだ。それを知らしめるためにドアを閉めて懲り^{わざ}とガチャリと大きな音を立てて鍵をかけた。

ガルネオとトロッキオの足音が遠ざかって行く。

足音が聞こえなくなつてから、圭介はエンジンの無いタイムマシンを見た。

「私たちがどんなに考へても、どのよつた策を講じても、未来の知子さんの言つとおりになつていいく。誰が作ったのかは知らないが、このタイムマシンの実験BOXも彼女が言つたとおり、今私たちの目の前にある」

「それでも、未来は変えていかないと。僕自身のためにも。僕はそのために辛い訓練に堪えS.P.になつて、2008年の過去に来たんだから」

智の瞳は、田の前のタイムマシンよつ、ずっと先にある何かを見てこるようだ。

「智……」

圭介はじつと智を見る。

「そんなに見ないでよ。恥ずかしいじゃないか」

智ははにかむ。

「お前は、時間警察日本支部のS.P.。私はタイムマシンのエンジニア。お互い立場は違うが、同じ思いなんだなと思ってな。そうだな。私も、未来の知子さんが言つた結末にしたくない。私も、そのため過去に来たんだから」

圭介は腕まくりをする。それから両頬を叩いて気合を入れた。

「 なら、書は急げだ。智、今から必要なものを書を出すぞ」

「 だったら、最初に必要なものは、紙とペンだよ」

智は両手を広げて見せて、リリには実験BOXのタイムマシン以外何も無いよと圭介に示す。

圭介は智の頭に手を置く。

「 お前は、有能な助手だよ」

頭を撫でると見せかけて髪をくしゃくしゃと搔きむしる。

智は笑いながら声をあげて嫌がつた。

知子はリビングの椅子に座っていた。

目の前のテーブルの上にトランプがあり、智と遊んだ神経衰弱がやりかけのまま置いてある。次の順番は智なのだが、その智はもういない。智は自らの意思でガルネオについて行ってしまったからだ。

その原因は父の裏切り。父が家族を日本に帰すために辛い選択をした事は、あのあと母から説明を聞いて知っている。

だから智は父の裏切りに腹を立てて、知子の身辺警護を放棄して圭介について行つたのだろう。知子を一度も見ずに、再会の言葉もなく。

知子は、圭介をガルネオに売つた父が許せなくて、父と母と一緒にいるのがイヤで一人リビングの椅子に座つて、智が裏返すはずだつたトランプをずっと眺めていた。

父を叩いて散々なほど流した涙も、今はもう出でこない。

王子智とキング圭介が連れて行かれて悲しいが、日本に帰れると知らされて、心の底では安堵し喜んでいたりもある。

父に対しては、自分を守つてくれたという感謝の思いがあるものの、ほかの方法が思いつかなかつたのか、という圭介をガルネオに売つた事への怒りや憎しみもある。

これらの感情は形も質量も無いのに、心の中にあるだけでとても重

く感じてしまつ。今までに、こんな複数の感情を、しかも正と負と、いつ両極端に近い感情を同時に抱く事があつただろうか。

10歳の知子にとって、それは初めての経験で、この感情をどう処理していいのか分からず、だからといって両極端な感情を心の中にずっと置いておくのも辛くて、知子の生きる気力の足かせになつていた。

リビングに人が現れて知子の隣に立つ。

見なくても智や圭介じやない事は分かる。隣に立つた人が何を望んでいるのかも想像がつく。いつかタイムマシンを発明する自分をどこかへ連れて行こうとしているのか、部屋へ戻れと言おうとしているかのどちらかだ。いつの間にか今後の展開を予想する癖も身についてしまつていて。

知子はトランプに手を伸ばした。裏返しになつていてトランプを箱に戻していく。

トランプを箱に入れている途中で肩を叩かれる。知子はゆっくりと首を動かして振り返り肩を叩いた相手を見た。

肩を叩いたのはトロツキオ。トロツキオはにやつきながら知子を見下ろしている。

知子は驚きもせずトランプを全部箱の中に入れると椅子から降りた。表情のない知子の顔。

もうトロツキオが近くにいても怖くない。むしろ智がいる所へ連れて行つて欲しいとさえ思えてくる。

トロッキオの子分もいて、部屋にいる両親を外へ連れ出している。

両親は背中を押されながら知子の横に立つた。

子分の一人が両親に言つ。

「一緒に来て下さい」

がいじくじなま
外国语訛りはあるが日本語だ。見た目も日本人と変わらない。通訳者のようだ。

母は聞く。

「あなた、日本人なの？」

「いいえ。イタリア人です。混血ですが、どこの国なのかは知りません」

父は言つ。

「さつき通訳してくれた人だね。君には日本人の血が流れていると思うよ」

通訳者は笑う。

「日本語は学校で覚えた言葉です。それだけで日本人と決め付けるとは。噂どおり日本人は平和ボケしているんですね」

通訳者はトロッキオに会話内容を報告する。

トロッキオも笑い出し、手を振つて知子たち家族を相手にするなと通訳者に指示を出した。

通訳者は返事をしたあと全くしゃべらなくなり、知子たちは指示に従つて歩き出した。

歩く知子の辺に高価そうな絵画や彫刻が順番に映つていいく。

十字路をいくつか曲がつていると父が急に躊躇を出した。

「おかしい。変だ」

母が聞く。

「なんで？」

「今朝、あつちの道へ行つたら広い玄関があつて、そのあとに庭が見える、私たちが最初に来たあの部屋へ行つたんだ。でも逆の方向に曲がつた。私たちは玄関に向つていない」

「え！ 本当？」

「間違いない」

両親は顔色を変えて言つたがトロッキオに逆らえる訳もなく歩きながらしゃべつてくる。

玄関に向つていなければどこへ行く？ 知子こは、もうどうでもいい事だった。

歩いていると通路の途中に螺旋階段があり、階段は下へ続いている。^{じるせんかいだん}

トロッキオはその階段を下りて行く。当然、知子たち家族も下りて行く。

階段を下りるとまた通路がある。ただし、絵画も彫刻も絨毯もない。通路の先は暗くてよく見えない。それが無性に通路を狭く長く感じさせる。

通路は一本で十字路もない。ドアが等間隔で並んでいるだけ。

トロッキオは一つ田かのドアの前で足を止めてそのドアを開けた。

通訳者は、父と母に言つ。

「中でお待ち下さい。との事です」

父と母は言われたとおり部屋の中に入る。

知子は黙つてトロッキオを見上げていた。無表情で。

トロッキオがそれに気づく。

『なんだ?』

通訳者が知子に聞く。

「どうしましたか?」

通訳の言葉は知子の耳に届いていたのだが、知子はトロッキオの顔を見ながら言った。

「ここに閉じ込める気なの?」

通訳者が知子の言葉をトロッキオに伝える。

トロッキオは鼻で笑う。知子の頭髪に臭い鼻息がかかる。

『やつだ。やつさと入れ。ガキ』

トロッキオは力いっぱい知子の背中を押した。

知子は前屈みなり転びそうになりながら部屋の中に入る。何とかバランスを取つて上体を起しすと振り返つてトロッキオを睨んだ。

トロッキオは怯える両親を面白がつて眺めている。

通訳者は両親に向つて。

「これからは、ここで生活をして下さい。食事も朝晩ここに運びます。トイレとバスは、この部屋の中になりますので好きに使って下さい。」

父が叫ぶ。

「そんなバカな。あなた方は言つたはずだ。日本に帰してくれると」

「確かに言いました。だけど、生かして日本に戻せば拉致の事実が露見して、私たちは国際的に指名手配される。だから、あなたたちが日本に帰るのは死体になつてからです。」

「約束が違う!」

「違つていません。死体だらうがなんだらうが、日本に帰れるのは確かなのですから」

「そんな……」

父は床に座り込んだ。

「あなた」

母は崩れるよつこにしてしゃがみ父に寄り添つ。

トロッキオはこやつきながら体の向きを変えて子分と会話をしながら歩いて行く。きっと両親の不様な姿を笑い話にしているのだろう。楽しそうに歩くトロッキオの背中が遠ざかって行く。

部屋に残つていた通訳者は最後にこいつ言つた。

「あなたたちを殺さないのは、人質になつてもうつためです。あのタイムマシンのHンジニアが、私たちに逆らわないよつことです」

通訳者が部屋を出るビデオは閉められた。そのあとすぐ元鍵をかける音がする。

知子は無表情で閉められたドアを見ていた。

後ろからする泣き声に気づいて知子が振り向けば、両親は床に座り込んで泣いている。

悲しむ両親を見ても知子の無表情は変わらず、知子は歩いて両親を通り過ぎて、一番手前にあつたベッドに腰掛けた。トランプをポケットから出す。中味を出して自分でシャッフルして布団の上に裏返して並べる。そして一人で神経衰弱を始めた。まるで何事も無かつたかのように無表情で。

両親が立ち上がり肩を寄せ合つて歩いてベッドへ移動しても、知子は神経衰弱を続けていた。

父はベッドに腰掛けて両腿に肘を載せて頭を抱えている。

知子の耳に父の言葉が届く。

「死体じゃないと日本に帰れないなんて……」

父の隣に座り慰める母の声も知子の耳に入る。

「パパ、殺されないだけマシじゃない」

「だが、私はあの人たちを彼らに売つたんだぞ」

「でもそれはジョゼフさんだけで、智さんは勝手について行つたんだし。それに私たちが日本に帰るためにには仕方なかつたじゃないですか」

「だとしても、私が人の道に外れた行いをした事に変わりはない」

「それは私も同罪だわ。パパだけが悪いんじゃないわ」

知子は同じ数字が揃つたカードを拾つてもう片方の手に集める。全部の数字のペアを作り終えると、またシャツフルして布団の上にトランプを裏返しにして置いていく。

その知子の瞳に涙が浮かぶ。もう出でこないと思った涙。知子は涙で前が見えなくなつても、ずっと一人で神経衰弱をやり続けた。智との楽しかつた神経衰弱を思い出しながら。

日本に帰れない。友達にも会えない。圭介も智もいない。そばにいる両親も信じられない。もう知子には智と遊んだトランプしか残

つ
てい
なか
つ
た。

次の日。

5月5日の朝。日本では子供の日。

ガルネオ島は今日も晴れていた。

カモメが水平飛行で白い翼を優美に動かして飛んでいた。

ガルネオは庭が見えるいつものリビングで朝食を摂っていた。

本日はトロッキオも同席していて機嫌よく会話をしている。

ガルネオは田の前のコンフレークを景気よく口に放り込んだ。

「タイムマシンの完成が待ち遠しいな」

トロッキオはハムと野菜のサンドイッチを食べている。

「完成が早くなつた切つ掛けが、父親の裏切りとは、腹が揃れるほど笑いましたよ」

「全くだ。よそのファミリーのトラブルほど面白いものはない」

「地下室放り込んだ時の娘の顔を、ガルネオ様に見せてやりたかった。恨みがこもつた娘の黒い眼。あの娘、きっと親殺しの大物になりやすぜ」

「そいつは楽しみだ」

ガルネオは声をあげて笑つてから、グラスに入った赤ワインを飲み干した。

ガルネオとトロツキオは、今後の話をしながら朝食を続けている。その最中に、庭に突風が吹いた。突風は椰子の葉を運び、葉はガルネオ自慢の青い芝生に降りる。

会話をしていたガルネオは、落ちてまた浮上した椰子の葉の動きを見て、食事の手を止めた。

「なんだ？ あれは？」

トロツキオも庭を見る。

「椰子の葉が庭まで飛んでくるなんて珍しいですね」

ガルネオは気づく。また庭で何かが起る事を。ガルネオは席を立つた。

「また来るぞ」

トロツキオはガルネオに釣られて立ち上がる。

「何ですか？」

ガルネオは神の御前に来た信者のように、絶対的な存在を求める。それを得るために静かな表情で庭を見ている。

トロッキオが何が来るのかと思い庭の隅々を見渡して探していると、芝生の上に青く光る竜巻が現れた。

現れたばかりの竜巻はとても小さく、宙に浮かんでいて腰を振つて回転運動をしていたが、次第に太く大きくなり、芝生にくつついで更に伸び上がり、天にも届く勢いで一気に成長を遂げた瞬間、竜巻はあつという間に消え去った。

まるで夢を見ていたかのような超常現象。その竜巻はガルネオ自慢の青い芝生の上にあの箱を残す。日本の茶室のような大きな箱のタイムマシンを。

ガルネオは走つて庭に飛び降りる。トロッキオも走る。ガルネオは一番にタイムマシンにたどり着いてドアを開けた。もうトロッキオは危険だからと黙つてガルネオの行動を止めたりはしない。

だが、ガルネオはドアを開けてすぐに後退りをする。ガルネオの顔は驚きで眼と口が開いている。

不審に思ったトロッキオはガルネオの横に並んだ。

「ガルネオ様、どうしたんですか？」

そのトロッキオも驚いて後退りをする。

タイムマシンの中には人がいた。トロッキオと同じくらいの30前後の男が。顔の作りもなんだかトロッキオに似ている。

男はタイムマシンから出るとトロッキオに抱きついた。

「トロッキオ爺ちゃん！」

トロッキオは万歳をしたまま硬直する。抱きついてくる男の顔は確かに覚えがある。だが誰なのが分からぬ。

「トロッキオ爺ちゃんだと！？」

驚いて男の言葉を繰り返したガルネオは頭を回転させてトロッキオより早く答えを出す。

「もしかしてお前、未来から来たトロッキオの孫か？」

男は喜びながらガルネオの手を取つて握手をする。

「さすがドン・ガルネオ。そうだよ。俺はトロッキオの6番田の娘の腹から生まれたトロッキオの孫。カプリッオぞ！」

カプリッオは腕を広げて成長した自分自身をガルネオとトロッキオに見せた。

普段のガルネオなら、呼び捨てにされた時点で怒り狂い、場合によつては呼び捨てた相手を撃ち殺している。だが、驚きの連続とタイムマシンの再来で、怒^{おこ}るのを忘れてしまつていて。

トロッキオはその隣で頭を抱えてよろめく。

「6番田の娘は、去年生まれたばかりで、まだ言葉もしゃべれないのに、俺の孫を生んで、その孫は成長して俺の田の前にいて……。俺の娘に手を出した奴は誰なんだ？」

トロッキオの脳は突然の事態を把握するのに時間がかかっていた。

ガルネオはカプリッオの手を握りながら言つ。

「で、カプリッオ。未来はどうなつているんだ？ 僕の島はまだ無事か？」

カプリッオは思い出したぞとばかりに話し始める。

「そうだよ、それ。俺は、それを教えるために来たんだ。未来は大変な事になつていてるんだ。ガルネオファミリーはとつぐの昔になくなつちまつた。ガルネオの島もねえ。代わりにでかい建物がおつ建つてしまつてよ。警備が厳重で入れやしねえ。ガルネオは獄死。未来のトロッキオ爺ちゃんは刑務所の中で死にかけだ」

ガルネオは声を張り上げて怒りを露わにする。

「未来は全然変わつてねえじやねえか

「そりなんだよ」

カプリッオはタイムマシンの中から木箱を引き摺つて出す。木箱は持ち上げれないくらい重いようだ。

「未来から武器を持ってきた。これで国際指名手配されても安心だ

カプリッオが木箱を開ける。中にはレーザー銃がいくつも入っている。

「トロッキオ爺ちゃん。これを持って」

カプリッオは、トロッキオにレーザー銃を渡す。

「これも。これも」

カプリッオは、トロッキオのズボンのベルトの前や後ろにレーザー銃を差し込んでいく。

トロッキオは、カプリッオのされるがままになっていたが、やつと思考が追いついて、武装準備をしているカプリッオに聞いた。

「急にどうしたんだ？ なんでレーザー銃がいくつも必要なんだ？」

「もうすぐここに警察が来る」

「何！」

「マジか！」

血相を変えているカプリッオの言葉に、ガルネオとトロッキオは同時に驚く。

カプリッオは木箱を引き摺つてリビングへ移動しながら言つ。

「未来からFBIも、CIAも、インター・ポールも、軍も、みんなこの島に来る」

リビングに来たカプリッオは木箱をひっくり返して未来の武器を床にぶちまける。

量産された金色のレーザー銃ブローニング・ベビーは、床の上を滑り放射線状に広がる。

「全員できるだけ武装して、奴らに備えるんだ」

ガルネオの子分は次々にレーザー銃を拾つて身につけていく。

ガルネオは棒立ちで叫んでいる。

「なんでこんなことになつちまつたんだ？ もうすぐタイムマシンが完成するつて時によ」

武装準備をしていたカプリツオが急にガルネオに向き直る。

「あんたがいけないんじゃないか！」

「なんだと！」

田ん玉をひん剥むいていかいて怒るガルネオ。

トロツキオは喧嘩が始まりそつなガルネオとカプリツオの間に入つて仲裁をする。

「カプリツオ。お前、ガルネオ様になつて事を言うんだ。ガルネオ様、こいつをお許し下さい。あとできつく叱しかつておきやすんで」

ガルネオはトロツキオを突き飛ばす。

「つるせえ」

そしてカプリツオも突き飛ばす。

「貴様、どういうつもりだ？ ああ？ トロツキオの孫だと思つて話を聞いてやりやあ、いい気になりやがつて。お前が生きているのも、俺が孤児だつたトロツキオを拾つてやつたからなんだぞ。その

孫のお前は、この俺にたてつく気なのか？」

カプリッオは突き飛ばされても、すぐに戻つてガルネオの前に立つ。

「あんたがノーベルの娘をいつまでも生かしておくからこいつなったんだ。博士がレーザー銃と手紙を送つたのに、台無しにしやがつて。俺がタイムマシンで過去に移動して、開発されたばかりの10丁のレーザー銃を盗むのに、軍とドンパチやつて何人の俺の子分が死んだと思う？　てめえ、分かつてるとか？」

「てめえだと！　うるせえ、小僧。俺は世界五大魔王の一人だと呼ばれているんだ。このイタリアマフィアのドン・ガルネオを、てめえ呼ばわりするとは、生かしちゃ おけねえ」

ガルネオは腹からレーザー銃を抜く。

カプリッオは持つっていたレーザー銃でドン・ガルネオの胸を打ち抜いた。

「未来じゃあ、俺がドンなんだよ」

赤い光線はガルネオの胸を貫通し、その後ろの壁にも穴を開ける。

「お前が未来のドンだと……」

ガルネオはカプリッオを見据え銃を構えたまま後ろへ倒れた。

眼を見開いて仰向あおむけに倒れたガルネオを見て、トロツキオが悲鳴混じりの声を上げて言う。

「カプリツオ、なんて事を！！ ああ、ガルネオ様」

カプリツオは、トロツキオの前に手を伸ばして、今にもガルネオに覆いかぶさりそうなトロツキオの行動を止める。

「爺ちゃん。もう」いつに恩を感じる必要はねえ。このガルネオは、爺ちゃんの親父とお袋を殺して財産を奪つた奴なんだ」

「なんだってー。」

「俺はタイムマシンで過去を見てきた。爺ちゃんの親父はイタリアマフィアのドンだったよ。ガルネオはその子分さ。裏切ったガルネオから爺ちゃんの親父を助けたかつたけどよ。時間警察の奴に邪魔されて、赤ん坊の爺ちゃんを助けて乳母に預けるのが精一杯だったよ」

トロツキオを育てくれた女は貧乏だつた。日々の重労働^{たた}が祟つて女はトロツキオが幼い時に死に、孤児になつたトロツキオの前に突然ガルネオが現れた。不思議な縁だとトロツキオは思つていたが、まさが両親を殺していたとは。

トロツキオは、恨みとも悲しみといえない複雑な感情を抱く。

「なんて事だ……。俺は何も知らずに今までドン・ガルネオに尽くしてきたのか」

「そうこうした、爺ちゃん」

カプリツオは、ガルネオに散々利用されてきたトロツキオに同情

しながら、トロッキオの背中を軽く叩いた。そして、周囲にいる子分に叫ぶ。

「いいかお前ら。これからは、このドン・トロッキオ様がこの島を支配する。この未来のレーザー銃で」

カプリッオはレーザー銃を掲げる。

「お前らもレーザー銃を手に取れ。未来の武器があれば怖いもの無しだ。この銃で日本人のやつらを殺せ。今すぐにだ」

子分は床にあるレーザー銃を拾つて次々に走り出す。

カプリッオはそれを見て安心した表情になる。

「爺ちゃん、これで未来が変わる。俺たちの歴史が始まるんだ。もうこんな小さな島に隠れて暮らす必要もねえ。ローマの真ん中に俺たちの豪邸をおつ建てよ!」

「カプリッオ、よく来ててくれた」

「爺ちゃん」

トロッキオとカプリッオは抱き合つて。もつすべ到来する前途明るい未来を喜び合つた。

5月5日の毎。

知子たちは地下室で昼食を摂っていた。もつリゾットもパスタもピザも無い。人質の知子たちに『えられた昼食はパンとシチューだけ。

部屋にミニテーブルはあるが、椅子がないために三人ともそれぞれのベッドに座つて食べている。

知子の父は落胆し後悔に苛まれて食事が進んでいない。母も食事のペースが遅い。知子一人だけが黙々と食べていた。

地下室に閉じ込められている知子は、食べるか寝るか、トランプで遊ぶくらいしかやることがない。

そして、父と母は口を開けば泣き言ばかり言い、同じ部屋にいる知子の耳にはうだつの上がらない両親の言葉が否応にも入ってきて、知子の心は重くなるばかりだった。

トランプをしない食事中は智と一緒にいた時の事を思い出す。智とは初めて出会つてから毎日欠かさずにつながっていた。智が自分を身辺警護しなければならないSPという必然からなのだが、今思えばあの頃の知子にとつては十分過ぎるほど幸せな時間だった。

それが「ノーベル」という言葉で智の王子としての笑顔は消えてしまう。算数のノートを智に見せた時もそうだ。あの時の智は知子を見る事もなく帰ろうとした。知子はあの智の表情を今も覚えてい

る。そのあとに智を追いかけたのは、智の笑顔が欲しかったからだ。そして智は知子の望みどおりの笑顔を見てくれた。

だつたら、また智を追いかければいい。また智を追いかけて手を握れば、智はきっと王子の笑顔で答えてくれるはず。智王子は、姫である自分を守るヒーラーなのだから。

そのために知子は考える。どうやつてこの地下室から脱出しようかと。

「とりあえず」飯を食べてしまおう。なんでもいいから少しでも栄養をとらなければ思考は働かない。学校の先生が常日頃から言つている事だ。

知子はパンを噛む。出されたパンは固く、パサついていて飲み込みにくい。シチューも残り物を温め直したようで、煮込み過ぎて気持ちの悪いドロドロ感がある。それでも知子は食べる。シチューを全部飲み干し、器についたシチューもパンで拭き取つて食べる。水も飲む。残つたパンもよく噛んで食べる。全部食べ終わり、知子はゲップをした。

食べるものは食べた。これで脳に栄養がいく。知子は考える。脳の隅々まで思考を巡らす。だが智の顔しか浮かんでこない。智の事がこんなにも好きだつたのかと改めて思う。

知子は智の事ばかり考えていては目的が達成できないと反省し、圭介を思い出すことにした。激しいときめきを覚える智とは違い、圭介を思い出すといつも安心感に包まれる。

圭介は花をくれたり菓子をくれたり、場合によつては知子の事を

かわいいとか綺麗だと言って嬉しい気分にしてくれる。正直なところ、リップサービスは智より圭介のほうが上手だ。

智も言葉に詰まるとなんだかんだいながら圭介を頼つたりしていた。圭介は智にとつてもキングだったんだなど知子は思つ。

そして父と話をしている時の圭介は、未来の自分を知つてゐるような口調だつた。過去と未来は常に影響し合つてゐると圭介は言つてゐたが……。

知子は過去の自分を思い出し、そこから未来の自分の姿を想像する。大人になつた自分はどういう人間になつてゐるんだろうと。

そして気づく。過去と未来が常に影響し合つてゐるという事は、未来の自分も10歳の時、この部屋にいたんだ。と。

知子は立ち上がり空になつた食器をテーブルに置いた。そのあとトイレに入る。トイレが終わり手を洗う。

トイレから出ても、父の食事は終わつていない。母もパンが食べにくいやうで残してゐる。知子は歩いて父の前に立つた。

「パパ、ちゃんと食べて」

「知子、すまない。パパがバカだつた」

父は昨日から謝るばかりで話にならない。

「ママも残さずに食べて」

「無理よ。いんなまづいもの」

知子たちのために毎日の食事を作っている母は残り物を出されると分かるようで、なかなか食べようとはしない。

父と母は両食を残すつもりでいるようだ。自ら犯した過ちで食事が喉を通りない両親。

知子は自分の両親がこんなにも頼り甲斐のない存在だったのかと思いつ、両親の肩幅を小さく感じてしまつ。

「二人ともダメ。全部食べて。いつも残したらダメって私に言つじやない」

母は力のない声で言つ。

「知ちゃんも残していいから」

母はもう、知子がどこへ行つても恥ずかしくないようにならせる気がないのだろうか。

知子は空になつてゐる自分の食器を指さす。

「私は全部食べた」

「偉いわね、知ちゃん」

母は知子の食器を見ずに言つた。

知子は母の体を揺する。

「もうママ、しつかりして」

父の体も揺する。

「パパもしつかりして」

知子は両親のベッドの間に立つた。

「私は大きくなつたらタイムマシンの設計をしないといけないんだから」

父は知子の発言にも頭を抱える。

「何を言つてるんだ。タイムマシンは、ジョゼフさんがガルネオと一緒に作つてゐる最中だろ」

「大人になつたら私がもう一台作るの」

母も呟つ。

「あとからタイムマシンを作るにしても、ここからじゃあ学校に行けないのよ。どうやって機械の知識を身につけるつもりなの？ いつまで生きていられるかも分からないのに」

「未来の私はタイムマシンを発明したんだしょ？ だつたら私はきっとここから逃げ出したのよ」

「知子、何を言つているんだ。ここは島だぞ。地下室から逃げたとして、どうやって島から出るんだ？」

「さうよ、知ちゃん。それにあの頑丈なドアも壊さないといけないのよ。そんな事をしたら絶対に見つかって殺されてしまうわ」

「でも圭介さんが言つてた。過去と未来は常に影響し合つていて、私はタイムマシンの起源ともいえる存在だつて。だつたら未来の私も10歳の時にこの地下室にいたのよ。そして、ここから脱出した。じゃないと未来から智さんたちが助けに来た意味がないもの」

父は横に食器を置いて知子の肩を掴む。

「知子、静かに。希望を持ちたいのは分かる。パパだつてそう思いたい。だがな、現実はそう甘くはないんだ」

「そうよ、知ちゃん。この話が外の人には聞こえたら、ママたち本当に殺されてしまつわ。お願ひだから一度と脱出の話はしないでちょうだい」

完全に諦めて生きる氣力が感じられない両親の姿。

10歳の知子の生命力は、まだ生きたいと反発する。

「もう、パパママ。なんで分からぬの！！」

知子は地団駄を踏んで言つ。親が言つ事を聞いてくれなければ、子供がとる行動は一つしかない。

古より伝わる子供の必殺技「駄々捏ね」^{だだい}

辞書には「駄々を捏ねる」で存在し、子供の多くが会得する必殺技として世界的に有名である。

ただし、必殺技「駄々捏ね」の使用期限は個人差があり、親が持つ必殺技により封印されてしまう事が多い。

知子は手足をバタつかせ飛んだり跳ねたりして、自分の言い分を父と母に言い続ける。

「私は逃げたいの。タイムマシンを作りたいの。大人になつて10歳の私を助けてたいの。パパもママも、圭介さんも智さんも、みんな助けたいんだつてば」

父は知子を抱きかかえ抑える。

「知子、いい加減にしなさい。そんなドラえもんのマンガのよつとはいかないの」

「イヤだ。パパ、放して」

母も父を手伝つて知子を抑える。これが我が家だったら、駄々を捏ねてもどうにもならない事を教えるために知子を放つておくのだが、殺されるかもしない今は放つておく訳にはいかない。

「知ちゃん。ちゃんと言う事を聞きなさい」

静かにしなさいと知子に言う父と母も、声が大きくなつてへくる。そうしてこりうつちに、ついに両親が恐れていた事態になる。

外で足音がしたのだ。

父は口を横一文字に結び、知子の口を手で塞ぐ。母も身構えてドアを見る。急に静かになる三人。だが、それが手遅れだという事を両親は気づいている。

「もしもの時は私が全て責任をとる。だから、お前は知子と共に生きてくれ。もし、知子の言うようにタイムマシンを作る事ができたら、その時は私を助けてくれ」

「あなた……」

父の腕の中には知子がいる。その腕を伸ばして母の手を握る。

「愛している。お前も知子も」

「あなた、私も……」

母も父の手を握り返す。

ドアから鍵を開ける音がする。

知子たち三人は息を飲む。もつ知子も騒がずじっとしてドアを見ている。

ドアが開く。外から黒い服を着た男が一人入つて来る。

1番に入つて来た男が言う。

「今、愛してるつて聞こえたが、お邪魔だつたかな？」

2番目に入つて来た男は中の様子を見て言つ。

「大丈夫みたいですよ」

入つて来た二人は、圭介と智だつた。

知子は走つて智に飛びついく。

「会いたかった。すつごい心配だつたんだよ」

知子は王子智の青い瞳を間近に見て、再会を心の底から喜ぶ。

智は知子を抱き上げて、知子の顔についている涙跡を見ながら言う。

「沢山泣かせてしまつたようだね」

「だつて、智さん何も言わずに行つちゃうんだもん」

「こめん。言いたかつたけど、マフィアにバレたら、こうして助けに来られなくなると思って」

「いい。圭介さんと智さんが来るの、分かつてたから。つていつても、ずっと考えてたから、分かつたのはさつきだけど」

圭介は、智にくつついでいる知子を見る。

「知子さんは、こんな時分から賢い人だつたんだね」

圭介は知子の頭を撫ぜた。

父は立ち上がりて歩く。

「ジヨゼフさん。私はどうあなたに謝ればいいか

母も父の横に並ぶ。

「未来から私たちを助けに来て下さったあなた方に、あんな事をしたのに。いつもしてまた来て下さって、なんとお礼を申し上げればよいか」

圭介の青い瞳の輝きは、別れた時と少しも変わっていない。

「私もあなたたちに言いたい事がありますが、それはあとにします。今は逃げるのが先決です。マフィアが隠し持っていたタイムマシンを壊していくつかの武器を作つてきました。未来の法律上、問題無く武器を扱えるのは時間警察の人間である智だけなんですが。とにかく逃げましょ！」

「分かりました」

父は返事をし、母はしつかりと頷いた。

両親と圭介は仲直りをしたようだ。知子は嬉しくなつて智の顔を見る。智も笑顔で返してくれる。

「知子さん、走れる？」

知子は智の腕から飛び降りた。

「うん。ちやんとトイレに入つて、体を軽くして、逃げる準備をしたんだよ」

「やつか。本当に賢いな、知子さんは」

智は知子の頭を撫ぜる。

「日本に帰つたらタイムマシンを作るからね」

圭介が知子を見下ろす。

「知子さん、あなたはどこまで気づいてるのですか?」

「圭介さんが言つた、過去と未来は常に影響し合つてゐるのだ
け。だから、未来の知子さんも一〇歳の時に、今の私と同じ日にあ
つたんじよ。ちやんと逃げて、日本に帰つたからタイムマシンを
作れただんじよ」

圭介は感心する。

「そうです、知子さん。あなたはタイムマシンを使わなくとも、未
来を知る事ができるのですね」

「違うよ。圭介さんが言つたんだよ」

「私は、ここから逃げる話はしていませんよ。知子さん」

クスリと笑つてから、圭介は外を確認する。

智は、圭介と顔を合つてから、一番に部屋から出て通路の様子を確認する。

「僕について来て下さい」

知子が智のあとに続ひつとすると、圭介が止める。

「知子さんは私のあとについて来て下さい」

知子は智王子と手を取り合つて、可憐な姫として走りたかつたが仕方なく諦めた。圭介のあとをついて行く。

「パパさんとママさんは、後ろを警戒しながらついて下さい」

「分かつた」

「はい」

知子たちは通路に出た。小走りで移動する。途中、ガルネオの子分が2人倒れている。圭介と智が倒したのだろう。

知子たちは倒れている一人を避けて通り、螺旋階段を上つた。あの絵画と彫刻が並ぶ通路に出る。

智は迷いもなく十字路を曲がつて進んでいく。別荘の構造が頭に入っているようだ。

いきなり前方にガルネオの子分が現れる。子分が懷に手を入れたのを見て、智は近くのドアを開けてその陰に隠れた。知子たちも

圭介の指示でドアが開いた部屋の中に避難する。

銃声と共にドアが低い音を立てて鳴る。弾丸がドアに当たつているのだ。

皮肉な事だが、ガルネオが大金をかけて豪華に作ったドアは、弾丸を止めて智たちを守ってくれているようだ。

子分は声をあげ腕を振つて、智たちがいる事を周りに知らせる。子分たちはぞくぞくと集まり、今度は金色のレーザー銃で撃つてきた。赤い光線は弾丸を止めていたドアをいとも簡単に貫通して、隠れている知子たちの目の前を通り過ぎていく。

智はマフィアの様子をつかがいながら後退りをして部屋の中に入ってきた。

知子は胸をハラハラさせて智の動きを見ている。こうこう時、姫は戦う王子を見守る事しかできない。

智は手を後ろに回す。

「手榴弾を2個」

圭介は懐から手榴弾を出して智に渡す。智の手に載つた手榴弾はソラマメくらいの大きさしかない。

知子たち家族は手榴弾の小ささに目を見張る。特に戦争映画が好きな父の驚きは大きい。

智は光線の間を見計らつてドアの陰から出て手榴弾を一つ投げた。

すぐに戻つて身を隠す。

投げた先で青い光りが発光し、部屋に避難している知子たちの目にも青い光りが届く。

投げて爆発するのではなく、青く光る手榴弾。なぜだらうか？

青い光りが収まつた頃、辺りは急に静かになつた。子分たちは撃つてこない。

智は顔を出して周りを確かめる。

「OK、行ける」

智は部屋を出て先に行く。知子たちも小走りでついて行く。

さつきまでガルネオの子分がいてレーザー銃を撃つていたのに、今は誰もいない。一体、青い光のあとに何が起きたのだろうか。

知子は考えながら圭介のあとをついて行く。

十字路を曲がつた直後、出会い頭に子分と遭遇する。子分は5人。

智は間を取ることなくいきなり5人と戦い始めた。智は床を蹴つて銃を向けた相手に飛びかかった。智の手足が伸びて銃を持った一人を倒す。そのあとに智に銃を向けた一人がほぼ同時に倒される。智の迅速な判断と予測行動により三人が床に倒れた。

残り一人も銃を向けて智を撃とうとするが、智は倒した相手のレーザー銃を拾つて瞬時に動き、相手が智に照準を合わせていいうちは

に一人を撃ち、残った一人が智の闘争心に恐怖し智に向けてレーザー銃を乱射するも、智は冷静に判断をしてレーザー光線を交わし最後の一人を撃ち倒した。

戦いに勝利し、床に倒れている5人に囲まれて、一人立っている智。王子とは思えない殺氣が今の智から滲み出ている。

智の無駄のない動き。野生動物のよつな敏捷性^{びんじょうこうせい}。激しく戦つたあとのに智の呼吸は乱れてはいない。それでも、智は大きく胸を動かして呼吸をする。ゆっくりと息を吐き、肺の中の空気が少なくなると同時に智の殺氣も消えていく。

智は呼吸を吐き切つてから、陰に隠れていた知子たちに声を掛けた。

「さあ、行きましょうか」

知子は圭介の後ろから顔を出して智を見る。

智も知子の視線に気づいて笑顔になる。知子の恐怖心を少しでも減らそうとしている智の思いが知子に伝わる。

智の青い瞳は、知子を見るといつも優しい眼差しになる。智は知子を警護するSP。立場的に最善の方法をとっているのかもしれないが、知子の胸の鼓動は、命の危険に晒され切羽詰つた今の状況にいても高鳴りを覚えた。

この時、王子智は、知子の心の中でヒーローになる。

とにかくヒーロー智は強かった。出会い頭の応戦は絶対に負けない。智は殴り返されても瞬時に受け流し必要最低限の動きで相手を

倒していく。

レーザー光線が飛んでも智はレーザー銃で応戦し、撃つてく
る子分の人数が多ければ圭介が渡す手榴弾で相手は消え失せる。

こうしてヒーロー智の活躍により、知子たちは無事に屋敷内を進
み、なんとか玄関にたどり着いた。

目の前の玄関扉を開ければ、中に噴水があるロータリーに出ら
れる。

「外の車に乗つて滑走路まで行きましょう。飛行機の操縦は私がし
ますので」

圭介は飛行機の操縦ができるようだ。

滑走路には拉致された時に乗つた小型飛行機がある。きっとその
小型飛行機に乗つて島を脱出するのだろう。

圭介は玄扉扉を開ける。

2日振りの外。吹き込んでくる爽やかな風。^{さわ}広がる青空。圭介た
ちは喜ぶ。無事に脱出できると。

知子も思つ。これで日本に戻つて大人になつたら自分はタイムマ
シンを作るんだと。知子の頭の中では全てが順調に進んでいた。

しかし玄関の扉を開き切り、外の風景が知子たちの目に飛び込ん
できた時、順調だつた知子たちの道のりは一変した。

圭介は外を見て眉を顰めていた。智も先を睨んでいる。両親は寄り添つて震えている。

知子は、噴水の前で肩を並べて立つて、2人に増えたトロッキオを見ていた。

2人のトロッキオの両側にはロータリーの道を遮るようにして大勢の子分が横一列に並び全員金色のレーザー銃を持って、銃口を知子たちに向いている。

その中にガルネオの姿はなかった。

片方のトロッキオが叫んだ。

「お嬢ちゃん、交渉といこうじゃないか」

がじゅうじゅうなま
外国語訛りのある日本語が知子たちの耳に届く。

知子がよく見ると、向つて左側の日本語を話した男は、ぱっと見た感じトロッキオに似ているが顔が少し違う。トロッキオではないのだ。

圭介は叫ぶ。

「IJの子はまだ10歳。交渉は無理だ」

直後に、圭介の足元に一筋のレーザー光線が落ちて圭介の爪先のアスファルトから煙があがる。

それは黙れという意味と、知子が交渉に応じなければ殺すぞ、と

いう脅おどしが含まれている。

「嬢ちゃん、どうする？ 交渉するのか、しないのか？」

トロシキオ似の男は、知子にどちらを選ぶのか聞いているのだが、生きるために交渉に応じるしかない。

それでも知子は10歳の学力で叫ぶ。

「どうしようって何？ 意味分かんない」

10歳の知子は「交渉」をまだ習っていなかつた。我が家のように手の届く所に辞書がある訳もなく、知子の頭の中には、ひらがなの「どうしよう」しかない。

「胡椒こしょうなら、うちの台所にあるから、習ってなくても分かるんだけ

ど」

知子は小声でブツブツと不平のようにならう。

マフィアたちは、知子の言葉に驚いたのか、あれから何も黙つてこないし、レーザーも撃つてこない。

次は父が叫ぶ。

「ここの子は、まだ言葉を知らない。交渉が必要なら私が代わつてす
る」

「ふざけるな！ てめえじやあ、意味ねえんだよ」

父が言つと返事はすぐ戻つてくる。レーザー光線も数発、父の足元に撃ち込まれる。

「あひや、ひやひや」

父はステップを踏んで踊りながら逃げる。

「あなた」

後ろに下がった父に母は寄り添う。父は震え上がって母にしがみついた。

トロツキオの隣にいる男は一歩前に出て叫んだ。

「知子。俺は未来から来たカプリツオだ。俺はタイムマシンでこのあどどうなるか、見てきたから知つていい。このままお前たちが逃げれば、智という奴は死ぬぞ。それは困るんじゃないのか?」

知子は智を見た。智はカプリツオを睨んでいて、知子を見ようともしない。

その智の表情を、知子は経験したからよく知つていい。父の裏切りにより圭介について行つた時の智の表情が、今の智の表情と同じだと。

智は知子と目を合わさないようにして心情を悟られないようにしているのだ。

知子は考える。なぜ智は今の心情を悟られないようにしているのか? 智は自分が死ぬ事を知つてているからだ。じゃあ、圭介は智が

死ぬ事を知っていたのか？

知子は圭介を見る。圭介は既に知子を見ていた。知子は、圭介の青い瞳の色から、圭介も智の死を知っているのを感じ取った。

逃げれば智が死ぬという衝撃の予告。^{するどいくい}カプリツオが言った死の予告は、10歳の知子の胸に鋭い杭となつて打ち込まれる。

走つてもいよいのに、知子は口で呼吸をする。回避できない辛さに、胸が苦しみを訴えているのだ。

カプリツオは慈愛の無い表情で知子の答えを待つていて。あまり待たせると、ここにいる全員がレーザー銃の餌食になつてしまつ。

知子が考えていられる時間は少ない。未来の知子は、今の状態をどう切り抜けたのだろうか。

47・心の繋がり

「智が死ぬのは困る。ここにいる全員がそう思つていて、
知子が俯いて考え始めた時、圭介が叫んだ。

「智が死ぬのは困る。ここにいる全員がそう思つていて、
圭介は智を見る。

「父さん！」

智から久し振りに聞いた圭介を呼ぶ言葉。

知子から見て、本当の親子なのか分からぬが、圭介と智はタイムマシンのエンジニアとSPという立場の違いがあるものの、二人はなんらかの心の繋がりがあり、親子にも等しい関係のようだ。

圭介はなおも叫ぶ。

「私も未来から来た。だから、智が死んで、智以外の全員が助かるのは知つていて。本来、時の摂理に逆らう事は許されない。第三者が、これから起こるべき事実を変えると、それから先の未来にどうのような悪影響が及ぶのかも知つていて。だから時間エネルギーの流れを安全に未来へ導くためにも、智は死ななければならぬのは分かつてゐるつもりだ。それでも、私は智を助けたい」

「父さん。少なくともあなたは、機械工学の博士号を持つタイムマシンの技術者だ。そのあなたが時の摂理に逆らうなんて、絶対にやつてはいけない事だよ」

「それでも私は、智を助けたい」

「僕を助けたら未来の法律を犯す事になる。あなたが犯罪者になってしまう」

「もし私が智を助けたら、智は時間警察の人間として、犯罪者になつた私を逮捕するのか？」智？

父が知子の前に歩み出て圭介の隣に並ぶ。

「だったら、智君を助ける事に同意した私も犯罪者だ」

もう一度と仲間を売つたりはしないと心に決めている父に迷いはない。

智は拳を握り締めて言つ。

「二人ともおかしいよ。間違つてるよ」

智は玄関の扉を拳で叩いてから大人しくなつた。首をうな垂れて泣いているようにも見える。

圭介はカプリッオに言つた。

「智を助けるには、どうすればいい？　お前の交渉に応じようぢゃないか」

カプリッオの口の端が吊り上がる。

「簡単な事さ。智を俺たちに引き渡せばいい。俺はタイムマシンで

時空間を渡り、智の戦いを見てきた。智は強い。戦いの神マルスのようだ。性格は生意気みたいだが、未来の手術で脳をしようと弄れば、有能な俺の子分になる。これで智は死なずにすむ。命が助かるんだ。安いだろ？』

知子の思考が止まった。その代わりに、ガルネオに連れて行かれた圭介の姿を思い出す。今度は智が連れていかれてしまうのか。しかも智の脳を弄る！？頭に穴を開けるつて事？カプリツオの言葉は知子に新たな衝撃を与える。

知子は考えている場合じゃないと思った。その時。

「ダメええええ」

知子はいきなり叫んだ。考えるより先に感情が口から出てしまう。

「絶対にダメ！ 智さんは、あんたにあげないんだからあああ」

圭介は、知子の大声に体をビクつかせて驚く。

智も玄関の扉に手をついたまま知子を凝視している。智は、知子の大聲のせいで、自分が死に直面している事を忘れているようだ。

母は急いで知子の口を手で塞いだ。
ふさ

「知ちゃん！ 静かにして。撃たれるじゃないの！」

母の声も大きい。父はビックリ仰天状態になつている。
ぎょつてんじよつたい

カプリツオの口つきが怖くなる。日本語が分からぬトロツキオ

は心配になつて聞く。

『カプリツオ、どうした？ 交渉が決裂したのか？』

『爺ちゃん、それどころじゃねえ。もつと最悪だ。一体あの娘はなんなんだ！？ 俺の調子が狂つて仕方がねえ。どうして子供つて奴は、ああもバカな生き物なんだ』

カプリツオは何かに怯えている。少なくともトロツキオにはそう見える。

カプリツオは手を振り下ろした。

『全員殺せ。俺たちが生き残るには、もうあいつらを殺すしかない』

圭介は知子に覆い被さる。

「知子さん！」

智は玄関の扉を閉めて走り出す。

「逃げて！ リビングへ走るんだ！」

知子たちは来た道を戻つてリビングへ走り出す。

智が閉めた玄関扉から無数のレーザー光線が貫通して飛び出す。壁からも無数のレーザー光線が貫通して飛び出してくる。

智は体を張つて、知子の両親の盾になる。圭介も知子を抱きかかえた。

知子の瞳に、智の背中に命中するレーザー光線が映る。

「智ちゃん！」

きっと自分を抱きかかえている圭介の背中にレーザー光線が当たっているに違いない。

父と母は振り返って智を見る。

「大丈夫か？ 智君」

「防御バリアがありますから、ちょっとぐらりと当たつても平氣です。僕がレーザーの盾になります。さあ、早く中へ逃げましょう」

知子は智がレーザー銃で撃たれて死んだと思い肝きもを冷やした。智の元気な姿を見る限り、まだ智は死ぬ時ではないらしい。では、智が死ぬ時はいつなのか？

知子たちは走り、リビングへ駆け込む。

ガルネオが朝食をとっていたリビング。大きなガラス窓からは青く広がる芝生が見える。そのガラス窓の傍にガルネオが倒れていた。床にはおびただしい量の血が広がり、召使いが淡淡とした表情で床に広がった血を拭き取りながら掃除をしている。

母は悲鳴をあげて父にしがみついた。父は母の背中を撫ぜながら「ひびきように言ひ。

「一体」何があつたんだ

知子も何があつたのか見よつとするが、圭介が知子の額を自分の肩に押し当てる。

「知子さんは、見ないほうがいい

「なんで？」

知子は頭を動かしてみるが、圭介の大きな手は知子の頭を掴んでいるため動かせない。

「人が死んでいるからです」

「知ちゃん、絶対に見たらダメよ」

母も悲鳴混じりに言ひ。

知子が、誰がどうして死んでいるのか、どんな状態で死んでいるのか、考えているうちに、またもや扉や壁から貫通したレーザー光線が飛び出して知子たちを襲う。

無差別に発射されているレーザー光線は、リビング内を飛び交い召使いに命中し、召使いはバタバタと倒れていく。

知子の耳に、撃たれて苦しむ召使いの声が入ってくる。知子は怖くなつて圭介にしがみついている手に力を入れた。

とりあえず知子たちは、圭介と智のバリアで守られているから大丈夫だが、追いついたカプリッソたちに捕まつてしまつたら元も子もない。

圭介は逃げ道を探して辺りを見回し、芝生の上にある大きな箱に気づく。

「あれは！」

庭にカプリッソが乗つて来たタイムマシンがある。

智も気づき、知子たちを庭へ誘導する。

「外に出て」

庭に出た圭介は知子を芝生に下ろした。

「知子さん、自分で走れるね？」

「うん」

圭介は知子にレーザー光線が当たらなによつて後ろを警戒しながらタイムマシンに向つた。

智も両親を先にタイムマシンへ走らせて後ろを警戒しながらタイムマシンへ向つた。

圭介が走り寄つてタイムマシンの外壁に触れて、窓ガラスから中を覗く。

「ガルネオの屋敷内にあつたものと同機種だが、これにはエンジンがある」

圭介はドアを開ける。

「みんな、これに乗るんだ」

知子たちはタイムマシンに乗り込んだ。

圭介は操縦席そうじゅうせきに座り、パネルのスイッチをオンにしていく。

最後に智がタイムマシンに乗り込みドアを閉めた。

圭介は操縦桿そうじゅうじょうを握る。

「未来へ。私たちの時間へ移動します。未来へ行けば時間警察が私たちを保護してくれるはずです」

父と母は喜びの声をあげる。

「やつた、これで助かる」

「私たち、助かるのね」

知子も父と母と手を取り合つて喜ぶ。そして、死なずにするんだ智とも手を取り合つた。

「よかつた、智さんが死ななくて」

「うん。これもみんなのお陰だよ」

知子たちは手を取り合つて喜び合つた。

タイムマシンの周りに青く光る竜巻が起る。タイムマシンは竜巻のエネルギーを受けて浮上する。

カプリツオたちはリビングに駆けつけた。

リビングには召使いの死体があるだけで、知子たちがいない。

トロツキオは庭の竜巻を見て驚く。

『なんて事だ！』

タイムマシンは浮上し、その中に知子たちが乗つている。

カプリツオからは笑顔が零れている。

『爺ちゃん、大丈夫。これがあるから』

カプリツオは懐から機械を出した。金属に包まれたボディにはボタンがいくつもついている。それはテレビのリモコンに似ていた。

『これを、いついて、いつると』

カプリツオはボタンを押していく。

焦るトロツキオ。

『方法があるなら早くしろ。タイムマシンが消えてしまつや』

カプリツオがボタンを押している最中に、タイムマシンはマフィアたちの皿の前から消え去った。

トロツキオは悲しみの声を上げる。

『消えてしまった。俺たちの希望のタイムマシンが……』

トロツキオは吹き残りの小さな青い巻きが消えていく様をずっと見続けた。

知子たちは、タイムマシンの中で喜び合っていた。

「未来に行けるとは思わなかつた。未来の私に会えるかな

知子はとても喜んでいる。

智も死なかつた自分自身に胸を撫で下ろしている。

「きっと、未来の知子さんは、未来のケーキを出してみんなを歓迎すると思つよ」

母も嬉しさ一入で言つ。

「まあ、未来のケーキですつて。もうパパ、どうしましょ」

「どうしようつて、お前、食べるしかないだろつ。ぬはははは」

父の笑いは止まらない。

圭介はみんなの笑い声を聞きながら操縦桿を握っていた。モニターの表示はタイムマシンが順調に1年ずつ未来へ進んでいる事を示している。そのモニターに緊急メッセージが表示される。

controlling automatically (自動制御中)

モニターに表示されている年数が過去に戻りだす。

圭介はパネルのボタンを押すが、自動制御が解除できない。

「大変だ。自動操縦に切り替わった。2008年に戻つてる」

「えええ！……」

圭介以外の全員が同時に驚いて声をあげる。

智がモニターを確認する。

モニターの真ん中に「controlling automati
cally」の文字が表示されている。

圭介は操縦席から降りて屈んで床に手をつく。
かが

「智、操縦を代わってくれ。なんでもいい、自動制御解除のパスワ
ードを叩き込んでくれ。私は今から自動制御システムを壊す」

智は操縦席に座る。モニターを見ながらボタンを押す。智もタイ
ムマシンの操縦ができるようだ。

「えっと……。世界征服。金儲け。女遊び。イタリア語がダメなら
日本語か。それとも英語……」

智は思いつく言葉を入力するが、どのパスワードもエラーになる。

「マフィアが考えそうな言葉ってなんだ? 分からないよ」

知子の父が後ろから叫ぶ。

「ケジメ。任侠。^{「なきよ」} 義理と人情は?」

「パパ、ダメよ。日本のヤクザじゃないんだから

母はこんな時も父にツツ「」を入れている。

圭介はモニターのパネルを開けて、いろんな色の回線を引っ張り出してくる。

「これは時空座標計算システム。これは時空間推進システム。なんだ!? この無駄な配線は? ええい、自動制御システムはどこにあるんだ?」

圭介は自動制御システムを探し出せなによ! だ。

そしてついに、タイムマシンのモニターは2008年を表示した。マフィアたちの目の前に、また青く光る竜巻が起こりタイムマシンが現れる。

タイムマシンは静かに生の上に着陸すると光る竜巻は消え去つた。

トロッキオはタイムマシンへ行く。中を覗くと、知子たちが騒ぎながらモニターを見ている。

圭介は四つん這いになつて、四角く開いている壁の穴から口一寸や機械の一部を引っ張り出している。

トロッキオは思いつきドアを開けた。

知子たちは一斉にトロッキオに注目する。

カプリツオがトロッキオの隣に立つ。顔や体型が似ているトロッキオとカプリツオ。血が繋がっているのは一目瞭然。トロッキオは

レーザー銃を知子たちに向かた。

カプリツオは知子だけを見据え、その瞳孔は開いて中央の間に知子の姿を映しこんでいる。

「知子。 こんにちは」

外国语訛りの日本語が、粘り氣のある発音となつて知子の耳に聞か、その気持ち悪さに知子の背筋に寒気が走る。

しかし、どんなにイヤな相手でもしなければならない時がある。

「こん…… こち…… は」

知子は母にしがみつきながら挨拶をした。生きるために。

カプリツオは満足な表情をする。

「いい子だ、知子。 こっちにおいで」

「行くな！ お前に知子さんは渡さない」

『動くな！』

レーザー銃を出したトロツキオに智は飛びついた。

トロツキオはレーザー銃を撃つが、智のバリアが働いてレーザーの威力は無力化する。

その智にカプリツオは短機関銃を突きつけた。

『バリアで身を守っているとはな。道理で部下全員でレーザー銃を撃つても死なない訳だ』

動きを止めた智を見て、カプリッコはトロッキオに短機関銃を渡した。

『爺ちゃん。バリアにレーザーのような工ネルギー攻撃は効かねえ。こういう時は弾丸のような物理攻撃じゃないとな』

トロッキオはレーザー銃から短機関銃に持ち替える。

『そりなのか』

『うん。これ、未来の常識』

カプリッコは智を愛おしそうに見つめながら言つ。

『智、俺はお前が欲しい。だが今はあとだ』

カプリッコは知子に手を出した。

『知子。おいで』

知子は母にしがみついて動かない。

『知子、来ないのか？ 俺の言う事を聞かないと山田里美と安田佳枝を殺すぞ？ 二人は知子の大切な友達なんだろ？』

カプリッコは知子の友人をも把握している。里美と佳枝のところ

「マフィアの子分が潜伏しているのか。

「ああ、お姫様。」つちにおいで

カプリッオはチロチロと赤い舌を見せて知子に話しかけながら捕らえる機会を狙っている。不気味に光る琥珀色の瞳。

知子はカプリッオの顔がトカゲの顔に見えてきて、カプリッオの手に触るのもイヤなほどに気持ち悪さを感じてしまう。

しかし、このままでは智は奪われ、里美と佳枝もいじょうにされてしまう。

トカゲのカプリッオに人の道理は通じない。こうなつたらもう戦うしかない。知子は母から離れた。

「知ちゃん！」

母は知子の手を握る。

『動くなと言つただろ。そんなに死にたいのか？』

トロッキオが母に短機関銃を向ける。

イタリア語は分からぬが、何が言いたいのかは察しがつく。

知子はトロッキオを見た。

「ママを撃たないで。私、行くから」

知子はカプリツオの手の握る。気持ち悪いと思っていたカプリツオの手は人の温かさがある。カプリツオにも自分と同じ血が流れているのだ。

知子はこんな時にも考える。カプリツオはどうしてマフィアになつたのか。カプリツオの過去に何があつたのか。

知子は足を踏み出してタイムマシンから降りる。タイムマシンから降りただけなのに、知子は自分がカプリツオと同じ世界に踏み込んだような気がしてならなかつた。

50・譲れない未来への思い

知子はカプリツオと手を繋いで歩いていた。

二人が歩いているのはガルネオ、血體の芝生の上。まるで公園にいるようだ。

カプリツオがマフィアじゃなければただの散歩に見えるだろう。それほど一緒に歩く知子には、カプリツオが普通の人間に見えてならなかつた。

「どうしてカプリツオさんは悪い人になつたの？」

カプリツオは足を止めた。

「悪い人！？」冗談じゃねえ。俺は悪い事なんぞ、これっぽっちもやつちやあいねえ。俺はただ、不幸で貧乏な自分の未来を変えているだけだ。トロツキオ爺ちゃんも幸せにしてやりたいしよ」

知子の手を放して、外国人特有の大袈裟な身振り手振りで話す。

知子は話を聞いて、カプリツオから普通じゃないズレを感じる。感じるが、トロツキオが智たちに短機関銃を向けてるので、カプリツオに「あなたの頭、とっても悪いと思つ」と挑発的な事は言えない。

「でも、未来の警察に捕まる予定なんでしょう？」

「捕まらねえよ。バカじゃないのか？ 何考えてんだ？ お前と話

していると調子が狂つて仕方がねえ」

カプリッオに頭ごなしに言われ、知子の頭にカプリッオの息がかかる。その勢いで知子の前髪が左右に分かれた。

知子は口を尖とがらせる。

「そんな事を言われたって分かんないよ」

そして、知子の頭にコツンと硬いものが当たった。知子が見ようとして首を動かすと、硬いものは頭の地肌を滑つて額の真ん中に当たる。そうなると硬いものが目の前にきてともてよく見える。硬くて冷たい金色のレーザー銃が。

「もうバリアもない。お前を守る奴もいねえ。俺とお前の二人きりだ」

カプリッオの握るレーザー銃の銃口は知子の眉間を押させていた。太陽の光りが当たり、金色の銃は一段と輝いている。

知子は目を細めて眩しそうにレーザー銃を見てからカプリッオの顔を見た。背筋に寒気が走るが涙は出でこない。

カプリッオの琥珀こはくいろ色の瞳孔が開いていく。

「なんだ、怖がらないのか？」

「怖いけど、私、大人になつたらタイムマシンを作る事になつてから、それまで死なないの」

カプリツオの瞳孔は大きく開き、真ん中の闇にまた知子の顔を映しこむ。その瞳は完全に知子を捕らえていて逃す様子がない。

「そんな未来、俺が変えてやる。お前を殺して、俺たちを不幸にしたタイムマシンをこの世から消す。それで俺と爺ちゃんは幸せになるんだ」

知子から見て、未来で生まれ育つたカプリツオには、幼い頃から抱いてきた譲れない未来への思いがある。

しかし、カプリツオから見て、過去で生まれ育つた知子にも、譲れない未来への思いがある。

知子は額に銃口が当たっているにも関わらず叫ぶ。全身全靈を込めて、譲れない思いをカプリツオにぶつけた。

「イヤ！ タイムマシンは絶対に作る！ だって私、智さんのお嫁さんになりたいんだもん！！」

形勢はどう見ても、額に銃を当てられている知子が不利なのだが、知子はそれなりに頑張つて仁王立ちになつている。

ちょうど知子とカプリツオが言い合ひをしている頃、智たちはトロツキオの誘導でタイムマシンから一人一人順番に降りていた。

最初に父が降り、次に母が降り、圭介が降りる。そして、智が降りた時、あの知子の大声が智たちの耳に飛び込んできた。

「タイムマシンは絶対に作る！ だって私、智さんのお嫁さんになりたいんだもん！！」

父と母、圭介が同時に智を見る。

「智。やつぱり、朝のあの時、何があつたんじやないのか？」

圭介は、偶然とはいえ智が着替え中の知子の部屋のドアを開けてしまった事実が知りたくて聞く。

智は懸命に弁解する。

「何もないよ

「これから何かあるの？」

何も分かつていらない母は、何がなんなのか知りたくて智の言葉端を拾つて聞く。

「いえ。何もありませんって」

「じゃあ、もう済んだ事なのか？」

何も分かつていらない上に、天然の父のツッコ^{ツッコ}は鋭く、智はかなり動搖する。

「済んでいません。始まつていらないんだから、済む訳がないでしょ」

両親は、智の意味深発言を興味津々に聞いている。

日本語が分からぬトロツキオも、短機関銃を構えるのを忘れて

智の顔を見ている。

今短機関銃は誰も狙っていない。なのに、タイムマシンを降りたばかりの智は、周りからの視線を痛いほど身に受けて、矢面に立たされた心境になっていた。

知子は、自分の未来のためにカプリッオと戦っていた。

「私が智さんと同じ大人になつたら、タイムマシンに乗つて、智さんのお嫁さんになつて、ハネムーンは世界一周旅行をするの」

啞然としているカプリッオに、知子は田ぐじらを立てて言い続ける。

「いい？ ちゃんと聞いて。まだほかにもあるの。私にノーベル物理学賞をくれるノーベルに、ここにちはの挨拶もしないといけないの。大人になつた私は、タイムマシンに乗つて、いっぱい、いっぱい、やる事があるんだから！！」

これは10歳の知子が真剣に考へてゐる未来の構図。

だが、カプリッオには子供の戯れ事にしか聞こえない。

「うるせえ、糞ガキ！ 何がハネムーンだ。何がノーベル物理学賞だ。お前は今から死ぬんだ。そんな未来はねえんだよ」

カプリッオは、知子が逃げないように襟首を鷲掴みにして銃口を知子の眉間に押し付ける。

知子はカプリッオのレーザー銃を両手で掴んだ。自分の額から銃

口を外し、カプリッオの手に噛み付いた。

『いてえ。 いててて』

余りの痛さにカプリッオはイタリア語で叫んでいる事に気づいていない。

知子はカプリッオに振り回されながら必死に噛み付く。カプリッオの手は不味い。更に皮膚が骨の上で滑るのでとても噛みづらい。だが銃を持つ手に噛み付いていなければ撃たれてしまう。知子はカプリッオに負けないよう顎に力を入れる。

カプリッオは知子を押し返すが、それは知子が噛み付いている部分の肉が伸びて痛みを倍増させてしまう事にもなる。

「やめる、糞ガキ！ いてえ」

「知子さん！？」

智は、トロッキオを押し退けて走り出した。

『てめえ！』

トロッキオは押されてよろめきながらも走り出した智に短機関銃を向ける。

圭介がトロッキオの腕を掴んで短機関銃を別の方向へ向ける。発射された弾丸は智の足元を通り過ぎて芝生に当たる。

父も手伝つてトロツキオを押さえ込んだ。

子分たちはレーザー銃や短機関銃を構えるが、トロツキオやカプリツオに当たりそうで引き金が引けず、おろおろしている。銃では無理だと気づいた子分が智と圭介たちに向つて走り出す。

このままでは智も圭介も大勢のマフィアに取り押さえられてしまふ。

圭介は叫ぶ。

「智、爆破させる。知子さんを守るんだ！」

「分かつた」

智はカプリツオを殴り飛ばして、知子に覆い被さつた。

「知子さん、このままじつとしてて」

知子は智に守られながら、口の中にあるカプリツオの不味い塩気をペツペツと数回吐き出す。

圭介はポケットにある機械の蓋をとつて中にあるスイッチを押した。

瞬間、別荘の中で爆発音がして屋根の一部が吹っ飛んだ。

爆発した場所は、ガルネオが保管していたタイムマシンの実験BOXがあつた場所。

圭介は使える部品を駆使して遠隔操作の爆弾を作ったのだ。当然その爆発も青い光りになる。

ただし智が投げていたソラマメの手榴弾と比べると、破壊力はあまりにも違っていた。

屋根に開いた穴から現れたのは青く光る竜巻。

竜巻はあつという間に広がり別荘を飲み込んだ。竜巻の青い光りは更に広がつて庭にいる子分を巻き込んでいく。

青い光りを浴びた子分たちの体は、光りを帯びて崩れるようにして金色の粒子に変わり煙となって散つていく。

リビングの床に倒れているガルネオの死体も、召使いの死体も金色の粒子に変わり散つていく。

青い光りは智や圭介も襲うが、一人の体はバリアが守っているため、青い光を浴びても金色の粒子になる事はない。

そしてバリアは、青い光りを受けて球体の姿を現す。その球体の中にいる知子も両親も青い光りの影響を受けないため無事でいる。

知子は、智の腕の中で幻想的に光る青い渦を見ていた。

青い光りは渦を巻いて勢いよく流れているが、風圧は全く感じない。

智が通路で投げた小さな手榴弾と同じ青い光り。この青い光りで

通路にいた子分たちは全員金色の粒子に変わつていつたのだ。

自分の手を見ているトロッキオも金色の粒子に変わつていく。

だが、知子は愕然とする。

カプリッオが倒れている芝生に半球が見える。カプリッオもバリアシステムを持っているのだ。

カプリッオは体を起こした。右手にはレーザー銃を持っている。智に殴られたせいで目が回っているのか、しきりに頭を振つて立ち上がろうとしている。

智は、知子を抱き上げて走り出す。

「パパさん、知子さんを。絶対に放さないで」

「分かった」

智は、知子を父に委ねるとカプリッオに向つて走り出した。

「智さん！」

父にしきり抱きとめられている知子は身動きができないで、智の死が予告どおりにならないように、祈ることしかできない。

カプリッオは立ち上がる。智に気づきレーザー銃を撃つ。しかし智のバリアはレーザー光線を無力化してしまつため智に当たらない。

カプリッオもそれは知っている。だが追い詰められたという焦りがカプリッオの状況判断を狂わせる。

「チツ」

カプリッオは舌打ちをしてレーザー銃を智に投げつけた。智は飛んできたレーザー銃を避けてからカプリッオに飛びつく。

「もひ、お前の好きにはさせない！」

「畜生！」

智のバリアとカプリッオのバリアが干渉しあつて稲光が起きている。

カプリッオは懐からナイフを出して智の前で振り回す。

ナイフを避けてばかりいる智。その智の足はリズミカルにステップを踏み、上体をしなやかに動かしながらナイフから逃げ回りカプリッオの隙を誘う。

その隙ができた僅かな瞬間を狙つて、智はカプリッオの懐に入つた。ナイフを持った手を掴んで動きを封じる。カプリッオの足を引っ掛け、カプリッオの体を芝生に叩きつけた。

うつ伏せになつたカプリッオの背に跨つて乗り、智は完全にカプリッオを押さえ込んだ。

カプリッオはもつ動かない。声を上げたりもしない。気絶したようだ。

青い竜巻は縮小を始めどんどん小さくなつていいく。

トロッキオもその子分も金色の粒子に変わってしまい、知子たちの命を脅かす者はもう誰もいない。

竜巻が完全に消え去つた時、ガルネオ島に静寂が訪れた。

知子は父の腕から下ろされた。走つてカプリッオを押さえつけている智の所へ行く。

智は顔をあげて知子を見る。笑顔になつて知子に言った。

「これでやっと日本へ帰れるよ。知子さん」

53・唯一の救い

その智の背中から金色の煙が薄つすらと立ち昇つてゐる。

その下にいるカプリツオの体からも金色の煙が昇つてゐる。

「智さん。その金色の煙……」

今の知子なら、金色の煙が何を意味しているのか分かる。知子が田の前の状況を信じたくないと思つても、知子の脳は智の状態を冷静に判断してしまう。

智は竜巻の青い光りを浴びてしまつたのだ。

「イヤだ、智さん」

智に飛びついた知子の腕を圭介が掴む。

「智に触つたらいけない。触れば、知子さんの体も分子レベルで崩壊してしまう」

「圭介さん、手を放して」

知子は泣き出す。

「智さん、消えないで」

智に言つてもどうにもならない事くらい知子にも分かる。でも智を思つ気持ちは止めどなく口から出でてくる。

「圭介さん、教えて。どうしたら智さんは助かるの？」

圭介は首を横に振る。

「智はもう助からない。目に見えるほど濃縮された時間エネルギーに直接触れてしまった者は、体の細胞が分子分解を起こしてしまつ。痛みがないのが唯一の救いと言うしか……」

智は知子に言う。知子の王子として。ヒーローとして。

「知子さん、泣かないで。これは僕が望んだ事だから。僕は、2008年に来る前に、未来の知子さんから、絶対に死ぬから過去へ行つてはいけないって言われたんだ。僕もそのつもりだつた。でも、どうしても時の摂理は変えられなかつた。時間は人という代理人を僕の下へ送り、「過去に変化があると時空がうねつて歪みが生じて未来に悪影響が出る」と言つて、僕を執拗に過去へ行かせようとする。疲れて時の摂理に逆らう事を諦めた僕は、自らの意思で2008年の過去へ行くことを選択してしまつたんだ。過去へ行くつて言つたあと、後悔したよ。2008年へ行くと返事をしてしまつなんて自分自身が信じられなかつた。死ぬのは怖いし、逃げたいとも思った。でも、それを知子さん、君が変えたんだ」

智は気づいて、急に呆れ顔になつて笑い出だす。

「あははは。そういうえば知子さんは10歳だったね。時の定めに嘆き悲しむ僕を救つてくれたのは、15歳の知子さんだつたよ。15歳の知子さんも、今の君と同じように、かわいい人だつたよ。怒つたり、泣いたり、笑つたり」

今の智は、10歳の知子を通して、15歳の知子を見ているよつだ。

「智さんの言つてる事、分かんない」

知子は圭介の手を外そつしながら泣きじやぐる。

「ごめん。僕の言つてる事、10歳の知子さんには難しいよね」

智の体は金色の煙となつてどんどん消えていく。

その下で氣絶しているカプリッオからも金色の煙が昇り、体が消え始めている。

カプリッオが、智を生かそつとしたのは、タイムマシンで移動した時に、自分の死に智が関係している事実を知つてしまつたからだろうか。

タイムマシンに乗り、自分の死を知つても変える事が許されない、悲しく厳しい時の定め。

それでも智は、笑顔で知子に話し続ける。

「知子さんのお陰で、僕は消えていく今も、諦めずに未来を見続ける事ができる。僕の体は全て金色の煙になってしまっけど、消えてなくなる訳じゃないんだ。知子さんがノーベル物理学者になれば分かる事だけど、物質と時間エネルギーは常に互いのエネルギーバランスを均等に保ちながら同じ場所に同時に存在していくね、濃い時間エネルギーに触れてしまった僕の体は、物質と時間エネルギーのバランスを崩して分子分解を起こし、更に分かれて原子になつたあと、原子はもつと細かく分かれて、そこから時間エネルギーは分離し、次の原子の姿になるまで、まるで意思があるかのように時間エネルギーは自由に移動を始めるんだ。過去や未来、別の空間へとね。その後、原子は長い時間をかけて元の状態に戻るけど、時間エネルギーと分離してしまった原子が元に戻るにはかなりの時間がかかるし、原子が元に戻ったとしても、僕の人間としての体が元に戻る可能性はない」

智は、知子をじつと見つめながら一呼吸置いてまた話し始める。

「とりあえず僕の体は時間エネルギーになってしまっけど、今度は知子さんのための時間となつて、ずっと知子さんと一緒にいて、ずっとずっと知子さんを見守つていく事にするね」

知子は、頬を流れる涙を片手で拭つてしまいながら言つ。

「私、絶対にタイムマシンを作るから。時間エネルギーの事も調べて、絶対に智さんを助けるから」

「知子さんは、僕を助けてくれるんだ」

「うん。絶対に助けるから」

「だつたら僕は、助からないと思つていた自分の未来を変える事ができたのかな」

智は今も笑顔だが、青い瞳には涙が浮かんでいる。

「知子さんに会えて、とっても楽しかったよ。知子さん、ありがとうございます」

智は笑顔と言葉を残して消え去つた。その下にいたカプリッオも消えていない。

まだ金色の煙は宙を漂つ^{たたよ}ている。

「智さん……」

知子は散つて薄くなつていいく金色の煙に手を伸ばす。だが、圭介が知子の手を引くので、知子は煙を摑む事ができない。

「知子さん、まだ危険なのでさがつて下さい。時間エネルギーの濃度が、もっと薄くなるまで待つて下さい。薄くなつて私たちの目で確認ができなくなるまで触つてはいけません」

「智さん……」

どんなに呼んでも、もつ智の返事は返つてこない。智の笑顔も見

れない。

知子のヒーロー智は、時の王子様になってしまったのだ。

人間の知子がどんなに恋焦がれても、どんなに智を呼んでも、会う事も触れる事も許されないのだ。

知子は泣き続ける。知子の心に開いた穴は、流れ落ちる涙のせいでどんどん大きくなつていく。

そんな知子に、母が近づく。

「知ちゃん、智さんのお嫁さんになるのよね？」

「うん。なる。絶対になる」

知子は、母にすがつて泣き出した。

父も知子と同じ背丈になるよつに腰を屈めて知子の頭を撫ぜる。

「頑張れよ、知子。パパも応援するからな。立派なノーベル物理学者になるんだぞ」

「うん。ノーベル物理学者になる」

知子を慰める両親は博士号を持つていない。物理学の知識は学校で習つたが、思い出せないほど社会の荒波に揉まれてしまつていて。時間原理の知識などあまりにも縁遠い。それでも、智は人に戻れない存在になつてしまつたのだけは分かる。もし知子が智に会えたとしても、それはタイムマシンで移動した過去の智なのだと。

圭介は、もう危険は無いだろつと判断して、知子の手を放した。

「智也ん」

知子は智がいた芝生の上に座り込み芝生を撫ぜた。芝生の先端が擦り切れている。じつやうら芝生も青い光りを浴びて一部が時間エナルギーになつたようだ。知子は静かに泣き続ける。

圭介は知子たちに背を向けた。背を向けても知子の鼻をすする音は聞こえてくる。

「時の摂理は、こんなにも悲しいものだつたんだな。博士号を持っている私が今頃氣づくとは……」

圭介も静かに涙を流した。

西に傾いた太陽が照らす、ガルネオ島。

今日は2008年5月5日、子供の日。

芝生の上にいる知子たちの間を、静かに心地よい風が吹き抜けていく。

今ガルネオ島にいるのは、知子と、知子の両親と、圭介の、4人のみ。

全てが終わり心が落ち着いてから、4人は疲れを思い出して芝生に座っていた。

知子は泣きやんで、両親と一緒に海の景色を眺めている。

4月半ばに智と出会い今日まで、10歳の知子はいろいろな事を経験した。

王子智に恋をして、ノーベル物理学賞ノーベル物理学賞を受賞しタイムマシンを発明すると知らされて、命の危険にまで晒さらされて、知子は、まだ10歳なのに人生の半分を経験してしまったような気分になっている。

でも、本当の戦いはこれから始まるのだ。今後の知子の敵は時間。見る事も触る事もできない相手に挑んでいかなければならない。でないと、時間の彼方いとにいる時の王子、智に会えないからだ。

そして、智が消える前に言った、15歳の知子に会ったという事

実。これはどうこう事なのだろうか。詳しい事は分からぬが、この先いろいろな事が待つてゐる、といつただけは10歳の知子にも分かる。

「これからいつぱい大変だー」

知子はポツリと呟いた。
つぶや

父は圭介と今後について話し合ひをしている。

父の表情は落ち着いて穏やかだ。暇を持て余しているようで、芝生を千切りながら言ひ。

「これから私たちはビツやつて日本に帰るんですか?」

「未来の知子さんの話によると、芝生がある所で待つていれば未来から迎えが来るらしいのですが、いつもやつて座つて待つていても迎えが来ないとこひをみると、芝生がほかの場所にあるのかも知れませんね」

キング圭介は、大らかにゆつたりとした口調で言つ。

父は手を止めて圭介に向き直る。

「ジョゼフさん。未来の知子さんから話を聞いて知つてゐるんだつたら、もつと早く言って下せりよ。うちの知子が拉致されたのも、ジョゼフさんが、知子の未来の事実を隠していたからじゃないですか」

「いえそれはですね、未来の知子さんから、未来の事をパパさんに

話すと、パパさんがマフィアに教えてしまつと言われていたの…

…

父は急に怯む。

「いや、それは、その……」

圭介がタイムマシンのエンジニアだとマフィアに話してしまった父は、逃げ場が無くて生を撫でまくつている。今の父は、圭介に頭が上がらないようだ。

父の隣にいる知子は、だんだん金色に染まっていく景色をボー
ツしながら見ている。その途中で、宙に浮いている青い竜巻を見
つけた。

「ママ、あれ?」

「あ、青い竜巻だわ

圭介が確認する。

「お、やっと来た」

4人は立ち上がる。

竜巻は大きくなり、一台のタイムマシンを運んできた。

そのタイムマシンは新幹線の先頭車両と後尾車両をそのまま繋ぎ合わせたような形をしていた。

ボディには「TIME POLICE」の文字がある。未来の時間警察が所有するタイムマシンのようだ。

タイムマシンは生の上に着陸したあとに入り口が開く。これも新幹線のようにスライド式の入り口になっている。

中から制服に身を包んだ警官が出てきた。警官は4人を確認して圭介の前に立つと敬礼をした。

「相馬・ジョゼフ・圭介博士ですね？」

「そうです」

「我々は、2060年から参りました、時間警察イタリア支部の者です。時間犯罪人カプリッオを追つて2008年に来たのですが、カプリッオが2008年の時間空域に特殊なバリアを張り巡らし、進入不可能となつておりまして、さきほどそのバリアシステムの撤去が完了し、この2008年に到着した次第でございます」

「そうですか。それはご苦労様です」

圭介は慣れた表情で警官の話を聞いている。

その後ろでは、両親が田を爛々と輝かせてタイムマシンを見ながら話をしている。

「あなた、聞いた？ 2060年だって」

「聞いた、聞いた。あのタイムマシンも、きっと知子が作ったんだよな」

「イタリア支部なのに、あの人、日本語をしゃべってるわ。頭いいのね」

「知子もいざれば、ああなるんだよ。きっと」

警官はチラリと両親を見るが、続けて圭介に説明を続ける。

「途中カプリッオの攻撃を受けて、時空内のバリア付近で立ち往生をしていた2047年のタイムマシンを我々が発見保護し、現在は牽引されて2047年に向っております」

「多分それは、2008年5月3日の時に日本の岐阜県に到着する予定だった、私たちのタイムマシンだと思います」

「おっしゃる通りです。相馬博士」

自宅で知子たちが襲われた時、未来から増援部隊が来なかつたのは、カプリッオの攻撃によるものだつたのだ。

56・大変な労力と多額の費用

警官は何枚かの書類を手に取る。

「我々が調査した結果、時間犯罪者カプリッオと、軍用武器を不法に製造所持した件で、生田公雄博士に逮捕状が出ております。生田博士は先ほど逮捕されたと連絡がありました」

「生田公雄博士……。どこかで聞いた名前だな。どこでだったか……」

圭介は生田を思い出せないようだ。

警官は次々と書類を読み上げてく。

「あとはカプリッオですが、この島に来たところまでは突き止めているのですが、カプリッオは特殊なバリアシステムを装備しておりまして、タイムレーダーでの捕捉が不可能で、現在も行方が掴めず」

圭介は淡々とした表情で言う。

「カプリッオは、時間エネルギーを浴びて霧散したよ」

「霧散ですか！？」

警官の動きが止まり、警官は首だけを動かして4人を順番に見ていく。

「ああ。見ての通り、この島に巣くっていたマフィアも時間エネル

ギーに飲み込まれて、今はいない。残っている人間は私たち4人だけ」

圭介は手を広げて別荘の端から端を示してみせる。

知子たち家族は、首をそろえてそุดだと頷く。

警笛は拍子抜けし、辺りを見回して、本当に4人しかいないのを確認すると、タイムマシンから降りた。

「本当だ。誰もいない。では、2台のタイムマシンが2008年にあるはずなのですが、それももしや？」

「一台は私が壊し、時間エネルギーに変えてしまったからもう無い。現在あるのは、あそこの一一台だけだよ」

圭介は芝生の上にあるカプリツォが乗っていたタイムマシンを指さす。

智が消えた原因となつた大きな青い竜巻は、圭介が壊したタイムマシンによるものだらうか。

知子が考えていると、圭介は振り向いて知子を見た。

「智が消えたのは、私が屋敷内にあつたタイムマシンを未来の技術で爆破し、時間エネルギーに変換したからだ。私の計算では、智のバリアは濃縮された時間エネルギーに100%耐えるものだつた。まさかカプリツォのバリアが智のバリアに悪影響を及ぼしてしまうとは……」

知子の脳裏に消えながら微笑む智の姿が蘇る。知子はまた涙ぐむ。

父は泣きそうな知子を見て、圭介に言った。

「ジョゼフさん、なぜそんな危険な事をしたんですか？」

「私はタイムマシンを未来に戻すか、できなければ破壊しなければならない使命を帯びていた。カブリッオが違法で作られたバリアシステムを所持しているとは思わなかつたんだ。正直、あの時の私は追い詰められていて、そこまで考えが及んでいなかつた。悲しい結果になつてしまつた事は、すまないと思つていい」

警官は、咳払いをして圭介と父の間に立つ。

「とりあえず、ドン・ガルネオは記録によると獄死した事になつてます。今いなればならないマフィアがいない状態で時が進むと、過去と未来の間で誤差が生じ、それに伴つて时空にも歪みが生じ、未来に悪影響を及ぼしてしまう。至急、手配をして、ガルネオにつくりの有機ロボットを製造し、2008年に送り込み、過去と未来の誤差を修正しなければなりません。ほかにも調査をして、消滅した人数分の有機ロボットを製造する必要がありますね。こりやあ忙しくなりそうだ」

警官はタイムマシンの中にいる者に声を掛けて仕事を手伝つよう言つ。するとほかの入り口もスライド式に開いて、次々と警官が降りてきた。新幹線の形をしたタイムマシンだけあって、降りてくる人数も2台の車両分いて多い。

圭介と話している警官は、イタリアの日差しが暑いのか警帽を被り直して中の空気を入れ替える。

「2047年の時間警察から相馬博士と警護のSP1名の身柄を保護するように引き継ぎを受けております。それと相馬博士には、ほかにお聞きしたい事がありますので」

警官はチラリと知子たちを見る。このあの話は過去の人間である知子たちには聞かせたくないようだ。

「恐れ入りますが、我々どこ同行願えますか？」

「その前に、カプリッオが知子さんの友人の名前を口にしました。もしかするとその友人の所にカプリッオの子分が潜んでいる可能性があるのですが」

「分かりました。そのご友人についても後ほど詳しく伺い、身辺警護の手配をします」

「それと、私に同行していたSPは、カプリッオと一緒に時間工ネルギーに巻き込まれて霧散しました」

「それも詳しく伺う必要があるようですね」

圭介は人差し指を一本立てる。

「もう一つ」

警官はまだあるのかという表情をするが、圭介の顔を見て急に引き締まつた表情になる。

圭介は振り返つて知子たちを見た。

「できれば、この家族を日本の岐阜県にある自宅へ送つて欲しいのですが」

警官の田代が驚いている。だが圭介が警官を見ると、警官は凛とした表情に戻る。

「申し訳ありませんが、時空移動の法律により、どんな理由があるとも、タイムマシンが存在しない時代の人間を、タイムマシンに乗せる事はできません。相馬博士なら重々ご承知だとは思いますが、未来の技術や情報が過去の人間に渡つた場合、そのために生じた過去と未来の誤差を修正するために、大変な労力と多額の費用が必要になつてきますので」

圭介は手を知子に向ける。

「」ひらは、新相対性時空移動理論のノーベル物理学者、加藤知子博士なんですが」

圭介のいきなりの発言に、知子の両親は顎を落とす。

「あの、ジョゼフさん。10歳の知子に、ちょっとそれは」

言いかけた母に、圭介は鋭い視線を送つて母を黙らせる。

事あるごとに警笛の態度が変わるのは、圭介の鋭い視線を浴びるせいだから。

知子も驚いて、キングの威儀とオーラを帯びた圭介の姿に目を見張る。

「加藤知子博士はまだ10歳ですが、タイムマシンに関わっている立場上、カプリツオの被害にあり、現在ここにいらっしゃっている訳なのです」

「そうなると、加藤知子博士についても、お話をお聞きする事になりますが」

「構いません」

「分かりました。今からそちらの」家族のためにタイムマシンを手

配しましょ'へ

警官は外にいる警官に指示を出す。声をかけられた警官は走ってタイムマシンの中に戻った。その数2名。

タイムマシンは扉を開けたまま浮上し、ちょうど真ん中を境に二つに分かれた。両方のタイムマシンとも新幹線の先頭車両のようだ。

警官は知子たちをタイムマシンへ誘導する。

「一皿お送りしますので、あちらのタイムマシンに搭乗して下さー」

知子たちは返事をしてタイムマシンに向づ。

「相馬博士は、こちらのタイムマシンで私ども同行願います」

「わかりました。……あ、そうだ」

圭介は、中指と親指でパチンと音を立てて、父を呼び止める。

「そういえば、パパさんに言わなければならぬ事がありました。知子さんに関する、とても重要な事柄です」

父は立ち止まって振り返る。

「ん、それは？」

圭介は、歩いて行き父の前に立つ。

「実はですね、パパさん。知子さんは、大学で同じ年のある男性に出会います。その男性は、知子さんの自宅へ行き、パパさんに、知子さんと結婚をせて下さー。と言います」

「結婚！　大学生で！？！？」

突然の娘の結婚話に、父は驚きを隠せない。

「そうです。正確に申し上げれば、結婚はそれから先の話になるのですが。その男性が、パパさんの前で結婚の話をして、絶対に「お前のような危険極まりない男に、うちの大切な娘はやらん」と言わないで下さい」

圭介の言葉はやけに力が籠っている。

「その男性は、パパさんが思うような危険極まりない人物ではありません。大変真面目で、いつも知子さんの身を案じ、知子さんをとても大切に思っています。いいですね。これだけは絶対に忘れないで下さい。宜しくお願ひ致します。パパさん」

そう言つと圭介はタイムマシンに乗り込んだ。圭介を乗せたタイムマシンはすぐに飛び立つ。

知子たちは、芝生の上で圭介が乗ったタイムマシンを見送る。

「あなた。さつきのジョゼフさん、なんか怖かつたわね」

母はガルネオ島で起こつた一連の出来事を思い出しながら言つ。

「時々ジョゼフさん怖い時があるのよね。私たちより年上だから、

ジョゼフさんが上目線で話すのは仕方ないけど、知子に銃が向けられた時、急に大声になつて汗を流してイタリア語で話し出したり。カプリツォに銃を向けられた時も、爆破させるつて言って、本当に爆破させちゃうでしょう。それで智さんも消えてしまつた訳だし。普段のジョゼフさんは、ハンサムで紳士で恰好いいのに……。あつとジキルとハイドみたいに2面性がある人なのね

急に父が、喉^{のど}が鳴るほど勢いよく大きく呼吸をする。

「そういう事か……」

「あなた？ どうかしたの？」

「これは娘を持つた男親でないと分からぬ問題だ」

父は拳^{こぶし}を強く握り、力強く足を動かして歩き出す。

「あなた？ 何よ、あなたまで怖くなつて」

母は訳が分からず父を追いかけて行く。

父はマフィアのように凄味を帯びた顔つきでタイムマシンに乗り込んだ。

「あなた、一人で分かつてないで私にも教えて下さいよ」

母も父のあとを追つてタイムマシンに乗り込む。

知子は、また仲の良い父と母のじやれ合いが始まつたと思いながら、タイムマシンに乗り込むため外壁に手をついた。その時。

10歳の時から、ずっと先の未来を見ていたんだね

知子は声が聞こえたような気がして振り返った。後ろには誰もない。青い芝生が広がっているだけ。

声は耳から入ったものではない。感じた、といつたほうが正しいのかもしれない。

時の王子、智が知子に囁いたのだろうか。いや、男の声ではなかった。なら、時の女神の囁きだったのか。

「知子、警察の人を待たせては悪いわ。早くタイムマシンに乗りなさい」

「はあーー」

知子は母に返事をしてから、もう一度振り返って青い芝生を見た。そこにはちょうど智が消えた場所。

「智さん。私またここに来るから、絶対にここに戻つて来るから、それまで待つってね」

そう言つと、知子はタイムマシンに乗り込んだ。タイムマシンのスライド式のドアが閉まる。

タイムマシンは、青く光る竜巻を発生させ、一瞬にして飛び立つた。

2008年。6月。

今日も岐阜県の空は晴れていた。

自宅に戻り、両親との平和な生活を取り戻した知子は、いつもの如く佳枝と美里と下校し、今日も元気に学校から帰ってきた。

大人になつたらタイムマシンを作り智を助けるという決心は今も

変わらない。

だが、勉強はとても大変だという事実もあるので、知子はとりあえず目の前の宿題から取り組んでいる。

今日も知子はランドセルから理科の教科書を出す。机の上に教科書を開くと、鉛筆を握り真剣な表情になる。

母は暖簾をそっと動かして知子が勉強している姿を見て安心する。

ただし、知子が理科の教科書に、一心不乱に智の似顔絵を描いているなんて、母は全く気づいていなかった。

終

エンディングテーマ

【題】 in this life

【歌手】 Delta Lea Goodrem

<http://www.youtube.com/watch?v=XzUNOvj8EVE>
<http://www.youtube.com/watch?v=Jep1mFJKKJ0&feature=related>

【歌詞】

I was nurtured I was sheltered
I was curious and young
I was searching for that some
thing
Trying to find it on the run
Oh and just when I stopped to
oking
I saw just how far I'd come
In this life
In this life
I've opened up my eyes
Show me everything that's been
happening
You give me light
You give me love
You give me light

Following

Three steps faint and honest f
ight (oh oh)

Two hearts that can start a
ire (yeah yeah)

One love is all I need

In this life (oh oh)

Yeah Yeah Yeah Yeah

In this life

Oh Whoah Whoa Whoa

I have faltered I have stumbled
ed I have found my feet again

I've been angry I've been sha
ken

Found a new place to begin
My persistence to make a diff
erence
Has led me safe into your han
ds
In this life
In this life
In this life
Repeat
Oh Whoah Whoa Whoa
In this life
Yeah Yeah Yeah Yeah
I was born into this world
I was put here for a reason
I was
And I'm living I'm believin

I was meant to be your girl

In this life

In this life

Repeat

Yeah Yeah yeah yeah

In this life

Yeah Yeah yeah yeah

In this life

Oh Whoah whoa whoa

In this life

Yeah Yeah yeah yeah

【和訳】

イン・ディス・ライフ

デルタ・グッドрем

私は大切に育てられ、守られてきた

好奇心いっぱい若かつた

その特別なものを探していた

必死で走り回って手に入れようとしていたのよ

Oh そして探すのをやめた途端に気づいたわ

自分がどれだけ遠くまでやつて来たのか

この人生で

この人生で

あなたは愛をくれた

あなたは光りをくれた

これまでに起きたことを私に見せてくれた

私の目は開かれて

忠実に従つ

3つのステップに、正々堂々と戦い
火をともす2つのハート
必要なのはひとつの大愛だけ
この人生で

私は過ちを犯したことも、躊躇^{つまづ}いたこともある
でも再び立ち上がったわ
怒りに燃えたことも、信念が揺らいだこともある
でも新しい出発点を見つけたわ
変わらうと望む根気強さが
あなたの力強い手へと私を導いたの
この人生で

”あなたは愛をくれた”の繰り返し

私がここにいるのには理由がある

この世界に生まれ出で

私は生きている、信じている

あなたのものになる運命だったのよ……この人生で

”あなたは愛をくれた”の繰り返し

この人生で この人生で この人生で

ノーベル物理学者アルベルト・アインシュタインは、寝転がって空を眺めていると頭に数式が浮かんだそうです。

私はそれを知った時、天才とは考えるといつ感覺無しに、物事が頭に浮かぶんだな。と思いました。

こんにちは。雪鈴るなです。

「ノーベルにこんにちは」を読んで頂き有難いぜこます。

楽しんで頂けたでしょうか？

「ノーベルにこんにちは」は、ペンネームを鴨一雲霧から雪鈴るなに変更して初めての作品となります。

そして今回は「ムーンチャイルド企画」に参加してみました。

私にとつて企画に参加するところのは初めての試みです。

期間中の私がどうこう状態だったか申し上げると、

「ノーベルにこんにちは」の投稿に明け暮れていた私は精神的にかなり追い詰められた状態にいました。

私が毎日投稿し続けていた事は読者のみなさまご存知だと思います。

投稿中も、普段の生活をしなくてはならなかつたし、仕事もあつたし、賞の応募用の小説を仕上げないといけなかつたので、睡眠時間も減らし、見たいテレビ番組も録画して「ノーベルにこんなのは」の創作をしていました。

完成したプロットを見た時、長編癖が出てしまつた。どうしよう。「ぞ・ほもぞぴえんす」のよつな、別の短編を適当に作つて投稿して逃げちゃえ。

と、狡賢い事を考えましたが、既に4月末。

長編を書くのが大好き。連載を止めてはならない。期間内に完結しなければならない。という私の性格もあり、逃げも隠れも誤魔化す事もできませんでした。

仕事と家庭と投稿の生活をする私は、日々のストレスから、来る日も来る日も、食べて食べて食べまくりました。

ゼリー、寒天、蒟蒻、乳酸菌食品。

ダイエット食品も食べまくれば太る。というのを学び、6月からは食べた分だけ体を動かそうと心に決めてあります。

「ノーベルにこんなのは」を書き終えたのが5月28日の夜。

今だから笑える話ですが、「ノーベルにこんなのは」というタイムトラベルに関する話を書いていたあの頃の私は、ニュースを見る時間も惜しんで投稿作業に専念していました。

世情の移り変わりを知らず、世の中の流れに取り残されてしまい、

製作期間は約1ヶ月半でしたが、書き終えて以前の生活に戻った私は、間髪を容れずに新しい情報に触れてしまつたので、ちょっとだけタイムマシンに乗つて未来に来たかのような錯覚に陥りました。

未来に来るところのはじりこじり感じなんだ。と仮想体験できたのは収穫だったかな。

今度は、予選に落ちた作品を推敲し直して、のんびりと連載していくつもりです。

次の投稿まで暫く時間がかかりますが、今後も雪鈴るなをどうか宜しくお願い致します。

では、またお会いできるその日まで。

雪鈴るな

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2127e/>

ノーベルにこんにちは

2010年10月8日21時45分発行